
KONAMI
MULTI-MEDIA
おとぎ銃士
赤ずきん
霧海正悟
●イラスト
GASHIN

KONAMI NOVELS

おとぎ銃士 赤ずきん

◆

霧海正悟

イラスト
GASHIN

著者
霧海正悟
SHOUGO MUKAI

1974年生。東京都在住。戦う美少女とホラー・ゲームを愛する、流浪の作家。好きな言葉は「不屈」。「みっともないあきらめの悪さ」といい換えてもよし。ひらがなの曲線が大好きな和文フェチ。も、萌える！（笑）

イラスト
GASHIN
GASHIN

元のアニメ作品が持つかわいらしい雰囲気を壊さないように心がけました。挿絵と口絵はマンガ形式という指定があり僕にとっては難易度が高かったのですが楽しく描くことができました。

COVER DESIGN / HIROSHI TAMURA(UMITSUKI DESIGN)



魔法世界ファンダヴェーレの北端にある
永遠の夜に支配された呪われし〝常闇の地〟
その中心に大魔女サンドリヨンの居城
〝滅びの魔女の城〟はあった……
うんっ、コレだネ♥
♪


幼いころのふたり、
永遠に続くはずだった幸せなとき……
ホラ、この先が……


いっただっきまーす★


まだかな、
まだかな
ドキドキ★

大事なのは呼吸、呼吸よ、と少女は自分にいい聞かせる。
赤い絨毯のしかれた長々しい廊下の半ば、石膏石の円柱の陰に身を潜ませ、廊下の先にある大扉を見張りながら。扉の向こうは〝鏡の間〟と呼ばれる広間だ。そこは、この城の城主たる大魔女サンドリヨンと、彼女に選ばれたものしか入ることを許されない空間。
（うーん。もっと大人っぽいのがよかったかしら……）
少女は身を包むドレスの裾を持ちあげて、わずかに悩ましげな表情をする。
透ける素材のフリルで飾られた、花の妖精みたいな愛らしいドレス。とっておきの一着。
……どうせ、どんなものを選んでも不安は拭えないのだけれど。
この廊下はサンドリヨンの配下である人狼兵――その名のとおり半人半狼の兵士たち――も通過するのだが、彼らは少女の姿を目にするたび、二種類の反応を示した。「なにやってるんだ？」と「またやってるのか」のどちらかである。どちらにせよ、その反応に対する反応は一貫していて、少女は声にださず、ただ可憐な唇だけを猛然と動かし、
『悪いことはいわないわ、あっち行きなさい！　生きながら地獄を見たくなければ！』
と脅す。年のころは十代半ば、金髪紫眼、幼さを残しながらも端正な面立ち。
自分の外見にはそれなりに自信はあるが、未発育な体の部位だけがちょっと不満である。全体に育ちのよいお嬢さま風であったが、ときおり円柱から顔をだし、ふたつ括りの髪をゆらしてチラチラ大扉へ視線を走らせるさまは、まるきりコソ泥見習いだ。

大扉から、……ぎ、とかすかな物音がした。
（いけない！）
あわてて頭を引っこめ、少女は息をころす。
重々しく大扉が開いていく。やっと会議が終わったらしい。規則正しい足音が近づいてくる。
少女は耳にするだけでそれが誰なのかわかる。胸の鼓動が高まる。まだまだ。もう少し。大事なのは呼吸。足音に息を合わせて動きを読む。吸って、吐いて、吸って、
（いまだわ！）
狙いすまして、少女は大胆に床をけり、円柱の陰から飛びだした。
「ヘンゼルお兄さま〜〜〜っ♪♪♪」
抱きっ☆　なんていう擬音が聞こえそうだった。甘ったるい飛びつき抱擁。
ちょうど円柱の前に差しかかった人物に、少女はこれ以上ないくらいの絵になるタイミングで抱きついた。（決まったわ、ええ、そりゃあもう決まったもの！）と内心で快哉をあげ、期待に満ちた視線をそーっと上向ける。
「——グレーテルか」
ヘンゼルと呼ばれた少年は、感情というものが完璧に欠落した声と表情で応えた。
短めの銀髪、子供らしい丸みがありながらも冷たい面立ち。
「なんの用だ？　離れてくれないか、僕はいそがしい」

「ぷー。お兄さまったら、冷たいんだから」
兄を待ちぶせていた少女――グレーテルは頬を膨らませ、めげずに言葉を続けた。
「ね、ね、サンドリヨンさまとの話は終わったのでしょう」
「ああ。それがどうかしたか」
「なら、わたしにつきあってくださらない？　お兄さま、ちっとも遊んでくれないんだもの」
「ダメだ」
ヘンゼルの返事はにべもない。
むっ、とグレーテルは不満げに眉をよせる。
そんな予感もしていたが、せっかくとっておきのドレスを選んで誘ってもまるで効果なしだ。
もちろん彼女だって、兄が現在、大魔女サンドリヨンと大いなる計画を進めているのは知っている。……神に匹敵する力〝封印の鍵〟の探索と奪取。それにしても兄は、こんな物言いをする人物ではなかった。なかったと、思う。
一年前のあの日、あの森で、ふたりそろってサンドリヨンに拾われる前までは。
十代の少年少女にとって一年というのは、ずいぶん長い年月だ。本当に遠い昔のように感じてしまう。くだらない冗談が好きで、笑うと鼻の付け根にしわがよって、いつも妹を一番に考えてくれた兄。あのころは頼りなくて、よくどちらが年上だと、からかわれた。
強くなりたい、そう願っていた兄は、サンドリヨンに見いだされ願いを叶えたのだろうか？

ヘンゼルは心をなくした人形のような面で、氷刃のごとき言葉を紡いだ。
「おまえにかまってる暇なんかない。僕は、赤ずきんの事を考えなきゃならない」
不意打ちで耳に飛びこんできた声に、ずきん、と胸が痛む。
〝赤ずきん〟――その名にグレーテルは聞き覚えがある。千年の眠りより目覚めたサンドリヨンが現在、敵対しているこの世界を統治しているフェレナンド国王、彼お抱えの戦士のはずだ。
けれど、名前以上のことはグレーテルは知らない。顔も、声も。実力も。
そして、この胸の痛みと、そんな事は関係なかった。ただ、
「……楽し、そうね。お兄さま」
「楽しい？　ああ、そうかもしれないな――」
グレーテルの複雑な内心には気づかず、ヘンゼルは、ただ鋭利な笑みを浮かべた。
もう彼女がどれだけ望んでも、けして向けてもらえない笑みを。
「ヤツは僕を楽しませてくれる」

――ここは神秘に満ちた魔法世界ファンダヴェーレ、その大陸北端。
明けることのない永遠の夜に支配された辺境、呪われし〝常闇の地(ナイトガルド)〟の中心。
大魔女サンドリヨンの居城〝滅びの魔女の城〟。
闇にこぼれる魔女の笑みと、悪意を孕(はら)んで城は息づいている。

「～～～～ッツ！」
涙をこらえ嵐のように廊下を駆け、古びた扉を突き飛ばすように押し開いた。
（バカバカバカバカ、お兄さまのバカ）
魔女の城の三階、片隅といってもよい場所にグレーテルの自室はある。ひとりで過ごすには広すぎる室内は、お菓子好きのグレーテルの趣味によりシュークリームやロールケーキを模した大きなクッションで埋めつくされていた。
部屋に入り、周りのすべてに八つ当たりしたくなるのを堪えて、グレーテルは体から剥ぎとるようにドレスを脱ぎ去った。仇のように寝台に投げつける。ちょっと背伸びした仕立ての白の下着姿になり、素肌をさらして両手を拳に固めた。
「なんてことかしら！　なんてことなの！　くやしい!!」
幼げな声を張り、駄々をこねるように腕をふる。そのままぐるりと室内を見回し、
「ランダージョ、どうせ覗いてるのでしょう、出てきなさい！」
………。
『にゃ、にゃにゃー、これはしたりにゃ。〝覗き〟なんてめっそうもないにゃ～』
遮蔽物ごしのこもった声がグレーテルに応え、天井の隅がパカリと開いて潜望鏡のような細筒が、すーっと下りてきた。伸縮&湾曲自在らしく、触手のようにうねりながらグレーテルに

向かって伸びてくる。先端のレンズが、キラリと光を放つ。
「それが覗きじゃないなら、なんなのよ、もう」
『にゃにゃ、もちろん、これは城内の安全を守るための警――』
「いいから。ちょっと来て」
『にゃはあ！』
素肌を覗かれるのは慣れてしまっているのか、グレーテルは怒りではなく呆れたように肩を落とし、おもむろに〝ぐい〟と細筒を掴んで引っぱった。天地を逆にした一本釣りみたいに天井の穴から人影が転げてくる。どすんと鈍い音を立てて腰から落下。グレーテルの冷ややかな視線に、わざとらしく目を丸くして、腰をさすりながら立ちあがる。
『やあやあ、これはグレーテルしゃま。ご機嫌いかがかにゃ？』
「いいわけないでしょ、ランダージョ」
グレーテルは子供くらいの体格をした相手をにらむ。相手は、〝ひと〟ではなかった。くたびれた探検家か墓荒らしのような服装をして、背中に大きな荷袋を背負った二足歩行の猫人だ。ファンダヴェーレでも希少種で知られる種族。年齢は不詳。性別は雄。サンドリヨンがこの城を居城にする以前から、ここに住みついていたと身の上話を聞いたことがある。
「赤ずきんの情報を教えてほしいの」
グレーテルは単刀直入に切りだす。はにゃ？　とランダージョは頬ひげをぴくぴくゆらした。

『それは別にかまわないけどにゃ……、でも、どーしてですにゃ？』
「説明はあとよっ。それより早くおねがい」
グレーテルがこれまで敵に関する情報を聞きたがったことはない。
ランダージョは首をかしげながら背中の荷袋を床におろし、なかから銀製のフタが付いた小さな丸鏡をとりだした。パカッと開けたフタの裏にはいくつもの魔法文字が刻まれている。ランダージョが指先の肉球で文字にふれるたび、ぴ、ぽ、ぱ、と奇妙な音が流れる。
待つことしばし、グレーテルはふと肌寒さを覚え、まだなのか問おうとしたところで、
『にゃッ、いま出るにゃ』
「！」ランダージョの声に息をのみ、彼が指差した壁面へ顔を向ける。
壁に向かってかざされた丸鏡から光が照射され、見慣れない背景と人物を映しだした。鏡に記録されていた映像は、ひとりの小柄な少女だった。グレーテルと同じ年ごろに見える。戦士というより羊飼いでもしているほうが似合いの少女だ。白い羽根飾りの付いた革製の兜と、身を包む上下に分かれたローブが、その名を示すように真紅に染められている。
両手に、よく鍛えられた片刃の剣を持っていた。二刀使いであるらしい。
てっきり隠し撮りかと思ったが、赤ずきんはこちらに向かって、ふに、と笑ってみせた。
やっほーと手をふったりして、敵に記録されていることを警戒する様子はまるでなし。
「……て、天然、なのかしら。それとも大物？」

『甘くみてはダメにゃ。この赤ずきんこそ、フェレナンド国王より聖なる『四つ葉騎士章（エレメンタルクローバー）』を与えられた最強の騎士〝三銃士〟のひとり。主な武器は、ひとつに合わせることで鋏型（はさみがた）となる双剣グリムテイラーと銃型弓（ボウガン）スレイプニルにゃ。これまで倒された人狼兵は数知れず、付いたあだ名は――『狼殺しの紅き死神』』

映像のなかの赤ずきんは、その場でくるんと一回転し、決めポーズをとろうとしたが失敗してずっこけ、照れ笑いしている。敵を油断させる演技なのだろうか。話を終わりまで聞いたグレーテルは、やがて素直な感想を口にする。

「驚いたわ……、わたしと変わらない年齢の子なのね」

このとき彼女の内面では〝驚き〟の感情が即座に〝燃料〟へと変換され、胸の奥の炉心（ろしん）へと注ぎこまれ、嫉妬（しっと）の炎を燃えあがらせていた。自分と同じくらいの年齢の少女が、兄の関心（こころ）を惹きつけている、なんて。そんなの、そんなの、そんなの！

「さっき、どうして赤ずきんのことを知りたいか聞いたでしょう？」

ゆっくりと息を吐きだし、グレーテルはランダージョを横目で見やった。

『にゃ？』

「決まってるわ。倒すのよ……!!」

グレーテルは足下に転がっていた一抱えはあるシュークリーム型のクッションを、両手で掴みあげた。頭上にかかげ、ぷるぷると腕に力をこめ、敵意もあらわに赤ずきんの映像めがけて


コレが?
にゃ。

投げつける。ぼむ、と鈍い音を立てて壁にぶつかり、クッションは床に転がった。
グレーテルはサンドリヨンとフェレナンドの争いにも、〝封印の鍵〟にも、もっといえば赤ずきんにも興味などない。ただ『誰かが兄の心を占めている』、その誰かに自分ではない名前が入ったことが許せないだけだった。認められないだけだった。
ならば——、
「ええ、そうよ。お兄さまの気持ちをとり戻すの。赤ずきんを倒して。このわたしが！」
三つの倒置法からも決意のほどがうかがえた。
『ほ、本気にゃあ？』
「当然よ。だから、さっさと居場所を教えなさいな、ランダージョ」
『この世界にはいないにゃ』
「…………え？」
ランダージョの意外な言葉に、グレーテルは大きくまばたきする。
『赤ずきんは現在、魔法世界ファンダヴェーレを離れて別世界にいますにゃ。フェレナンド国王の命により、そこで〝封印の鍵〟を体内に宿した『スズカゼ・ソウタ』という少年を守っているようですにゃ〜。ちなみに現地では〝トウキョウ〟と呼ばれている都ですにゃ』
——別世界の存在。もちろん、その知識はグレーテルにもある。
この世界では有名な伝承だ。はるか古（いにしえ）のとき、ひとつだった世界は神の手でふたつに分けら

れた。サンドリヨンと兄が、少し前まで魔女の城を離れていたのも、向こうの世界に行っていたからだと聞いている。そこに赤ずきんも行っている。

魔法世界ファンダヴェーレと、科学世界エルデ。めぐり逢うはずのない双子世界。

グレーテルは、くっと細いあごを持ちあげ、

「じ、上等だわ。このグレーテル、お兄さまのためならどこへでも行ってみせましょう！」

〝乙女心〟の三文字を背負い、コブシを利かせてひとりで燃えあがる。

燃える彼女をよそに、ランダージョは『にゃぁぁ……』と呆れたような声をもらした。だがすぐに、これは自分にとってもチャンスかもしれないにゃあ、と、こっそり片目をキラーンと輝かせる。……かくして舞台は、それぞれの思惑を孕んで別世界の都、〝トウキョウ〟へと移ることになるのだが。

その前に。

そういえば下着姿のままのグレーテルは、思いだしたように可愛いクシャミをもらした。

「くちんっ」

NAKED LITTLE RED RIDING HOOD

おとぎ銃士
赤ずきん



author : SHOUGO MUKAI
illustration : GASHIN

幼いふたりは、いまもあの森をさまよい続けているみたいに——。

一幕

——そして夜が明け、運命の一日がはじまる。

1

赤ずきんへ

きみの大好きな実がなる〝ポランポランの木〟の種を送るよ
上手に育てて　そちらの方々にもごちそうしてあげるように

フェレナンド

穏やかな時間が流れる、東京のある朝。
赤ずきんが国王からの贈りものを見つけたのは、鈴風草太が学校へ出かけ、しばらくしての

ことだった。この世界にやってきて以来世話になっている鈴風家の庭、その片隅にある涸れ井戸のそばに、それは落ちていた。

「ふぁ……ふぃぃ。あれ？　これって」

あくびを噛みころしながら、赤ずきんは井戸の陰に隠れるように転がっていた小さな布袋を拾いあげる。ヘソだしのタンクトップに短パン、色はともに黒、素足にぺたんこなゴム草履という無防備きわまる格好だ。普段着である。革兜もかぶっておらず、短めの栗色の髪を左右のこめかみ辺りで結わえ、ぴょこんと立てている。

布袋の口紐をほどいて逆さまにふると、ひと粒の種と折り畳まれた手紙が出てきた。

なにかな、と首をひねりつつ手紙を広げる。文面に目を落とした赤ずきんはパッと表情を明るくした。頭の上、ひと房だけ変な方向にくるんと曲がっているクセ毛をゆらし、「わあ、国王さまからだよ！」と声をあげる。ぴょんと跳ねる。

「ポランポランの実。甘くって、おいしいんだよね～……はふぅ」

頬に手をそえ、うっとり。食いしんぼ丸だしである。もちろん、国王からの手紙もよろこぶべきことだ。

その小さな布袋が涸れ井戸のそばに落ちていたのは、もちろん理由があった。

鈴風家の庭の井戸は、いま、魔法世界ファンダヴェーレと繋がっている。

それを成したのは、〝封印の鍵〟を宿した人物を守るため、三銃士・赤ずきんの派遣を決め

たフェレナンドだ。

そして——彼女はこの世界にやってきた。

さておき赤ずきんは早速、植えさせてもらうことにする。庭に生えている他の草木の邪魔にならない奥まった場所を選び、穴を掘って種を落とす。そっと土をかけ「お水お水」と縁側へとって返し、そこから鈴風家の居間にあがった。醤油の匂いが似合いそうな庶民的な居間。

縁なしの丸メガネをかけたパジャマ姿の少女が、あくび混じりにテレビを観ていた。生地の薄さを考えなければ、そのまま外出できそうな絹(シルク)のパーティドレス風のパジャマだ。艶(つや)やかな青銀(せいぎん)の長い髪に寝癖が跳ねている。日に焼けた畳に斜め座りして、湯飲みを片手に、年期を感じさせる食卓の上の器からクッキーを摘(つま)んでいた。

「あっ、いつまでもパジャマのまんまでー。だらしないよ！」

「だって。わたくし、朝は弱いんですもの。まだ頭がぼーっとしてますわ、……あふ」

「もう、わたしより先に起きてたのに……」

赤ずきんは居間を横切りながら小言をいう。しかし少女は叱られて背筋を正すどころか、溶けかけの雪だるまのように食卓に上半身を寝そべらせた。頬を天板に押しつけ「うふ、冷たくて気持ちいいですわ〜」なんていっている。かなりダメな感じである。

「まったくー、しょうがないなぁ、白雪は……」

ブツブツいいながら赤ずきんは居間を抜けて廊下を進み、台所に入った。

あちこち古さを感じさせながら隅々まで手入れが行き届いている場所だ。流しの横に伏せられていたグラスを手にし、蛇口をひねって水を溜める。足早に庭に戻り、種を植えた上から少しずつ慎重にかける。すると、にょき！　といきなり芽が生えた。〝ポランポランの木〟の芽は、見る間に赤ずきんの背丈くらいの幼木にまで成長する。さすがは魔法世界の植物。
「…………？　なにやってるんですの～」
「へへー。ほら見て、フェレナンドさまから届いたんだよ」
居間からのぼやけた声に、赤ずきんは育ったばかりの幼木を指差して、はにゃーんと笑う。
「あら、それはあなたの大好きな……。それで、わたくしには？」
「なんにもなかったよ？」
「…………まあ、不公平ですわ～～」
卓上に人差し指でのの字を書きながら少女はぶーたれた。
それを苦笑しながら見ていた赤ずきんは、ふと背後をふり返る。首の後ろに何かを感じたように、そっとふれた。首をかしげ、視線をさまよわせる。――気のせいかな？
鈴風家は都心にほど近い住宅街にあり、周りには同じような一軒家が建ち並んでいる。立地条件にしては広めの庭から眺められる街並みの向こうには、高層ビルの連なっている風景が見えた。緑豊かなファンダヴェーレ育ちの赤ずきんには、かなり異質に思える景観だ。

骨董品的な双眼鏡から目を離し、グレーテルは呟いた。

「ふぅん、思ったより鋭いわ。三銃士は伊達じゃないってことかしら」

でも、大丈夫。気づかれはしない、絶対に。ここは空が近い感じさえする、地上二百メートル。鈴風家のある住宅街を一望できる高層ビルの屋上、一般人は厳重に立ち入り禁止の場所だ。その屋上の端ぎりぎりにグレーテルは立っていた。浮遊感さえ覚える立ち位置で、逆巻く強風に髪とワンピースドレスを弄ばれながら、佇んでいた。

グレーテルの肩には、四つ足の子猫に姿を変じたランダージョが乗っていた。全身が黄みがかった茶色で、両前肢の先だけが靴下を履いているようにまっ白。いかにも雑種っぽい姿は、エルデの人間社会に紛れるには都合がいい。

『まあ、赤ずきんはヘンゼルしゃまが好敵手と認める唯一の相手だからにゃ～』

「……むっ」あごにしわをよせるグレーテル。

『残念なことに、味方にもヘンゼルしゃまを満足させる腕の兵士はいないにゃ』

「――ふん、だ。わたしは認めないわ。認めて、たまるもんですか」

『にゃにゃ、息子の嫁をいびる姑みたいなのにゃあ』

「もうっ、バカにして！　お黙りなさい、ランダージョ！」

妙にエルデかぶれな揶揄を口にするランダージョを叱り、グレーテルは下唇を噛んだ。左肩から斜めがけにしている、古びた感じの黒革のポシェットに片手を這わせ、ぎゅっと力をこめ

た。冷たい風が肌を切る。上空を行くジャンボジェット機の轟音が、鼓膜を破らんばかりにびりびりと響いてくる。高所であることは平気だが、油断すると体ごと風に持っていかれそうだ。
改めて双眼鏡を覗いた。レンズの丸い視界のなか、赤ずきんはうなじを掻きながら、居間にいる少女と会話している。その話し相手についてもランダージョから説明は受けていた。グレーテルの部屋で、ランダージョは赤ずきんの次に彼女の記録映像を壁に映したのだ。
──エルデに渡るつもりなら、この人物のことも知っておいたほうがいいにゃ〜。
青銀の長い髪、縁なしの丸メガネをかけた清楚な顔立ち、丈の長いしとやかなドレス姿。右手に、天使の輪のような、ほのかに発光する穴あきの円盤を持っていた。
──これは誰かしら、ランダージョ。
──赤ずきんと同じ、フェレナンド国王より〝四つ葉騎士章〟を与えられた三銃士のひとりにゃ。精霊力を結晶させた光輪キルクイトゥスを用い、多くの魔法を唱える〝氷雪の蒼き大魔法使い〟白雪姫ですにゃ〜。その魔法の腕は人狼兵から大いに恐れられ、味方からも少し恐れられているようなのにゃ。
──味方からも？　へえ……、まあ、興味はないけれど。
そっけないグレーテルに、ランダージョは喜劇役者みたいに肩をすくめただけだった。
（そうよ、わたしの敵は赤ずきんだけなんだから）
グレーテルは無用な回想を打ちきり、双眼鏡の向こうに集中する。赤ずきんは幼木に向き直

り、白雪姫はテレビに顔を向けたまま器へ手を伸ばし、盛られているクッキーを口に運んでいた。それを見るグレーテルは、そろそろ頃合いね、と好戦的な笑みを浮かべる。

正面からの強い風に前髪をあおられ、形のよい額をさらし、

「覚悟はいい？　お兄さまをたぶらかす泥棒猫め！　わが怒りを受けて滅びるがいいわ！」

喜々として芝居がかった大仰なセリフを放つグレーテルだった。

白雪姫は温くなった緑茶を〝寿〟印の湯飲みからすする。

テレビ画面は、派手なテロップとともに欲望と愛情にまみれた芸能ニュースを流している。

「……んーそれにしても。このコメンテーターさまは、いちいち大げさに話しすぎますわ。そのわりにネタの切り口は甘いですの。他人さまの隠しごとを暴く前に、ご自身の鬘について堂々公表するべきですわ、はむはむ（↑クッキーを食べる音）」

画面につっこみながら楽しむという、堂に入った有閑っぷりまで発揮していた。

庭にいる赤ずきんは幼木の根元にしゃがみこみ、グラスに残った水を注ぐのに集中している。幼木は芽をだした勢いはもうないが、まだまだ成長を続けていた。この調子なら、もしかすると夜中には成木になっているかもしれない。白雪姫は湯飲みを卓上に置き、薄焼きクッキーが盛られた籐編みの器へ手を伸ばす。一枚摘み、口もとへ運んで、ふと手を止めた。

縁なしの丸メガネをちょんとずりあげ、こんがり焼けたそれを観察する。

誰でも知っている、判子みたいな丸っこい鼻が付いた、これは……、
「――ブタさん、ですの？」
正解。二本足で直立するブタ型のクッキーだった。
細かい部分までよくできていた。蛮族のように獣の毛皮をまとい、片手に大きな肉切り包丁。両目は粒チョコなのだが、これがどうにも目つきが悪い。いま摘んでいる一枚と器にあと二枚、計三枚ブタ型のクッキーが混ざっているようだ。
これらは草太が登校していったあと、近所の主婦が器ごと差し入れてくれたものだ。
それにしても、だ。
「いまいち、美味しそうじゃないですわ……、これ」
『ナンダヨ、不味ソウデ悪カッタナー』
「あっ、いえ不味そうとまでいう気はないんですの、すみません――て、あら？」
白雪姫が、わたくし誰と会話してるんでしょう？　と疑問に思った瞬間『大事ナノハ味ダロ、食ッテカラ決メヤガレ、ギャハハ！』と指の間から下品な笑いがあがる。同時に、硬直する白雪姫の口にブタ型のクッキーが自ら飛びこんできた。
むぎゅる、と舌をつねられ信じられないほどの激痛が走る。
「○×△□↑→↓←ッッ!?」声にならない悲鳴。
白雪姫ははげしく咳きこみ食卓に吐きだす。『ツテテ、乱暴ダナァ、オイ』とぼやいてブタ

型のクッキーは起きあがった。籐編みの器から残り二枚も卓上におり立ち、クレイアニメに登場する粘土人形のようにズンタッタ～♪　と愉快なステップを踏む。どれもまったく同じ造形で、どれもまったくかわいげがない。
三枚のクッキーは『ゲヒヒヒヒ』と邪悪に笑い、横一列になって白雪姫を見上げた。
左から順に、
『ヨーヨーネーチャン！　男ニ飢エテソーダナァ』
『遠慮スンナッテ、俺タチガ可愛ガッテヤルゼ？』
『オウ、足腰タタネークライニナ、ギャハハハ！』
ばっちり連携した、俗っぽい挑発セリフだった。とはいえ、白雪姫も歴戦をくぐり抜けてきた最強の騎士〝三銃士〟のひとりだ。ここはサンドリヨンがなにか仕掛けてきたと判断すべきで、ならば、彼女がこんな安い挑発に乗せられるわけもない。〝氷雪の～〟の異名が示すとおり冷静に、機知に富んだ皮肉で軽やかにやり返すなど朝飯前――、
「むぅーっ！　失礼ですわ、焼き菓子の分際で！　わたくし男に飢えてなどいませんの！」
残念、燃えまくっていた。楚々とした面立ちに怒りもあらわに食卓から立ちあがる。
「？　どうしたの、白雪！」幼木の根元から赤ずきんが顔をあげた。
「ええ、赤ずきん！　サンドリヨンの――」
ぴしり。

白雪姫がいい終るより先に、三枚のクッキーに一斉にひびが走った。その割れ目から硫黄を燃やしたような黄みがかった怪しい煙が噴出する。もうもうと居間を満たす煙のなか、涙目になった白雪姫のぼやけた視界で、三つの大柄な人影が膨れあがる。もとがクッキーとは思えない質感の肌と獣の毛皮、鬼のごときブタ面、物騒な輝きを放つ肉切り包丁。
「けほ、けほ、な、なんですの……？」
食卓が押しつぶされ、〝寿〟印の湯飲みが畳に転がり、器に残ったクッキーが散らばる。
ひくひく鼻を動かし、ブタ面の魔物たちは左から順に、
『俺タチャ、モンスタークッキー三兄弟！　長男ノ〝ダグ〟！』
『次男ノ〝デグ〟！』
『三男ノ〝ドグ〟！』
名乗りをあげ、三枚——、いや三兄弟は声を合わせて吠えた。
『〝ブタ〟ダカラッテ、語尾ニ「ブー」ヲ付ケルト思ッタラ大間違イダゼエエエッ!!』
「だっ、誰もそんなこといってませんわ!?」
内心ではけっこう思いながら、白雪姫は懐から魔法発動体の光輪をとりだそうとした。できなかった。
「…………、そーいえばそうでしたわ。がーんですの」
起き抜けのままのパジャマ姿である。薄手のパーティドレス風である。お似合いである。

「いえ、そうではなくてっ」装備なしである。光輪キルクイトゥスは二階の寝室だ。

八畳ほどの居間に白雪姫とブタの三兄弟、すぐに空間は埋まってしまう。赤ずきんの姿を求めて庭へ視線を向けるが誰もいない。どこへ？　考える間にも白雪姫は居間の角、テレビ画面の前に追いつめられる。背後で涙の記者会見放映。正面、次男〝デグ〟が包丁を水平になぎ払い白雪姫を狙う。ひえっ、と悲鳴をあげて反射的に体を沈めた。

『ううっ、はい、生まれ変わっても一緒になろうねって――』

白雪姫の頭を掠め、背後のテレビが一撃で粉砕される。……あとで魔法で直さないと！

「もう、白兵戦はわたくしの本分ではないんですわっ」

不満を口にしながら白雪姫は三兄弟の配置に目を配る。頭の弱そうな外見のくせに三方隙なくふさがれている。長男〝ダグ〟と三男〝ドグ〟が左右から同時に斬りかかってくる。右、大振りする〝ドグ〟の脇下をかい潜るように転がってよけた。庭と、廊下に続く引き戸、どちらへ駆けるか迷ってしまい、その一瞬でまた囲まれる。素早い！

なんの、と白雪姫は胸の前でパンッと両手を合わせた。

「甘くみないでほしいですわ、キルクイトゥスがなくとも簡単な魔法なら……ッ」

『ソウハ』『イカネェ』『ゼ！』と続けざまに包丁の刃が襲いくる。息の合った連続技だ。

精神集中する余裕を与えない作戦か。単純だが魔法使い相手にはかなり有効だ。

攻撃をかわすたびに白雪姫のパジャマが裂かれる。少女らしからぬ成熟した体のライン。


オレタチャ
ブタノ
3兄弟!!

（――いやーん、サービスしすぎですわ、わたくし！）

赤ずきんを見失ったのはグレーテルも同じだった。

彼女が使える唯一の魔法――というか魔法生命体――〝モンスタークッキー〟、なかでもブタの三兄弟は一体作るのに一週間かかっている最強の駒だ。クッキーから実体化した三兄弟が白雪姫へと襲いかかる、わずかの間、その場面に焦点を合わせた。

「そうじゃないったら、もうバカバカ、そっちはどうでもいいの！　狙うのは……」

と、じれったい様子で、グレーテルは双眼鏡の狭い視界を庭へふり向けた。

はっと息をのむ。庭に人影がない。

（赤ずきんは⁉　逃げた……？　ううん、そんなわけないわ。でも、どこへ？）

短い時間とはいえ標的から目を離したことを悔やむ。

肩の上のランダージョは、われ関せず、と鈴風家の居間に視線を注いでいた。たいしたことに遠見の道具は必要ないらしい。恐いほど真剣な眼差しをして、尻尾をぴんと立て、頬ひげをぴくぴくゆらし、感心した声をもらす。

『……にゃにゃあ。白雪姫は清楚な顔に反して、美味しそうな体をしてるにゃあ☆』

「⁉　ランダージョ、オヤジ臭いことといってる場合じゃないわっ」

『むむむ！　すこし黙っててほしいにゃ、グレーテルしゃま！　いま大事なトコにゃ～』

小娘はすっこんでろい、とでもいいたげな迫力だ。
反射的にグレーテルは「ごっ、ごめんなさい」と謝ってしまう。しかしすぐに、
「っ、……そ・う・じゃ・な・く・て！」
最後の〝て！〟に合わせて思いきり子猫のひげを引っぱった。かなり痛そうだ。
ランダージョはワンピースドレスの肩から転げ落ち、あわてて胸もとにしがみついている。
すました顔のグレーテルに悲鳴じみた非難が返ってきた。
『ツッ！　なにするにゃ！　グレーテルしゃまといえど邪魔するなら許さ――』
「猫鍋って美容にいいのよ？」
『にゃんでもご命令ください、一日中、靴の裏でもどこでも舐めますにゃ～～』
「その媚びた笑みはやめなさい。……って、そうじゃなくて」
グレーテルは胸もとにぶらさがっている子猫へ視線を落とす。
「赤ずきんの姿がないの。ランダージョ、どこへ行ったか見てないかしら」
『それなら居間の上の部屋にゃ。見てなかったにゃ？』
あっさり答えが返ってくる。弾かれたようにグレーテルは双眼鏡を向けた。たぶん武器をとりに戻ったんにゃー、とランダージョは無責任にいう。居間の真上、二階の部屋。窓が開けられ午前の風にカーテンがはためいている。影になって室内は見えない。双眼鏡の視界に三兄弟の頭が掠める。庭へ逃げた白雪姫を追って出てきたらしい。

「上よ、上だってば。ああもう、早く気づくのっ」
グレーテルは危なっかしく身を乗りだし、届きもしない指示を飛ばす。と、三兄弟の長男が顔をあげた。カーテンがゆれる二階の窓を見上げる。グレーテルの意志が届いたのか、室内からなにかの気配を感じたのか、弟ふたりに白雪姫を任せて体の向きを変え、体勢を沈めた。二階くらいの高さならひと飛びだ。跳躍する――。
そうよ、あなたはやればできる子だわっ！　と親バカな期待をグレーテルが胸に抱いたとき、室内から投げられたぺたんこなゴム草履の片方が、長男の額に命中した。二階の高さまで達した巨体にさらにもう片方のゴム草履が飛来して、ぺたんっと命中する。
次いで、

室内から弾丸のように飛びだした赤ずきんの両足が長男のブタ面にめりこんだ。

何度もヴァルにいわれたのに、すっかり油断していた。
――いいか、赤ずきん。グリムテイラーの片方くらいは常にそばに置いておけ。
口うるさい相棒（パートナー）が今朝、街の見回りに出る前あれほどいっていたのに。
（ごめんね、ヴァル）
赤を基調とした革兜、上下に分かれたローブ、長靴、戦闘装束に身を包み、赤ずきんは双剣

グリムテイラーを手に、二階まで跳んできたブタ面に渾身の飛びげりを食らわせた。完璧なカウンターの一撃。けりを見舞った顔を足場に、さらに高く跳ぶ。眼下の醜くゆがんだブタ面には長靴の底の〝肉球まーく〟が跡になっている。

空中で体勢を崩したブタ面の魔物――三兄弟の長男が地面に落ちていく。庭にはあと二体の魔物、次男と三男と、あられもない格好になった白雪姫がいた。白雪姫は庭の奥、〝ポランポランの木〟の幼木のそばにいる。心配は、実はそれほどしていなかった。しとやかな見ために反した白雪姫のしたたかさはよく知っている。

「――おまたせ、白雪！」

計ったように、赤ずきんは白雪姫を背中にかばう位置に、頭を下げた低い姿勢で着地。すぐに顔をあげる。正面に次男と三男、その背後に頭から落下して呻いている長男、その向こうが居間。鈴風家の庭に塀はなく周囲からは丸見えだ。

さいわい辺りに人気はなかったが、一刻も早くけりを付けねば。

グリムテイラーを凛々しくかまえる赤ずきんの全身を見やり、白雪姫はすべてを悟って、

「赤ずきん、わたくしにもキルクイトゥスをっ」

「なかった！」正面に顔を向けたまま、短く答える赤ずきん。

「なかった、ってそんなわけないですわ。嘘ですの、同じ部屋に置いてあったはずですわ」

……ほえ？　思わぬ反論にふり返る赤ずきん。

「だ、だって、ちゃんと探したよ。でも、見つからなくって」
「……もしや、自分の分だけで満足してしまった、とか？　ああっ、自己中心的ですわ〜」
「そんなことしないよ！　白雪じゃないんだから」
「まあ、そんな。わたくしほど博愛精神に満ちた人物はなかなかいませんわ☆」
むぅぅーっ、とふたりは鼻先がふれるほど顔を近づけてにらみ合う。
ブタの三兄弟、次男と三男から赤ずきんの背中はガラ空きだった。白雪姫もまた同僚の顔をにらみつけ、ほかは目に入っていない。次男と三男は顔を見合わせ、同時にうなずき、そろーっと接近していく。三銃士ふたりは、ふたたび口論に熱中しはじめている。
「大体ねー、白雪は草太くんが迷惑してるのにすぐ布団に潜りこもうとして——」
一歩、接近。
「あら、あれは照れ隠しですわ。あなたには男心の機微がわからないんですの？」
二歩、さらに接近。
次男と三男は顔を見合わせ、そろいのブタ面に『ニヤーリ』と嫌らしい笑みを浮かべる。狙いを外しようがない位置にまで近づき、ゆっくりと肉切り包丁をふりあげていく。こんな簡単でいいのだろうか、思わず笑ってしまいそうになる。柔らかな肉を断つ感触を想像して口の端から涎があふれる。いかにもブタっぽい。
もう一度、顔を見合わせ、絶対のタイミングを計る。その瞬間は、いま、すぐに——。

「白雪はね、もうちょっとわがままを直さ……」
『死ネ』『ヤァ‼』
ドシュ！×2
ふりおろされた一対の死神の鎌——二本の肉切り包丁は、誤ることなく赤ずきんの背中に突き立った。凍りついたように一切の動きを止める赤ずきん。だが、その眼前の白雪姫は、なぜか驚いた様子もなく冷ややかな眼差しをしている。すべてわかっていたような目。あまりのショックに麻痺してしまったのだろうか？
白雪姫は視線をあげ、並んだブタ面を見やった。
「あなたたち、不意打ちとは感心しませんの。……ですが、それは、」
〝それ〟の意味するものがなにか、次男と三男はすぐにはわからなかった。
凍りついたような赤ずきん。
縁なしの丸メガネが中指でちょんとずりあげられる。
「——残像ですわ」
『ナ』『ニィ⁉』
肉切り包丁を突き立てられた赤ずきんの姿がフイッとかき消える。理解しがたい白雪姫のセリフを、次男と三男がそれでもわずかに理解しかけたときには、大きく後方宙返りを打って宙に舞っていた赤ずきんが、天地逆になった姿勢で二体ともに必殺の間合いに捉えていた。細い

三日月のように閃く双剣グリムテイラーの刃。
一体につき一閃。それだけで。
……ふらつく頭をようやく持ちあげた長男が見たのは、クッキーの質感に戻り、ボロボロと崩れ落ちる次男と三男の姿だった。ひざを折り、二本の刀をふり抜いた姿勢で音もなく着地した赤ずきんの手際は、一切、見えなかった。
長男のブタ面には、理解できない出来事に対する反発心だけが浮かぶ。
『ク、ク、クソガキガァァァ!! バカニシヤガッテェェ!!』
知性の欠けらもない怒声を吐き、長男は手に残っていた肉切り包丁の柄を握りしめた。跳ねるように立ちあがり、地響きを立てて赤ずきんに襲いかかる。
あわてずグリムテイラーを地面に突きたて、赤ずきんは空いた両手を前へかざす。掌を向かい合わせ「スレイプニル!」と呼ぶ。胸の前でロープを留めているグリーンエメラルド色の〝四つ葉騎士章〟から光がこぼれ、両手の間に銃型弓スレイプニルが顕現する。弓といいながら撃ちだすのは矢ではなく高密度に圧縮された精霊力の弾だ。
しっくりと手になじむ銃把を両手で握り、右手の人差し指を引鉄にかける。
『オオオオオオオォォォォ!! 魂、トッタラァァァ!!』
「――あげないよ。わたしの命は、誰のために使うかもう決まってるの!」
やくざな長男に赤ずきんは決然とそういって引鉄をひいた。

視界を灼く凄烈な光――!!

ややずんぐりした、太めで短い銃身から、まばゆい精霊弾が放たれた。

ブタの三兄弟、最後の一体、長男〝ダグ〟の胸に弾丸が吸いこまれる。まったくの無音。その一点から全身に浄化の光が広がり、いかつい巨体が無害な光の粒子へと分解されていく。粒子は、みなクローバーの葉の形をしていた。

ゆるやかに螺旋(らせん)を描きながら立ちのぼっていく。拡散し、消えていく。

そして最後に長男は、憎々しげに、なのにどこか清々(すがすが)しく、

『ヤ、ヤ、ヤラレタブゥ〜〜〜〜〜〜〜……ッッ!!』

と断末魔をあげて消滅した。

白雪姫は、ぽそっと「まぁ、最後の最後で『〜ブー』っていいましたわ」と呟いた。

「終わったよー、白雪」

ほよん、と笑いながらふり向く。終わってみれば、まさに〝圧倒的〟だった。

「でも……、いつもの人狼兵じゃないって、ほんとにサンドリヨンの手先だったのかな」

「おそらくは。わたくしたち三銃士を狙って、というのが気になりますけど」

赤ずきんに答えながら、白雪姫はクッキーが盛られた器を差し入れてくれた人物のことを考えていた。しかし、〝近所の主婦〟ということ以外は思いだせない。魔法で操られていたのか、持ってくる途中にこっそり混ぜられたのか。嘆息し、白雪姫は居間を見やった。

「はあ。復元魔法でもとに戻すのも、骨が折れそうですわ」

台風が過ぎたような惨状だ。しかし、放置すれば草太に怒られる。いや、心優しいあの少年は怒らないかもしれないが、彼の保護者を自認するしっかり者の幼なじみの少女が黙っていないだろう。しかたない、魔法を使うためには光輪を持ってこないと。

まったく。自分にいい場面はなしなのに、あと始末だけはしなければいけないなんて。

「……赤ずきんが、キルクイトゥスさえ持ってきてくれれば。わたくしも……」

「だから、探したけどなかったんだってばー！」

「そんなはずはないといいましたでしょう。ええ、わたくしの誇りにかけて！」

文句ありまくりな白雪姫に、赤ずきんはぷくーっと頬を膨らませる。だが二階、居間の真上の寝室にあがった白雪姫は部屋中ひっくり返しても光輪を発見できず、赤ずきんが偶然、大判のファッション通販カタログに、栞として挟まれているのを見つけた。

挟んだのは、もちろん白雪姫であって、なのに本人すらそのことを忘れていた。

「ほら、ありましたわ。わたくしの誇りにかけて☆」

「そんな誇り、ネズミに齧られちゃえ！」

グレーテルは双眼鏡をかまえたまま、固まっていた。

肩の上のランダージョが、彼女の柔らかい頬を前肢の肉球でふにふにと押しても、まるで反

応がない。地上二百メートルの高層ビルの屋上は、冷たい風が吹きすさび、グレーテルの心の荒廃っぷりを具現化しているようだった。
「あれが……、お兄さまが好敵手と見なしている、相手」
赤ずきんが二階から現れ、三兄弟すべてを倒すまで一分しか、かかっていない。
白雪姫との口論を抜きにすれば、三十秒もかかっていないだろう。そして、あの三兄弟はグレーテルの最強の駒だった。
わななく唇から、ふるえる声がもれる。
「あれが、『狼殺しの紅き死神』――」
庭から移動した赤ずきんの姿を求めて双眼鏡の視界を上にふる。居間の上階、カーテンが開けられた窓辺に、その姿はあった。窓に背中を向けて誰かと会話している。とてもじゃないが、その後ろ姿は凄腕の戦士に見えない。ピコピコハンマーで殴るだけで、「きゅう」とかいって倒れそうだ。なのに。
――と、いきなり、赤ずきんがふり向いた。
「ッッ……!?」目があった、とグレーテルは思った。合うはずがないのに。
その瞬間、グレーテルの目に、赤ずきんは血まみれの赤いフードをかぶった骸骨の姿、いわゆる死神として映った。
『カカカカ！　イマからそこへ行って、オマエの魂を刈りとってやろうカ？』

「……い、い、いやぁ……っ」
グレーテルは喉の奥でねじれた悲鳴をもらし、双眼鏡を放りだして後ろへ転び、きゃんっと声をあげて屋上に尻餅をついた。スカートがはだけ、バランスの崩れた肩から飛びおりたランダージョが『縞々にゃ』と役得そうな顔をする。
グレーテルはやや未発育な胸を服の上から手で押さえて、深呼吸をくり返した。少しずつ落ちつく。バカげた幻覚がゆっくりと失せていく。それに合わせて羞恥心がこみあげ、耳までまっ赤になる。――敵に〝恐れ〟を抱いてしまうなんて！
『グレーテルしゃま～……』
そばから見上げてくるランダージョに、グレーテルはいまさら強がった視線を返す。
「な、なにかしら？」
『ここはやっぱり、はじめに提案した作戦で行ったほうがいいと思うにゃあ』
「ダメよ。正々堂々、正面から勝たなきゃ意味がないわ」
ぷい、と子供っぽくそっぽを向いた。自作の魔物(モンスタークッキー)に襲わせるのが正々堂々なのかは謎だ。
きっぱりいったグレーテルだが、迷いを表現するように黒革のポシェットにふれる指がそわそわ動いている。それは少女が持つには大人びて、古びた風合いのモノだ。大口をあけた竜の模様が焼きつけられている。なかには城を発つさい、ランダージョの勧めでサンドリヨンの宝物庫から勝手に持ちだした魔法道具が詰まっていた。

ポシェット自体もそうで、名称は《ビッグイーター》。底なしの収容能力を有している。
『あのぉ、グレーテルしゃ――』
ランダージョが言葉を重ねんとしたとき、グレーテルはそれを遮るように立ちあがった。
スカートの汚れを手で払って、頬を赤らめたまま、
「そ、そうね。でも、勝たなくちゃはじまらないのも事実だわ。でしょ？　ランダージョ」
『にゃ？　……あ、そ、そ、そうなのにゃ！　大事なのは勝つことにゃ～』
意外とあっさり折れたことに驚いたか、やや遅れてランダージョが賛同し、ワンピースドレスの肩に飛び乗った。そしてグレーテルは気持ちのスイッチを切り替えるように、ふたつ括りの髪の片方を手で跳ねあげ、改めて屋上の端ぎりぎりまで進む。双眼鏡を使わず遠くへ投げた視線の先は、鈴風家では、なかった。
上空から見るとH型をした白壁の校舎。その北側に体育館と屋外プール、東側に校庭。
エルデの公的な教育施設『都立絃車(いとぐるま)中学校』だ。あそこに〝封印の鍵〟を宿した少年がいる。
グレーテルはためらいなく屋上をけって、軽やかに、風のなかに身を躍らせた。
獲物目がけて疾走する犬の尻尾のように髪がなびく。
「――いい？　やるからには正々堂々、容赦なく卑怯(ひきょう)な手でいくわ。ランダージョ！」
その声に、肩の子猫は『はい～、GOGOにゃあ☆』と調子を合わせた。

流れる雲がずいぶん低く、のしかかってくるような圧迫感がある。
(なんだろ、胸がざわつくよ……)

2

鈴風家の二階、赤ずきんは空を見上げていた。
上空では風が強いのか、流れる雲の速度もかなりのもの。
強風にちぎられバラバラになりながら、雲の断片が転がるように空を渡っている。天気が悪いわけじゃない、それどころか目に痛いほど澄んだ青空だ。なのに……、赤ずきんは落ちつかない顔で片手の拳を胸に押し当てた。
(お婆さんがいってたっけ。こんな日は、ひとの心も荒れるから戦(いくさ)が起きやすいって)
気をつけていたほうがいいかな、と赤ずきんは呟いた。

3

四時限めの授業のはじまりを告げるチャイムが鳴った。
空梅雨と予想される今年は、六月半ばになってもまだ風に春が感じられる、と鈴風草太は思う。紘車中学2-Aの教室。制服姿の生徒たちがぞろぞろと各自の席へ戻っていく。しかしチャイムが鳴り終わっても、教室前方のスライド式扉から教師が入ってくる様子はない。

そのまま数分が過ぎる。次の授業・現代国語の用意を机の上に済ませて、中央よりの自席に大人しく座っていた草太は、隣席の女子生徒・木ノ下りんごに話しかけた。白のブラウスに細めの赤いネクタイ、薄い紺のスカートという学校指定の制服姿のりんごは、退屈したように教科書をめくっていた。
「ねえ、りんご。遅いね……、先生が遅刻なんて」
「次の授業、泉先生でしょ。居眠りでもしてるんじゃないかな?」
あっさりといわれ、草太は苦笑めいた表情になる。りんごは思いだしたように視線をあげる。
「ほら、草太。いまのうちに今日当てられそうなところ、読んでおかないとダメだゾ」
同い年でありながら、りんごは草太をまるきり年下のように扱う。耳にくすぐったい特徴的な声に威厳を加えるためめか、語尾に『〜だゾ』を付けるのが彼女が年上ぶるときの癖だ。「う、うん……」と草太は押しきられたように返事をして、教科書を手にとった。
ふたりは家族ぐるみの近所づきあいをしている幼なじみだ。なんの縁か幼稚園から中学二年まで常に同じクラスで、現在は席まで隣同士。りんごはそれを、〝何歳になっても頼りない草太を世話するための神さまの思召し〟と考えている節がある。
「——?」教科書を開いた草太は、ふと視線を感じて手を止め、ふり向いた。
最後列の窓際という生徒に一番人気の席、そこに座っている女子生徒と視線がぶつかる。
(姫川、さん?)

中学二年のわりに大人びた顔とスタイルの生徒だ。薄く化粧までしている。名前は姫川リサ。ストレートの髪を明るい茶色に染め、制服をルーズに着崩している。噂によると遊び好きらしく授業をさぼることも多い、草太とはあまり接点がない生徒だった。チャイムが鳴り終わるぎりぎりに教室に入ってくるのを見た。

その彼女が熱心にこちらを見ていたと思うと、目が合ったとたん、あわてて顔をそらした。

なんだというのだろう?

(あぶないあぶない、怪しまれるところだったわ)

グレーテルは窓の外を眺めるふりをして、そっと息を吐いた。

いくらバレる心配はないとはいえ、用心はするべきだ。グレーテルは左手の甲に目を落とす。そこには細かい魔法文字がびっしり記された星形のシールが貼られている。宝物庫から持ちだした魔法道具のひとつ、名称《トリック・トラップ・シール》。

二枚ひと組のシールで、もう一枚のシールを貼った人物の姿を借りることができる。どんな魔法で調べられても見破られることはなく、声も変えてくれるが口調までは修正してくれない。だが、そこまで気を回さなくてもいいかと思う。気負いすぎは逆にボロをだしかねない。

姫川リサという生徒の姿を借りることにしたのは、制服姿で校外を歩いているのをたまたま見かけたからだ。彼女のことはランダージョが知っていた。魔法で眠らせ、シールを貼り、服

を交換したあと、本来の姿に戻ったランダージョが背負ってどこかへ隠しに行った。
グレーテルは机の上に広げたノートを持ちあげ顔を隠すようにして、前に向き直った草太をこっそり観察する。怪しさ全開だが本人はごまかせているつもりである。昨日、ランダージョがグレーテルの部屋で提案した作戦は、ここまでは順調だ。
——つまり赤ずきんを直接狙うのではなくて、クラスメートに化けてスズカゼ・ソウタに近づき〝封印の鍵〟を奪うにゃ。相手の仕事の邪魔をし、失敗させる、それも立派な勝利なのにゃ〜。
小声で、それにこっちにも都合がいいにゃ、と続いたがグレーテルは気づかなかった。
ランダージョは白雪姫の次に、グレーテルと同じ年ごろの少年を壁に映した。
——この子のなかに神をも超える力が眠ってるの？　いまいち、ぱっとしないわ。
それがグレーテルが草太を見た第一印象だった。全体に、ぽやーんとしたあどけない空気を持っていて、面倒をみてやらないといけない気持ちにさせてくれる。頼りない感じ。趣味じゃない。そんなふうにケチをつけながら眺めているると、妙な親近感。
少し考えて、ああ、とわかった。優しげで、どこか儚げな感じが兄ヘンゼルに似ているのだ。
簡単に気のせいにできるほど、ちょっとだけ。
いまの、ではない、自分たちがサンドリヨンに拾われる前の。
（でも、やっぱりお兄さまと違って、ぱっとしないわ）

ノートの影でそう結論づけて、なぜかわずかにほっとする。視線をずらす。隣席の少女が草太の胸もとに手を伸ばし、かいがいしくネクタイのゆがみを直してやっている。なんだかその姿も昔の自分に重なった。その少女のこともランダージョは説明してくれた。グレーテルの部屋で、どこかウキウキした様子で草太から映像を切り替え、

——一応、教えとくにゃ。スズカゼ・ソウタの幼なじみのキノシタ・リンゴにゃ。

肩の高さで黒髪をそろえている庶民的な少女だ。おぼこい容姿ながら包容力を感じさせた。

——この子がどうかしたの？

——スズカゼ・ソウタの事情を知ってる数少ないエルデ人にゃ。可愛くて気に入ってるにゃ。

——……ふぅ、それだけならわざわざ教えなくていいわ。

呆れた吐息をついたが、赤ずきんたちのおかげでストレスを溜めているらしい、と聞いて親近感がわいた。グレーテルは頭をふって回想を打ち切り、なかなか教師がこない教室を見回す。雑談をはじめ、席を立つ生徒もちらほら。これは早くもチャンス到来か？

グレーテルはノートを机上に戻し、片手を、机のなかに忍ばせているポシェットへ伸ばす。ごそごそと手を入れると、内部はとろりとした水のような魔法的亜空間。求める魔法道具が吸いよせられるように手にふれた。ひとふりの短刀。柄を、そっと握りしめる。

ランダージョ曰く、それはサンドリヨンが所持するなかでも、とくに強力な魔法道具だ。呪いの短刀、名は——《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》。

収穫者の刃という名を冠されたこの短刀は、正確には道具ではなく、短刀の形をした魔法生物であるらしい。だからだろうか、柄を握る手には、蛇かトカゲでも掴んでいるような冷たくヌメる感触が伝わってくる。どくん、どくん、と脈打っているようにさえ感じる。長く握っていたい気はしない。けれど、これであの少年をひと突きさえすれば。

(すべてはお兄さまのため！　あなたに恨みはないけれど、悪く思わないでね、スズカ――)

勢いよく短刀を引き抜こうとして、右隣の席から誰かに見られているのに気づいた。

「……ッ!?」

グレーテルは息をのんで手を柄から離し、ポシェットから抜く。

ガタッ、と机のなかで手をぶつけた。こっちも驚いたが、向こうも驚いたらしい。おろすと長そうな髪を結いあげた、大人しそうなあまり印象に残らないタイプの女子生徒だ。グレーテルの鋭い反応に顔をそらし、ごまかすように筆箱から消しゴムをとりだしている。

だが手をすべらせて床に落っことし「あうっ」と小声をもらした。ニンジンの形をした消しゴムが足もとまで転がってきたので、グレーテルは拾ってやり「はい。……かわいい趣味ね？」と相手の心を読むように見つめて差しだす。女子生徒は頬を赤らめ、びくびくと受けとる。小さな小さな声で「あ、あ、ありがとう」といった。どうやら怪しまれたわけではないらしい。

そうグレーテルが思ったところで教室前方の扉が開き、教材を抱えた女教師が入ってきた。見るからに運動神経の鈍そうな女性だ。なんだかふわふわした空気をふりまいている。

「はーい、みんな怒ると恐い鬼先生の登場だぞー。席についてくださいね～」
その妙なノリに呆れた様子で、自習を期待していた生徒たちが、未練がましくだらだらと席へ戻っていく。どうやら、早速のチャンスは失われたらしい。ふん、命拾いしたわね、とグレーテルは草太の背中を見ながら思う。けれど、なぜか、それほど残念ではなかった。
(――まあいいわ。だって、これからいくらでも機会はあるはずだもの)
その理由を、グレーテルは、そう思うことにした。

そのとき草太は、命拾いしたかも、と思っていた。
当然、グレーテルに狙われていることは知るよしもない。現代国語担当にして2－A担任の天然女教師・泉先生が教室に入ってきたとき、草太はりんごににらまれている最中だった。ネクタイを直してもらったあと教科書に戻って、ふと「そういや赤ずきんたち、おとなしくしてるかなあ」と呟いたのがよくなかった。
油断した。それは、りんごの不機嫌スイッチを入れる鍵単語(キーワード)だと知っていたのに。
――ねえ、草太。あの子たち、いつまであの家にいるの？　パンダのベレー帽だか風鈴の紙だか知らないけど、おかしなことに巻きこまれて草太が不良にでもなったら、あたし、草太のご両親に申しわけないんだゾ！
草太の母は、草太が幼いころに亡くなり、研究者の父はめったに家に帰ってこない。

——でも、りんごだって、こないだ守ってもらったのに……。風鈴の紙って？
——ほら、ぶらさがってるでしょ、風鈴の下。紙がひらひらーって違ぁう！
——え、わっ。
——かっ、からかうと怒るからね！　あたし、草太をそんなふうに育てた覚えないゾ！
年上も年上、姉どころか母代わりのつもりなのだった。
——からかってなんか。りんごがいったんじゃないか……。
——こらっ、草太っ。
しつけのなっていない犬を叱るように、りんごは草太をにらみつけた。
こうなると全面降伏。草太は黙るしかない。
赤ずきんたちが鈴風家の井戸を抜けてこの世界にやってきたのは、いまから一週間前のことだ。どこにいるかわからない〝封印の鍵〟を宿した人物を探し、守るため、と赤ずきんはいい、なんの偶然か必然か、その人物とは草太だった。
とき同じく、〝封印の鍵〟を求めたサンドリヨンの片腕、ヘンゼルと名乗る魔法使いの襲撃を受けた。草太とともにいたりんごも巻きこまれ、窮地に陥ったふたりを救い、ヘンゼルを退けたのは、まさしく赤ずきんたちの力による。
そして、これからも草太を守るため、赤ずきんたちは鈴風家の居候となったのだ。
しかし常識的なりんごは、この一連のあれこれを〝おかしな連中の揉めごとに草太が巻きこ

まれた〟とごく大雑把に括ってしまった。しかも、その括りには括弧書きが付いていて、それは（自分がしっかりして、草太をおかしな連中の仲間にはさせない）というものだった。さらにそこに、絶対！　と太字で注意書きがされていた。

なし崩し的に居候は認めてしまったが、せめて学校にいる間は忘れていたいらしい。

……もし赤ずきんたちが学校まで押しかけてきたら大変なことになっちゃうな、と、りんごににらまれながら草太がそんなふうに考えたとき、泉先生が入ってきたのである。いかにも教職にある人物のような地味めの服装をして、焼きたてパンのようなふんわりとした空気を身にまとって。

「それじゃ、委員長。号令おねがいね～」

のんびりと声をかける。授業開始の号令はクラス委員長であるりんごの役目だ。

「はい、それではみなさん」

挨拶を済まし、泉先生はにこにこ顔でスチール製の教壇に置いた出席簿に手をそえる。

しかし、出欠をとりはじめることなく生徒たちを見回し、もったいぶるように間をあけた。

「では質問ね～。いま、みんながほしいと思っている新しいお友だちは、この（といって黒板に黄色のチョークを走らせへたくそな人物画を描いた）全国制覇をめざす荒くれ番長ですか？それとも、この（といってまた黒板に白のチョークでへたくそな人物画を描いた）学園の支配をもくろむ怪しい超能力少年ですか？」

草太とりんごは、この瞬間、なぜかものすごく嫌な予感がしたらしい。
正確にはもうひとり、教室の後ろの隅で嫌な予感に襲われた生徒――といっていいかどうか――がいたのだが、それに気づいたものはいなかった。男子生徒の数名が「そんなのどっちもやだって、泉ちゃん」と投げやりに声をそろえた。しごく当然な反応だ。
「まあ、なんて正直な子たちでしょう～♪」
泉先生はたちまち上機嫌な顔になって、ぱむっと胸の前で手を合わせる。そして、
「そんな正直者のあなたたちには、両方の新しいお友だちを紹介――っ」
クラス中がどよめいた。
というのは冗談で～、と泉先生は顔の横で、きゅぴーんっと人差し指を立てる。
「今日は、とってもカワイイ転校生をふたりも紹介しますよ～。さ、入って！」
楽しげなその声を合図に、教室前方のスライド式扉が横にすべった。
「みなさん、こーんにーちわ～～～っっ♪」呼吸のそろった、ふたりの声。
続けて、学校指定の制服の胸に四つ葉のクローバー型アクセサリーを付けた、少女の姿をした爆弾がふたつ、教室に投げこまれた。それは生徒たちのなかから芸術的なまでの精度で草太とりんごだけにダメージを与えた。
とくに、りんごには大ダメージ。どっかん、という音が聞こえてきそうなほどだった。
「な、な……っ!!」とりんご。「あ、し……っ!?」と草太。

正確にはもうひとり教室の後ろの隅で爆撃を受けた生徒――といっていいかどうか――がいたのだが、それに気づいたものはいなかった。少なくとも見ためだけは無反応だったために。
そして、その少女型爆弾……ではなく生身の少女ふたりは、教壇に近づき、泉先生に並んで生徒たちのほうを向いた。栗色の髪の少女は、はぁいっと片手をあげ、青銀の髪の少女はスカートの左右を摘んで、ちょいと持ちあげる。栗色のほうから元気よく挨拶をはじめた。
「わたし、赤ずきん！　よろしくね！　草太くん、りんごちゃん、やっほー」
「わたくしは白雪姫と申しますの。ちなみに草太さまとは、らぶらぶですわ。うふっ」
ふたたびクラス中がどよめいた。
ただし、それは人名にしては違和感があるはずの名前に対してではなく、転校生たちの〝草太とりんごの知りあい〟発言に対するものだった。とくに白雪姫の〝あたしー、草太とラブラブってゆうかー（←歪曲イメージ）〟発言に対するものであった。野次馬まるだしな男子生徒のひとりが「ら、ら、らぶらぶとはっ？」と禅問答のように質問する。
「らぶらぶ、それは……。公の場では無回答こそが真の回答となるものですわ☆」
含蓄あるんだかないんだかな白雪姫のセリフに、うおお、と男子の間で叫び声があがった。
その、いつ隣のクラスから苦情がきてもおかしくない騒ぎにも、泉先生はクラスに転校生の知りあいがいたことを純粋に喜んでいるのか「まあ、みんないい子たち」と母性の笑みを絶やさずにいる。草太はさておき、りんごが黙っているのは変な話だが、草太がちらりと隣を見る


はーい!
フフッ

と彼女は一時的に塩の柱になっていた。あとが恐い。
見てはいけないものから目を逸らすように教壇のほうを見ると――、
「誕生日は?」「3サイズを!」「デートして!」「草太より俺のほうが!」「いや俺だ!」
早くも赤ずきんと白雪姫は年ごろの男子からの煩悩攻撃にさらされていた。
異国風なルックスが日本学生の制服にはややミスマッチな白雪姫も、親しみやすい風貌によるものか違和感をまるで感じさせない赤ずきんも、どちらもそれぞれに魅力的であった。草太は、あちこちから飛んでくるジェラシー光線を頭を低くしてやりすごす。
(そっかあ、やっぱりかわいいんだ、ふたりとも)
と、初対面から一週間たったいまになって、草太は感心していた。

「あら、ダメですわ。わたくしは草太さまのものですから。ふふ」
渦中の白雪姫は涼しげな笑顔を男子生徒にふりまいている。しとやかな口からこぼれる大胆発言は多くの男子を刺激し、草太への風当たりを更に強くしてしまった。その横で、やはり明るい笑みを浮かべながら、赤ずきんは白雪姫の制服の袖をこっそり引っぱる。
《白雪、わたしたちの目的忘れてない? やりすぎだよ~!》
その声なき声は、小型化させた胸の〝四つ葉騎士章〟を介して、三銃士が交わせる思念の声だった。白雪姫は草太に「んー、ちゅっ♪」なんて口づけを投げながら、赤ずきんを見ること

なく思念の声で応える。それは意外なほど真剣な色に染まっていた。
《わかってますわ。でも、これも転校生としていち早くクラスにとけこむための策ですの》
《う〜〜、本当かなぁ？　なんかムダに目立っちゃってるような……》
赤ずきんもまた「赤ずきんちゃ〜ん♪」と呼ぶ生徒に、朗らかな笑みで手をふりながら、じとっと疑惑の念を返す。ふたりが転校生を装ってこのクラスに潜入してきたのは当然、理由があった。白雪姫が「『ブタの三兄弟は陽動であり真の狙いは鈴風草太で、だとすれば放っておいてはまずい』と、わたくしの灰色の脳ミソがささやいてますわ」と推測したのだ。たしかに可能性は低くない、と赤ずきんも思う。
《でも、転校生のふりまでする必要あったのかな。草太くんたち驚かせたみたいだし》
《だから、それもいいましたわ。無用に草太さまたちを不安にさせないために、そして、その上できっちり身辺警護するためにも、エルデの文化見学と称して同じクラスの生徒となるのが一番いい、と》
白雪姫の思念は、自信に満ちあふれていた。ぴかぴかした金色に色付いている。
転校生になりすますのはそれほど難しくなかった。紘車中学の最高権力者である校長に、白雪姫が精神操作の魔法をかけただけだ。頭に魔法の花（無害・一般人には見えず）を生やした校長はなんでも願いを聞いてくれるようになり、すべての手続きから制服の手配まで行ってくれた。白雪姫の理論と手際には、一切の隙がない。たしかに、そうも思える。

《ふふ、けれど……》
やにわに金色の念が薄い赤へと変わりはじめたので、赤ずきんは《えっ？》となった。
《せっかく、こうして草太さまの級友になれたのですわ。なんでも、〝ぎゃるげー〟というエルデの芸術文化によると、この学校という施設は多くのラブロマンスを生みだす舞台であるらしいですし……》
いや、それは薄い赤ではなかった。もっと甘ったるくて、ある種タチの悪い色だった。
《ああもう、ここから、わたくしと草太さまのときめきなメモリアルが――♪》
《……ねー白雪》
赤ずきんは冬の向日葵みたいな――つまり明るいのだがどこか冷たいような？――笑みを浮かべて白雪姫の肩に手を置いた。なにも知らないものの目には、わたしたちって仲良しだよねー、ねー、と周囲に見せつけるような感じで顔を見合わせる。
本気で怒らせるとフェレナンド軍一恐い、といわれる赤ずきんは、真顔で、
《フェレナンドさまにいいつけるよ！　いい？　お仕事中は――〝桃色禁止〟！》
そして、ここに至ってようやくりんごが正気をとり戻した。開口一番、席をけって立ち、
「こらっ、あんたたちっ」と、しつけのなっていない犬を叱るようににらみつける。
赤ずきんと白雪姫はただきょとんとし、なぜか草太だけが、びくっと肩をすくめていた。

もちろん、りんごが怒ったからといって、なにも変わらなかった。
そして、最後列の窓際、姫川リサ――グレーテルは顔を伏せ、必死に衝動をこらえていた。
波乱含みの四時限めが終わるまで、詐欺(さぎ)にでも遭(あ)ったような顔で。

4

がつん、と音を立てて錆(さび)の浮いた鉄柵に背をもたれさせる。
借りものとはいえ服が汚れるのは嫌うはずの彼女だが、そんなことを気にする余裕もない。
「…………(いらいら)」
沈黙。片手で掴んでいる黒革のポシェットが、強く力をこめられて、ぎうっと音を立てた。
昼休みを迎えた紘車中学の校舎は、どこも浮かれたような空気に包まれ、ざわついていた。
彼女がいる、ここ校舎屋上を除いて。
この学校の校舎は大きく三つに分かれている。縦二列、一・二年の教室が入った西校舎と三年の教室および音楽室や理科室、家庭科室などが入った東校舎、これはどちらも三階建て。そして、ふたつの建物を、職員室や校長室のある二階建ての中央校舎が繋いでいる。いま彼女は西校舎の縦長の屋上、そのまんなか辺りで外側の鉄柵にもたれていた。
東校舎の向こうにある校庭から、サッカーやトスバレーに興じる生徒たちの声が聞こえる。

「…………（いらいら）。お兄さま、お兄さま、お兄さま…………ふう」
彼女は心の万病に効くとっておきの呪文をくり返す。ぽっと胸が暖かくなって落ちつけた。
『ま、やつらが来るのは十分考えられた展開なのにゃあ』
「（きっ）なんですって、ランダージョ」一気に冷えた。
『にゃ！　グ、グレーテルしゃまが三兄弟をけしかけたから、こうなったのにゃ』
グレーテルの足もとでジュースの空き缶——たまに屋上にくる誰かのものだろう——を転がしていた子猫姿のランダージョが、頭上からの不機嫌な声に抗弁した。そこには正当性があったので、グレーテルは「うくっ」と喉を鳴らし言葉を続けられない。
「あそこまで堂々と乗りこんでくるなんて。さすがに予想外だったわ」
親指の爪を噛み、茶色革の上履きの先で屋上の地面を突く。驚かされたのが悔しいらしい。
『でも、《トリック・トラップ・シール》は見破られないにゃ。策ならいくらでもあるにゃ』
「そうね、ランダージョ。で、このあとは、なにがあるのだったかしら」
グレーテルは気をとり直して確認する。
『昼休みのあとは五時限めの数学、その次が体育で……大縄跳びだったかと』
「おおなわとび？　どういうものなの」
『大人数で、回転する縄の内側に入っていつまでも跳ぶにゃー』
グレーテルは目をぱちぱちとさせる。

「へえ、それで?」
『以上なのにゃ～』
「…………」
『…………』
「……なっ、なんの意味があるのかしら、それ……」
その意味不明さにショックを受けたように青ざめて、グレーテルは感想をもらした。だが舐(な)めてはいけない、大縄跳びとはシビアな競技である、ということをランダージョは熱弁した。
いわれても、グレーテルはぴんとこない。というより、
「もうっ、競技はどうでもいいんだわ、ランダージョ！　大事なのは赤ずきんを倒すことよ」
勢いをつけてグレーテルは鉄柵から背を離した。ランダージョが訂正を入れる。
『いやいや、大事なのは〝封印の鍵〟を奪うことにゃ』
「…………。え、ええ、わかってるわ、当然よ！　でもこの場合、同じことでしょう?」
強気なグレーテルの顔には、嘘です、赤ずきんのことで頭いっぱいでした、と書いてあった。
『心配なのにゃあ……』
ランダージョの顔には、おいおい、この小娘に任せてて本当に大丈夫か?　と書いてあった。
グレーテルはその失礼なメッセージには気づかず、わざとらしいノリで、
「それじゃ段取りを確認しましょう、ランダージョ！　はりきっていかなきゃ」

奪・封印の鍵！　と決意を改めた面差しは高貴ですらあったが、すぐにきゅるるーとお腹が鳴って台無しになる。しかたない、なにせお昼どきだ。グレーテルは少しだけ悩んでから、作戦会議をひとまず中断することに決めた。校舎内に戻るため、階段を目指して歩きだす。階段への出入り口は屋上の北端に建つ小さなコンクリートの建物。

いま大事なのはランチだ。それも、どんな手段を使ってでもデザート付きの！

『……あのー、グレーテルしゃまくれぐれも、先走った行動だけは……』

グレーテルの横についてちょこちょこ四つ足を動かしながら、ランダージョが見上げてくる。

「しつこいわ。わかってるっていってるでしょ、ランダージョ」

いらいらと足を止め、グレーテルは後ろめたさの反発からか、怒ったように腰に手をあてランダージョを見下ろす。ランダージョは肩をすくめた。グレーテルは「んっんン」となにかごまかすように喉を鳴らし、顔をあげると、一匹の大型犬が立ちふさがっているのを見た。

「――？」　首をかしげる。さらり、とふたつ括りの髪が肩を流れる。

一瞬前までそこには誰も、なにも、いなかった。いつの間に？

『よーう、ランダージョ』

短いなかにあり得ないほどケンカ腰なニュアンスをこめて、その犬は人語を喋った。

牙を剥いて凶暴な笑みを浮かべ――瞬間、閃くように地面をける。雷のごとく迫撃してくる。

空気の裂ける、ごうっ、という音をグレーテルは聴く。え、と思う。


――さま
お兄さま
お兄さま
……うんっ
よーう、ランダージョ

『そんな変化で、己の鼻から逃げられると思うなっ、甘いんだよ‼』
情けも容赦も問答もない、百雷のような強襲。
牙爪牙爪爪牙ッ！
まず狙われた子猫姿のランダージョの体が一秒にも満たないわずかな時間で、ミキサーにかけられたように引き千切られ四散する。立ちつくすグレーテルの左斜め下、這いよる影のように無音で位置どり、体勢を低く低くした大型犬。ぎろりと見上げてくる、それだけで殺傷力のありそうな眼光。吠える。
『やっと仲良く連んでたってことは、てめえもサンドリヨンの——‼』
飛びかかってくる。グレーテルは反射的にポシェット《ビッグイーター》を盾にした。あと十分の一秒それが遅れていれば、烈火のごとき前肢の爪になぎ倒されていただろう。爪の一撃にグレーテルの手からポシェットが弾きとばされる。きゃあっ！　と悲鳴がもれる。
黒革が破れなかったのはさすが魔法道具だが、フタが開き中身がいくつか屋上にばらまかれた。腕ごと持っていかれたかと思った。
『ふん。ウチに戻りゃ、書き置きひとつ残して誰もいないから変だとは思ったがな』
大きくよろめいたグレーテルから五メートルほど離れた位置に着地する。がっ、と四つ肢の爪を屋上の地面に食いこませ、いつでも飛びかかれる体勢を保って、犬はグレーテルをにらみつけた。逃がす気はおろか、女子相手に手加減する気すら感じさせない。正体がバレたことも

不味いが、その前にグレーテルは、この場を無事切り抜けられる気がまるでしなかった。
唐突にランダージョの言葉が脳内で再生される。
――ああ、そうにゃ。最後に厄介なやつを教えておかないとにゃ～。
と、いってりんごの次に、ランダージョはさらに別の記録映像を壁に映して見せたのだ。
――このゲジゲジ眉のおっかないオオカミは、赤ずきんの……
いや回想に頼らずとも、もうすべて思いだした。ランダージョによる、もっとも警戒しなくてはならない相手。格闘力だけなら赤ずきんより上。正面からやりあうのは可能なかぎり避けるべき、と――。
背筋に冷たい汗が流れる。
そしてグレーテルは、大きな勘違いをしていたことにも気づいた。反射的に口を吐く。
「ッ、あなた、犬じゃ……」
『ねぇよ!! 己は三銃士・赤ずきんの相棒、誇り高きオオカミ族のヴァルさまだ!!』
全身のバネをきかさせて青灰色の毛並みの犬――否、オオカミが、跳んだ。
（くっ、やられる――ッ？）

二幕

1

「やられたよ〜〜〜っっ。りんごちゃんの手料理おいしすぎる〜〜っっ」
西校舎、二階の南端にある2－Aの教室。
りんごの弁当箱から里芋の煮っ転がしをひとつもらった赤ずきんは、咀嚼し、飲みこんだとたん机に突っぷし、購買部で買いこんだ総菜パンの山に埋もれる。一口ハンバーグを齧っていた草太は、そんな赤ずきんの様子を柔らかい笑みで見ていた。
「ちょ、ちょっと。……おだてたってダメだゾ、あたしは許してないんだからね！」
とまどうように箸先を宙に迷わせ、りんごは無理やりに険のある小声をだした。昼休み。草太とりんごの机を向かい合わせ、近くの二席も借りて、赤ずきんと白雪姫を加えた四人で食事中である。男子生徒の多くが同席を望んだが、りんごがすべて追い払った。
辺りをはばかりながら、りんごはさらに小声でいいつのる。

「文化見学なんて、なに考えてるの。まさか、おかしな揉めごと学校まで持ちこむつもり?」
三銃士ふたりは、まさかー、と笑う。なかなか鋭いりんごである。
「ほら、草太もなにかいわなきゃダメだゾ!」
りんごお手製のハンバーグをじっくり味わっていた草太は、ふいに促され、きょとんとした。
「え? ——うん、今日もすごくおいしいよ。りんごのお弁当」
邪気のないまっすぐな表情でいう。草太の弁当は、りんごが毎日自分の分と一緒に作っているものだ。正面からの予想していなかった言葉に、りんごは頬を赤くした。まさしく彼女の名のとおりに。そういうことじゃないのに……、という口調も、どこか弱々しい。
それよりも! と強引に話題を変えて、りんごは総菜パンの山に埋もれた赤ずきんに声をかける。
「もしかして、あの犬っころまで連れてきてないでしょうね」
「犬? ヴァルのこと? やだな、りんごちゃん、ヴァルは犬じゃないってば」
山を崩して頭を起こした赤ずきんは、ふにふに笑いながらパンの袋をあける。ヴァルは赤ずきんの無二の相棒のオオカミで、幼いころからともに育った間柄という話だ。荒っぽい言動だがまじめな性格で、草太の生活圏の見回りを日課にしている。
「『学校に行く』って書き置きしてきたから、もう知ってるとは思うけど……どうかなぁ?」
煮え切らない返事に、りんごが複雑そうな顔をした。そんなふたりを尻目に、白雪姫はイス

を動かし必要以上に草太によりそう。そっと草太の手に手を重ね、ごく自然な所作で箸をとりあげ、弁当箱から厚焼き卵をひと切れ、摘んだ。「さ、草太さま、おひとつどうぞですわ」と、さながら旦那さまに奉仕する若妻の風情だ。

教室のあちこちで、男子生徒の「ぎゃ〜！」とか「ぐおお！」などの悔しげな断末魔があがる。女子の間でも、なんで草太が？ とひそひそ交わされる声。一種異様な空気に占められた教室の中央で、幸せそうな顔の白雪姫に促され、草太はおずおずと口を開いた。

だが、卵焼きが入る寸前。

「——ッ！」

向かいの席のりんごが電光石火で箸を伸ばし、白雪姫の箸運びをがっちり食い止めた。

「……が、学校でそんなふうに甘やかすのはよくないゾ！」

「あら、家でならいいんですの？」

「！ ……あっ、いや、それは、その、なんていうか……」

家でなら、たまにやっていることもなくもないりんごは、わが身をふり返り言葉に詰まる。

卵焼きが三分の一ほど入っているため口を閉じることのできない草太は、ふたりのやりとりが終わるまで待つしかない。あごが疲れる。そういえばりんごの卵焼きは、赤ずきんの相棒のオオカミの大好物でもあることを、ふと思いだした。いま、どうしているだろう。

……オオォ——……ン

はじめはただの風の唸りかと草太は思った。それにしては、なにか犬の……あるいはオオカミの遠吠えのようにも聞こえた。考えすぎかな、と問うように視線をめぐらすと、赤ずきんが席をけって立ちあがる。草太は知らなかったが、それは常人には聞こえないはずの特殊な吠え声だった。赤ずきんは、まばたきよりも短く白雪姫と視線をまじえ「わたし、お手洗い行ってこよーっと！」と明るくいって駆けだす。

放っておけない、という気が強くして、草太もあとに続こうとする。卵焼きが床に落ちる。

「あら、いやですわ、草太さま。花摘みについていくなんてマナー違反ですわ☆」

白雪姫が上品に戯れるように、けれど、しっかりした力で草太の腰にすがった。離さない。

顔を赤くして硬直する草太に、りんごは「?」と不思議そうな顔をしている。

教室から出た赤ずきんは、昼休みの人出でにぎわう二階の廊下を駆ける。

「――――ッッ」

だせるかぎりの全速力。北側の突き当たりにある階段をめざして。

疾風のように速度をあげるが、通行する生徒の誰ひとりにも掠りすらしない。『廊下を走ってはいけません』の標語の前をケンカを売るような速度で通過する。吠え声は人語と違って当然、多くの情報をこめることはできない。それでも十分だった。これまで聞いたこともないような、せっぱ詰まった響きだけで。

ヴァルの咆吼は、彼がいま、ただならぬ危機に陥っていることを赤ずきんに伝えた。
声がしたのは西校舎屋上から。気ばかりが焦る。
（ヴァル……っっ!!）

2

――間に合わなかった。
北階段を駆けあがり、赤ずきんは鍵の壊された鉄扉をけり開け屋上へ飛び出る。
「そ、んなぁ……」
そこにあったのは無惨な姿に変わりはてたヴァルだけだった。物言わぬ冷たい相棒の体に歩みより、彼女はそっと抱きあげて「ヴァル！　ヴァル～！」と慟哭した。そして続けて声をあげた。わずかに頬を赤らめる。
「どうしたのっ、なんか、かわいくなっちゃってるよ～～～っっ?‌?」

3

「まあ。かわいいっていうより、おマヌケって感じですわ♪」
屋上に踏みこんだ白雪姫は、その惨状に、育ちのよい遠慮のなさで感想をのべた。
赤ずきんに遅れること、およそ五分。




まぁ、ヴァル？
うん……

草太をなんとかごまかし――いや、なんとか、というほど骨は折っていない、彼は素直だから――、昼休み終了のチャイムが鳴ると同時に、トイレから戻りの遅い赤ずきんを呼んでくる、と教室を抜けだした。閑散とした屋上に三銃士ふたり以外の人気はない。

北端、校舎内へとおりていく階段のすぐ前。

白雪姫のそばで赤ずきんが地面に座りこんで、相棒の冷たい体をぎゅーっと抱きしめていた。

明るい栗色の髪が、春の日差しを受けて蜂蜜色に輝く。

「でも、驚きですわ。あのヴァルがヌイグルミに変えられてしまう、とは」

さらっと、あまり驚いてなくも聞こえる白雪姫の言葉。

赤ずきんは自分で胸を圧迫しているため、くゅ、と変な声をだしてうなずく。飽きることなく、物言わぬ体に回した腕に力をこめる。

当然だ、ヌイグルミは喋らない。体温もない。

丸まっちい二頭身の、ふかふかなボア生地のオオカミ人形。青灰色の毛並み、ゲジゲジ眉みたいな顔の模様。

それは、たしかに笑えるほど戯画化されたヴァルだ。

なにかを訴えるように、ぴくっぴくっと体が動いていた。わずかに意識はあるらしい。

しかし、伝えようとしている内容はさっぱりだ。

ヴァルが落ちていただろう場所には、半ばで力尽きた伝言が残っている。生々しい彼の爪痕

で『クソ、やられた。敵は……』と三文ミステリー小説みたいに。そして〝敵は〟の横に子猫の爪のような痕で『主婦ナターシャ（パイ作りが趣味）』と書きそえられていた。白雪姫はあごに手をそえ、ふむ、と首をひねる。
「パイ作り……、なんの意味があるんでしょう」
「あのね、白雪」と座ったまま赤ずきん。
「（はっ）それとも、こうして混乱させるのが狙いですの？」
「ちょっと、白雪ー？」
「だとすると、敵は愉快犯の性質を持っている、と」
「むむむ」
「なら、犯人は――」
「うーっ、わんわんっっ!!」
「ッッ!?（びくっ）」
思索に沈んでいたところへ大声――いや犬声？――をだされ、驚いた拍子にメガネがずれる。ぴょこんと跳ねるように立ちあがった赤ずきんは、頭のクセ毛をゆらして白雪姫に向き直り、
「ヴァル、どうにかなんないかなぁ？」期待半分、不安半分。
「んん、ん〜。かけられたのが魔法なら、大抵は、わたくしにも解除できるのですけど」
メガネの位置を直しながら、白雪姫は、青銀の長い髪に片手を差しいれる。小型化させて髪

のなかに隠していた光輪キルクイトゥスをとりだす。ひと声かけてサイズを戻し、光輪をヌイグルミにかざして短く呪文を唱え、キィンと爪で弾いた。
解析魔法発動。やがて、ある程度、結果はわかっていたように――、
「やはりこれは対抗魔法でも解除できませんわ。〝呪い〟とでもいうべきものです」
生物の人形化。おそらく強力な呪具……魔法道具によるもの。
わかったのは、そこまで。だが悲観的な事実をあっさりいいすぎたか、赤ずきんは不服そうな顔になった。彼女は腕のなかのヌイグルミに目を落とす。ふかふかのボア生地。いまにも噛みつきそうな目つきと牙も布細工で愛らしく表現されている。体の脇にタグが付いていて、フアンダヴェーレの古い言葉で『水洗い禁止』と書かれていた。
白雪姫は、ふぅっ、と息を吐き、上品な笑みで噛んで含めるように、
「効果だけ見れば似ているようにも見える魔法と呪いですけど、このふたつはまるきり違うのですわ。魔法はどんなものでも、定まった理論や法則の積み重ねで成立します。なので、それを解析し、対抗魔法を編めば解除は可能ですわ。けれど、呪いはそんなものと関係ない別種の力や念や、それをこめた物体によって行使されます。ですから……」
「よくわかんないよ～」
噛んで含められなかった。口移しの餌やりをヒナ鳥に拒まれた親鳥の気持ちだ。
白雪姫はわずかに頬をひくりとさせ、……あなたってそういう方ですわ、と小声で。

「よくわかんないけど、大丈夫だよ、ヴァル。ぜったい、元に戻れるから！」
赤ずきんはヌイグルミを眼前に持ちあげて見つめた。
勇気づけるようにまじめな顔をするが、つい頬がゆるみ、ふにゃりと笑ってしまう。ずいぶんかわいくなってしまった相棒の姿がツボに嵌ってしまうらしい。ぴくっぴくっとヌイグルミの手足が動いている。怒っているようでもあったが、喜んでいると受けとれなくもない。
「赤ずきん。それより、教室に戻りますの。草太さまと離れているのは危険ですわ」
同じことを考えていたのだろう。間を置かず、こく、とうなずきが返ってくる。
ふたりは制服のスカートをひるがえした。屋上から三階へ、三階から2－Aの教室がある二階へ。リノリウムの階段を、きゅっきゅきゅきゅっ、と音を立ててくだる。静かな屋内に反響する。
足早に段をおりながら、白雪姫は思いだしたように提案した。
「そうですわ、ヴァルのヌイグルミは草太さまに預けましょう。実物はファンダヴェーレに帰っていることにして――。その姿で草太さまを守れる、とは思えませんが魔除けくらいには。ふふ、それにも愛らしすぎて迫力が足りなそうですけど」
赤ずきんの手のなかでヌイグルミが手足を動かし『バカにするな』と抗議する。
それを見た赤ずきんは「ヴァルったら照れてる」と笑った。

4

広さは、ちょうど2－Aの教室と同じくらいだった。

しかし、ここは2－Aではない。学生机の変わりに品物が陳列された棚が並び、生徒の代わりに年齢も職業もバラバラな人々が周回している。教壇の代わりにレジスターが置かれたカウンター、その向こうに立つのも教師ではなくエプロン姿の青年ふたりだ。……教室でなければ学校ですらない。

食料品から書籍まで、あまりに雑多でありながら、なのに妙に統一感を感じさせる空間。

「こ、こ、――ここはっ!!」

この空間に入ってすぐの位置に佇むグレーテルは、武者震いのように声をふるわせた。大げさにいうなら、黄金郷を発見した探検家のごとくに。「ちょっと通れないいんだけど」と背後から誰かの迷惑そうな声がする。そんなもの興奮した彼女の耳にはまるで届かない。

ランダージョから叩きこまれたエルデ世界の知識。詰めこまれた一夜漬けの全情報。

知っている。自分は、ここを知っている！

グレーテルはくわっと目を見開き、世紀の大発明を閃いた天才発明家・某のごとき尊大さで、

「ここはっ、〝こんびに〟だわ！」

「あの、お客さん、後ろのひとが通れないんでー」

すぐ耳もとで声がした。グレーテルは思わず、きゃんっ？　と悲鳴をあげた。エプロンをかけた青年のひとりがカウンターから出てきて、そばに立っていた。開きっぱなしの自動ドアの前を、グレーテルのきゃしゃな体がふさいでいた。

あわてて横に飛びよけると、文句をいいながら後ろにいた男性客が通りすぎる。

自動ドアのある壁は一面がガラス張りで、ここは学校前の店らしく、四車線の道路の向こうに紘車中学の正門と五時限めの授業中の校舎が見えた。

とくんっ、とグレーテルの胸が高鳴る。

そういえば、なぜ自分はこんなところにいるのだろう？　……鉄柵に囲まれた西校舎の屋上、己が名を吠えるオオカミ。明確な記憶はそこでとぎれている。グレーテルは絡まった糸玉をほぐすように思い返そうとした。だが店内のあちこちから不審げな視線を向けられているのに気づく。なにせ制服姿、しかも授業中のはずの中学生、さらに挙動不審。

注目を集めないほうがおかしい。いけない、とグレーテルは、急いでランダージョの教えを思いだす。怪しまれないふるまいについて、なんといっていたのだったか。

――いいですかにゃ、グレーテルしゃま。コンビニには多くのマナーがあるにゃ。

――マナー？　だって買いものするだけなのでしょう？

――甘いのにゃ！　なんにもわかってないにゃ～。はあ、ちょっと悲しくなってきたにゃ。

――な、な、なによ。そこまでいわれなきゃならない筋合いはないわ。

——いまのグレーテルしゃまが向こうに行ったら、ものの三分でエルデ人から袋叩きにゃ。
——え？　た、たった三分で？　そんな、どうすればいいの。わたし袋叩きなんていやよ！
——だから一から教えるといってるにゃ。初心者がコンビニに入った場合、まず……、
思いだした。グレーテルは形のよい唇に、いける、と笑みを刻む。
「……マナーその一『入店したら雑誌コーナーで立ち読み』、だったわね、ランダージョ」
見回すまでもなく、雑誌棚が並んでいるのはガラス張りの壁際であった。
そこには立ち読み客が列をなしている。なるほど、あそこに紛れれば店内で浮いてしまうことはなさそうだ。グレーテルは自然体をよそおって雑誌コーナーに歩いていく。適当なところで「ふふ、ちょっと失礼するわ」と気取った声と顔で両隣の客に声をかけ、棚から一冊とりあげた。キマったわ、と本人はご満悦だが、かなり変である。
マンガ雑誌をぺらぺらめくる。まじめに読む気もないが、わかったふうな顔をしておく。
「それ」
ふいに右隣のだらしない姿の若者に声をかけられた。
「逆ッスよ、上下」
「は？　えっ、……わ、きゃ！」
いったん若者に顔を向け、指摘にしたがって雑誌のページに目を走らせ、本当だと気づいてあわて、上下ひっくり返そうとして床に落っことした。四短音の行動の内訳である。気恥ずか

しさに血をのぼらせ、ぱっとしゃがみ、雑誌を拾ってなに食わぬ顔で立ちあがる。勢いをつけすぎたか、一瞬、くらっと立ちくらみがした。
視界がまばゆくにじんで、ゆがむ。唐突に、――まだ頭に〝あの〟ダメージが残っているのかもしれない、と自分の意識の外で自分が思う。〝あの〟、って？　と自分の意識が思う。
記憶が明滅する。
――己は三銃士・赤ずきんの相棒、誇り高きオオカミ族のヴァルさまだ!!
飛びかかってくるオオカミ。青灰色をした死の影。
五メートルの距離などゼロも同然といわんばかりの突撃だった。実際、グレーテルがいかなる回避行動をとろうと、その爪牙(そうが)からは逃げきれなかっただろう。かわさなければ、と考えることすら致命的なまでに遅れた。ブラウスの胸ポケットから飛びだしたモンスタークッキーが実体化し壁となってなお、稼げたのはほんの一・二秒だ。
ガオウ！　と吠えると同時の、爪の斬撃(ざんげき)。モンスタークッキーが砕かれ四散する。
だが、そのごく短い時間がグレーテルの状況を〝致命的〟から〝圧倒的劣勢〟くらいには緩和した。動け！　とまるで自分で自分の体を突き飛ばすように地面をける。さらなる追撃の軌道上から、髪の毛ひと筋の差で外れることに成功する。オオカミの毛並みの臭いが鼻に残るほどすれすれの回避。受け身などとれようもない。ぶざまに地面に転がり、頭をぶつける。
痛みを感じる暇もない。地面を叩いた手になにかが当たった。そこがちょうど黒革のポシェ

ットが落ち、中身がばらまかれた辺りだと、最後までグレーテルはわからなかった。瞬間、すぐ次の攻撃がくる、と思い身をねじる。それは予測でも予感でもない、当然の事実を思考がなぞっただけだ。そして当然、恐ろしい速度で次の攻撃がきた。

――小娘だろうがな!! 力尽くでもおとなしくしてもらうぞ!!

手に当たったなにかを自分が掴んでいることにすら、グレーテルは気づいていなかった。だから、それを投げつけたのも希望を託したわけでもなんでもなく、無力な人間が凶暴な獣に追いつめられたとき、手にふれる草でも砂でも無意識で投げつけてしまう反応と同じだった。

だからヴァルより、投げつけた側のグレーテルが先に驚いた。

――え?

〝きゅどっ!〟

投げつけられたものをヴァルが前肢で楽に払ったとたん、薄汚れた布地で作られた小さなクマ型のそれは弾けた。空間が軋むような炸裂音を立てて、多方向に光線をふりまきながら。光の乱舞。はじめは無色だった光線は紫へと変化し、さらに質量をともなった触手へと変わった。うねくる半透明の触手の群れはヴァルを絡めとり、大柄なその体を悠々と包みこんでいく。

いや、飲みこんでいく、といったほうが適切だ、とグレーテルは感じた。

そして完全に飲みこまれたヴァルの体が、まるで胃袋で消化されるように姿を変えていった。

当然、ヴァルも黙って受け入れたわけではない。爪をふるい、牙を立て、必死に紫の包み――

さながら繭のような――を破ろうとした。グレーテルはその光景に、まるで自分の体が体内から食い破られるような錯覚を覚えた。体のなかが痛んだ。
――い、いやぁっ。
逃げだした。屋上から。追いたてられるように学校の外へ。なにも考えず、考えられず。
そして、
「……ぁ、はっ……」
艶っぽくも聞こえる掠れた声をもらし、現実に意識を引き戻したグレーテルはコンビニの床にひざを着いた。両脚にうまく力が入らない。はぁぁ……、と細い息がこぼれる。いまになってあの恐怖がよみがえってくる。頭を打った痛みの余韻をいまさらに感じる。ここでこうしているのが、嘘みたいだ。
左右から立ち読み客の視線が向けられているのを感じた。平静をよそおわなくては、と思い立ちあがった。悪夢から目覚めたあとの幼い子供のようだ、と自分でも思う。かろうじて手に掴んでいるマンガ雑誌がふるえていた。いや、ふるえているのはグレーテルの手だ。
挙動不審をごまかそうという意識すらなく、きょろきょろと店内を見回した。壁かけ時計を見つけて現在時刻をたしかめる。十二時五十分。五時限めの授業がはじまって、三分の一くらいが過ぎていた。この店にも、ずいぶん回り道をしてから入ったのかもしれない。
「まったく。くだらない本、時間をムダにさせられたわ！」

わざと周りに聞かせるようにいって、グレーテルは忌々しげにマンガ雑誌を棚にねじこむ。その行為にすべてのいいわけを託して――かなり無理があったが――、雑誌コーナーから離れた。店員や客たちにことさら余裕を見せつけるように、店内奥の清涼飲料が並ぶ冷蔵ショーケースに向かって歩いた。これからどうするべきか、何気なく視線を足下に落とし、いつもどおりに声を「ねえ、――」

いいかけて気づいた。落雷に打たれたように足を止める。自分は忘れている。大事なことを。

喪失感。

そう自分は、あの屋上で心の支えとなってくれていたものをなくしてしまっている。

ああっ、とグレーテルは思う。なんで、なんで忘れていたのだろう。喪失感の正体。

ひねた物言いをすることも多いけれど、どこか憎めない、黄みがかった毛並みの……。

「そうだわ、ポシェット！　魔法道具！」

そっちだったらしい。哀れ、ランダージョ。

表情を固くし、グレーテルは旋回するツバメの羽のように髪をひるがえらせ、急ターンした。店中の注目を集めるのもかまわず足音高く自動ドアをめざす。コンビニのロゴが刷られたマットを踏み、自動ドアの開く速度に苛立（いらだ）ち、店外に飛びだす。駐車スペースを兼ねる店前に出て、そこから鉄柵に囲まれた校舎屋上を見上げた。あそこに戻らなくてはいけないのか――？

いきなり脚がすくんだ。

『……グレーテルしゃま』

驚かすのが目的としか思えないタイミングで足下から小声がし、グレーテルのふくらはぎをくすぐったい毛の感触がなでた。尖りきっていたグレーテルの神経は、それを一種の敵襲と見なし、悲鳴をあげるより先に手足に反撃命令を発していた。キレた乙女の攻撃方法のなかでも有名な技のひとつ、踵(かかと)落とし。それもけっこう稲妻ぎみに。

茶色革の上履きの踵を脳天に食らった子猫が、しゅうう、と煙をあげてノックダウンされていた。重力に逆らうように舞いあがったふたつ括りの髪が、ぱさっと肩にかかる。脚の動きにいくぶん遅れてグレーテルは視線を落とす。見覚えのある猫の姿。そもそも、人語を話す猫など、エルデには一匹しかいない。グレーテルの両目が丸く見開かれる。

驚き、喜び、さまざまな感情が入りまじった声で、

「ポシェット！　魔法道具！」

やっぱりそっちだった。

アスファルトの路面に伸びている子猫姿の哀れなランダージョは、首に黒革のポシェットをかけていた。ここまで引きずってきたらしい。ヴァルの強襲を受け、グレーテルの手から弾かれ屋上に残してきてしまったものだ。グレーテルは人目をはばかるように周囲を見回し、子猫の体ごとポシェットを掴んでコンビニ裏手へ回る路地に駆けこんでいった。

民家が並ぶ暗い路地裏で、スプレーの落書きが目立つブロック塀を背にし、ほっと息を吐く。

もぞもぞと子猫が身じろぎして……、かと思うと、泣き声まじりに喚いた。
『いきなりひどいにゃ、グレーテルしゃま!』
「驚かした、あなたが悪いの。そんなことより誉めてあげるわ、ランダージョ。ポシェットを回収してくれたのね。こぼれた魔法道具は?」
泣き言にとり合わないグレーテルに、ランダージョは彼女のセリフを一部拝借して、
『そんなことより少しは心配してほしいにゃー。あの爪と牙で、バラバラにされたにゃ』
「なにいってるの、九つもタマシイ持ってるくせに」
『もう残り五個になってしまったにゃ! さっきので、四個になるところだったにゃあ』
できれば半分以上はキープしときたいにゃ……、とランダージョは嘆いた。
「十分すぎだわ、四個でも」
グレーテルは片手で首根っこを掴む〝猫持ち〟でランダージョの体を持ちあげる。
鼻先を突きあわせるようにし、ごく間近からにらみつけた。
魔法世界ファンダヴェーレでも希少種で知られる猫人は、九個の魂を持ち八回までは死んでもよみがえる、といわれていた。信じがたいがランダージョを見るかぎり、それは事実のようである。ランダージョは呑気に、にゃあにゃあと前肢で宙をかいている。
『道具はぜんぶ拾えたと思うにゃ。オオカミが赤ずきんを呼んだので、急ぎで——』
「あ、そういえばどうなったのかしら。効果もわからず魔法道具を投げつけたのだけれど」

閃くように思いだされる。紫色の光の繭に閉じこめられたオオカミ。
『あれは……、それはそれは恐ろしい道具だにゃー。《マスコット・ボム》っていうにゃ』
「ますこっと・ぼむ?」舌っ足らずにくり返す。
『そうにゃ。あれは投げつけられた生命体を、なんであろうと滑稽なヌイグルミに変えてしまう呪いの道具にゃあ。《マスコット・ボム》の力場に捕まると何人たりとも逃げることは不可能なのにゃ。あのオオカミは片足とはいえ外に突きだし、赤ずきんへ伝言を残そうとしてたけれど……、いや、驚きにゃあ』
「伝言? それは、まずくないかしら?」
『心配ご無用にゃ〜。書き切れなかったし、細工もしてきたのにゃっ』
ほんとにっ? とグレーテルは喉をふるわせ、感極まったように言葉を詰まらせた。
「〜〜〜ッな、な、なっ、なによ、ランダージョ!! あなたって優秀だわ!!」
予想以上のランダージョの働きっぷりに、素直に感激し声をあげる。
眼前の子猫の濡れた鼻頭に、ちゅ☆ とついばむような口づけ。思わぬ報償に、たちまちランダージョは、ぽわわん、と毛並みごしにもわかるほど赤面した。だが、『で、で、できれば口にもにゃ〜』と調子に乗って口を突きだしてしまい、それはダメ、と口づけ代わりに頬ひげを引っぱられ、おとなしくなった。こんなもんである。
だがしかし、だ。そろそろ、こう考えてもいいのかも、とグレーテルは思った。


ホントに!?
にゃ!
CHU!

言葉を選び、慎重に口にする。期待に胸がふくらんでいる。
「……ね、ランダージョ。これって……〝結果おーらい〟ってこと、かしら？」
『ま、そういうことにゃ。一番厄介だったかもしれない相手を、早々と始末できたにゃー』
ランダージョの気軽な言葉は、魔法の針となってグレーテルの胸を弾けさせた。
ぷひゅーと空気が抜けるように吐息をこぼし、ずるずると汚れた路面に座りこむ。両脚もだらしなく前に投げだす。脱力して子猫を放し、グレーテルはドサッと背後のブロック塀にもたれかかった。太股の裏に冷えたアスファルトの感触。通りかかる人がいれば、はしたないと思われるだろうか。かまいはしない、どうせ他人の目に映る姿は自分ではない。
——と、
きゅる、きゅるるるるる～～っ！
緊張感から麻痺していたお腹の虫が、休眠から覚めたように鳴きはじめた。それも、猛然と。
年ごろの少女にしては、あまりに恥ずかしい勢いで。
「あ、はうっ、ランダージョ、聞いちゃダメ！　あっちいってて！　も～～！」
グレーテルは下腹部を力いっぱい押さえながら、笑いに耐えて頬ひげをぴくぴくさせているランダージョに「食べもの！　なにか買ってきて」と命じた。子猫は尻尾をゆらして返事をし、路地裏から出ていく。デザートを忘れたらもう一回行かせよう、とグレーテルは誓う。そもそもどうやって買ってくるのかは心配していない。

あの猫のことだから、どうにかなんとかするのだろう。たぶん。
『……で。落ちついたかにゃ、グレーテルしゃま』
どうにかなんとかしてランダージョが手に入れてきた菓子パンあれこれを、グレーテルは自分のイメージ上では〝上品に〟たいらげて、やっとひと心地ついた。ちなみにデザート兼用らしい。グレーテルはチョコレートコロネの最後のひと欠けらを飲みこみながら、うなずく。
『そろそろ、五時限めの授業も終わりにゃ。これから、どうしますにゃ？』
「ふう、そうね……」
グレーテルは５００㎖紙パックのコーヒー牛乳を一口飲み、立ちあがった。
人工的な甘みのせいで、どうにも不自然な味と感じてしまう。贅沢はいっていられないが。
「休みの間に教室に戻るわ。ここでこうしていても、目的は達成されないのだし」
黒革のポシェットを肩にかけ直して、路地裏から歩いて出ていく。子猫が付きしたがう。
「それで、次の授業は――」
『体育にゃ。体操服に着替える必要があるし、場所も体育館なので、ポシェットを持っていくのは難しいにゃー』
グレーテルの呟きにランダージョが苦々しい口調でいいそえた。
「……ふぅん」グレーテルは、ぽつんと呟く。呪いの短刀《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》は強大な魔力を宿すがゆえに、収納魔法道具であるポシェットからとりだせば、すぐ赤ずきん

に知られてしまうだろう。だからこそクラスメートになりすまし草太と親交を深め、ふたりきりになれるよう動く、というのがランダージョの策なのだが。

コンビニの横手から出て駐車スペースを縦断する。紘車中学正門との間の車道の前で足を止めた。頭上に点る信号機の歩行者側ランプは赤。うーん、とグレーテルは考えこむ。しかし、あまり深刻そうではなく、わりとあっさりと。

「まあ、しかたないかしら」

『にゃにゃ、そんな簡単に〜。六時限めが終われば、もう下校にゃ！』

「だって、しかたないじゃない、ランダージョ」

『もしやスズカゼ・ソウタに情けをかけているにゃ……？』

「——へ？」

グレーテルは自分でも気づかない自分の癖を、ふいに指摘されたような変な顔をした。

「そんなわけないわ。そんなわけないじゃない、だって……、ええ、そうよ」

いい返すグレーテルの声は、少し浮わついていた。〝そんなわけはない、だって〟、その先に続けなければいけない正しい言葉があるような気がしたが、なにも出てこなかった。頭上の信号ランプが青に変わった。車の流れが止まる。グレーテルは正門に向かって横断歩道を歩きだした。足下を並走するランダージョは、なにかいいたそうに、けれどなにもいわずに、地面を舐めるように頭を下げて湿っぽいため息をくり返す。

いいたいことがあるならいえばいい。その態度にグレーテルは苛々と唇を引き結ぶ。
刺々しい沈黙。なにか思案する間。やがて。
やや低めた声で、グレーテルはさながら暗殺者がターゲットの名を確認するように、
「──〝おおわなとび〟、ね」
ランダージョがいっていた体育の授業内容を、足を止めずに口にした。
「競技というくらいなのだから、当然、勝ち負けがあるのでしょう？　ランダージョ」
『にゃ？　それはそうにゃ。なん通りか種類はあるけどにゃあ、えーと、』
話しながらひとりと一匹は車道を渡りきり、正門の前に立った。クリーム色のペンキで塗られた鉄門は左右に開かれている。門から先は花びらの散った桜並木が続き、昇降口（しょうこうぐち）までアスファルト道が続いている。グレーテルは胸を張るようにして腰に片手を当て、まだ授業中の静かな校舎を見やる。意味なく偉そうな格好がさまになっていた。誰かに見られれば怪しいことこの上ない。ついでに、ランダージョの説明も聞いちゃあいない。
グレーテルは叩きつけるように「フッ、わかったわ！」と宣言した。
「いいでしょう、じゃあ責任を持って、わたしがおおわなとびで赤ずきんを破ってみせる！」
なにが〝わかったわ〟で、どんな〝責任〟によってその結論に至ったのか限りなく謎だ。ただ、はっきりしているのは、赤ずきん憎しの念は本物らしいということ。
対するランダージョはずいぶんと迷い、言葉を選びながら、あくまでも親切心でいった。

『ところで、あのぉ〜。大縄跳び、だにゃー、グレーテルしゃま』
グレーテルは腰に片手を当てたままで、きょとん、と視線を落とす。
「？　ええ、おおわなとびでしょう。わかってるわ、なにいってるの、ランダージョ」
『〝わな〟じゃなくて〝なわ〟なのにゃ……』
グレーテルは、さらにきょとんとして、
「……おおわなとび」
『おおなわとび！　跳ぶのは罠じゃなくて縄にゃ』
「おおわ……、大縄跳び」
『！　そうにゃっ』
ランダージョは、はじめて赤子にパパと呼ばれた父親のように、うれしそうな顔をした。
都合四回も間違えたことはいわないほうがよさそうだ、と判断する。指摘されてから気づくまでが遅すぎのことも。
グレーテルはくすぐったそうにはにかんで、小さく舌をだす。
「いけないいけない、わたしったら。何回もいってるうちに、ちょっと混乱してしまったわ」
徹頭徹尾はじめっから間違えていたこともいわないほうがよさそうだ、と判断する。
ランダージョ、すぐれた危機回避能力である。
「──と、ああ、そうだわ。いい？　ランダージョ」

ふとグレーテルが冷静な顔をしていいかけたところで、五時限め終了のチャイムが鳴った。
校舎内から外へ、空へ、金属的な音色が響いていく。にわかに活気をとり戻していく校舎。
この場に長くいるのは危険だ、とグレーテルは急いでチャイムに遮られた言葉を続ける。子猫に姿を変えているとはいえ、赤ずきんたちに面の割れているランダージョに、
「あなたは、あまり校舎に近づかないほうがいいわ。あとは、わたしに任せてなさいな」
と、一方的にいって校舎へ駆けていった。
残されたランダージョは、やれやれと吐息をこぼし、あまり期待してない顔で尻尾をふった。
『にゃー、がんばれだにゃ〜。………まったく、こっちの都合も考えてほしいにゃあ』
グレーテルに協力するふりをして〝封印の鍵〟を奪わせ、鍵・奪取の手柄は自分のものにする、それがランダージョの筋書きである。グレーテルは鍵にも、サンドリヨンにとり入ることにも興味はないのだし――。失敗したときには、許しなく魔法道具を持ちだした罪も含めてグレーテルに責任をなすりつければいい。
得るものは多く、失うものなしという、猫ながら贅沢な作戦だ。……なのに、である。
『グレーテルしゃまには、もっと予定通りに動いてもらわにゃいと困るにゃあ』
昇降口へ消える少女の背中に、ぼやいた。
その言葉尻に重なるタイミングで、すぐそばでコツッと足音がして、子猫の全身に影が差す。
にゃ？　とランダージョが顔を上向けると、そこにはいかにも動物好きそうな女性の柔和な顔

があった。人語を喋ってるのを聞かれたか？　と一瞬、警戒する。だが、相手はそんな様子はまるで見せず、にこにこと微笑んでいる。
地味な上着、地味なスカート、地味なストッキング、地味な履物。ランダージョはその人物を知っていた。当然だ。鈴風草太のクラス、グレーテルが潜入し、三銃士のふたりまでがやってきた2-Aの担任。
「まあまあ。こんなところに、かわいい猫ちゃん～。ふふ、この辺りじゃ、初顔ね？」
のほほん教師、泉先生である。ちょこん、とランダージョのそばにしゃがみこむ。
右手に金のモール細工の猫じゃらし、左手に銀のモール細工の猫じゃらしを持っていた。
いつも持ち歩いているのだろうか？　だとすれば用意周到というか……、変だ。
「さ、あなたが遊びたいのは、この金の猫じゃらしと、銀の猫じゃらし、どちらかしら？」
ふりふり（金）。ふりふり（銀）。
……こ、こいつ、油断ならないにゃ！　とランダージョは、じりっとあとずさる。
ふりふり（金）。ふりふり（銀）。
ふりふり（銀）。ふりふり（銀、と見せかけて金）。
――はしっ！　とランダージョは両前足で二本同時に飛びつき、押さえつけてしまった。
あまりに絶妙のスイングだった。猫としての習性が誘惑に抗しきれなかった。――冷や汗。
……こ、こいつ、できるにゃ～～！

「まあ、いけないわ。なんて欲ばりな猫ちゃんでしょう」
泉先生はゆるやかな曲線を描く眉を艶っぽくしかめた。
ほぅ、と悩ましげな吐息をこぼし、しかたなさそうに、けれど、どこか楽しげに続ける。
「それじゃ罰として――」

5

体操服に着替えて、少女は西校舎の裏庭へと立ちよった。
胸の当て布には黒のマジックで『2－A 畑野』の文字。おろすと長そうな髪を結いあげ、見るからにおとなしい下がり気味の眉、いつもちょっと困ったふうな瞳。裏庭は、学校を囲むコンクリート塀と西校舎の間の狭い空間だ。少女以外に人気もなく寒々しい空気を感じさせる。乾いた土の地面、燃えカスのすえた匂いを漂わせるゴミ焼却炉、もう何年も使われていない小さなプレハブ小屋、それと花壇だった小さな野菜畑があるだけの場所。
校舎の北側にある体育館へ向かうには大幅な遠回りだ。だから少女は早めに教室を出ていた。
「昼休み、見に、これなかったから――」
誰かにいいわけするように呟く。毎日、一緒に弁当を食べている友人たちの輪から抜けだせなかったのだ。いつも苦労するのだが、今日はふだんに増して友人たちの会話は途切れることなく、タイミングを計っているうちに昼休みが終わってしまった。肩を落とし気味に裏庭の土

を踏みしめる。菜園部に所属する少女の目的地は、ゴミ焼却炉ではなく、もちろん野菜畑だ。赤レンガで囲まれた、たった三列の小さなホウレン草畑。

少女は囲みのそばで、赤レンガにひざを乗せるようにして、しゃがむ。

「うん、元気そうだね……、みんな」

周りに誰もいないせいか、気がゆるみ、友人には笑われる癖でホウレン草に話しかける。

「今日ね、姫川さんとはじめてお話ししちゃった。ほんの一言だけど……」

友人たちは転校生の話題で盛りあがっていたが――主に白雪姫の〝草太とラブラブ〟発言をめぐって――、少女にとってはそれより、よほど大きな事件だった。ニンジンの消しゴムを受けとるとき、ふれた指先から、ふるえが伝わらなかっただろうかと心配になる。

姫川リサ。中学生らしくない大人びた彼女は、少女がひそかに憧れている生徒だった。

――はい。かわいい趣味ね？

耳に残っている声。もっとラフな口調のイメージがあったが、それは思いこみだったらしい。明日、家にある予備のニンジン消しゴムをプレゼントしようか、それをきっかけにまた話をして、少しでも仲良くなれたら……。そんなことを考えていると、ふいに六時限めの開始を告げるチャイムが鳴りはじめ、少女はびくっと背筋を反らす。しまった、と思う。ちょっと考えごとをしただけだが、授業間の休みは十分しかないのだ。

ゴリラ顔の体育教師から科せられるだろう罰を想像し、少女はあわてて立ちあがる。

ホウレン草畑から離れようと身をひるがえし——かけて動きを止めた。
「……?」と黒目がちな瞳が吸いよせられるように、一点を見る。
赤レンガで囲まれた畑の向こう、校舎の壁からあまり離れていない地面。
黒っぽい、なにかが落ちていた。
よほどの速度で落下したのか、ほとんど埋まってしまっている。少女は首をかしげ、それが落ちてきたルートを辿るように顔をあげた。裏庭から見える西校舎の壁には窓も非常階段もない。のっぺりした壁をなぞっていく少女の視線は、鉄柵に囲まれた屋上に行きついて止まった。その先は空しかない。
いぶかるように目を細める。鉄柵にはものが落ちるくらいの隙間は十分あるが。
やはり、あそこから落ちてきたのだろうか——?
授業のことを忘れたわけではなかったが、少女はホウレン草畑を回りこみ、落下地点に近づいていった。地面に杭を突きたてようとして斜めに失敗したみたいだった。それの材質は黒光りする鉄のようだ。前屈みになって、被っている土を払う。すると、それが円筒形の物体であることがわかった。
あちこちに白の顔料で異国の文字が書かれていた。まるで読めなかったが、達筆すぎる漢字のようだと思った。その模様や全体像から、少女は自宅の台所にあるアルミ缶の茶筒を連想した。鉄観音茶の茶葉が入った黒い茶筒。ちょうどアレくらいの大きさかな、と。

「……あ、そういえば、お茶っ葉、切れかけてたっけ」
『ヌウ。ソコノ乙女ヨ、ワガ輩ヲ見テ、ナニカ失敬ナコトヲ考エタヨウデアルナ』
いきなり声がした。妙に古風で、堅苦しい、まるで物語に出てくる老騎士のような口調。
……自分を除けば無人であるはずの裏庭で。
少女は、ひい！　と悲鳴をあげて尻餅をつき、キョロキョロと周囲を見回す。――と、
さらに、声。ひええっ、と少女はまたも悲鳴をあげた。なにげに失礼なことをいわれたのだ
『ドコヲ見テオル？　ココダ、ソナタノ目ノ前デアルゾ。貧相ナル胸ノ乙女ヨ』
が、気づく余裕もない。おそるおそる視線を前に向ける。尻餅をつき、あられもなく開いてい
る内股の間から、地面に埋まっている鉄の円筒形の頭が見えた。
『イカン、イカンナ。ソノヨウナ、フシダラナ格好、ウラ若キ乙女ガスルモノデハナイ』
聞こえた内容が事実なら、偉そうな声はそこからしたとしか思えないのだが……。
三度目の声に、少女は悲鳴をあげることもできず、凍りついた。
『ドウヤラ、驚カセテシマッタヨウデアルナ。ダガ挨拶シヨウニモ、コノ姿デハ身動キヒトツ
デキヌ。カノ城ノ宝物庫デ眠ッテイタハズノ、ワガ輩ガ、ナゼコノヨウナ場所ニ？　サンドリ
ヨン陛下ノ姿モナク、辺リヲ探ロウニモ、ソレスラ叶ワヌトハ嘆カワシイ……。ドレ、乙女ヨ、
少シハ落チツカレタカナ』
「――――」絶賛、凍結中であった。声は考えこむように沈黙し、やがて言葉を続けた。

『フム、シカタアルマイ。ワガ輩ガ本来ノ姿ニ戻ルニハ、主トノ契約ガ必要。ソナタハ、ワガ主ト認メルニハ少々心モトナイガ。ココデ出会ッタノモナニカノ縁。スベテハ、真ナル体ヲトリ戻シ、自由ニ動クコトノデキル手足ヲ得ルタメ。……ヨカロウ！　イタイケナル乙女ヨ、ワガ輩ニ手ヲカザスガヨイゾ！　サア！』
よいぞ！　さあ！　と力強くいわれても少女も困る。話についていけない。
いけるはずがない。なんとか凍結状態からは脱した少女は、尻餅をついたまま後ずさった。
関わりあいになってはいけない、その一心で、
「あの、えと、わたし、そういうの興味ないですから。ごめんなさい。ウチ、貧乏ですから」
『ヌウウ！　ソナタ、ワレヲ悪質ナ商人トデモ、勘違イシテイルヨウダナ。屈辱デアル』
「わ、わたし、もう体育館に行かなくちゃいけないんです！　すすみません。それじゃ」
少女は、わたわたと立ちあがり、お尻についた土を払って、頭まで下げて早口でいった。
すでに授業ははじまっている。遅刻、それも大遅刻だ。
くるりと背中を向ける。なにも見てない、なにも聞いてない！　と自分にいい聞かせる。
『……ウヌゥ。アクマデ、ワレヲ拒ムトイウカ。ナラバ、シカタアルマイ。コノヨウナ手段ハ、デキレバ、トリタクナカッタノダガ。コレモ、非常事態ユエ。カヨワキ乙女ヨ、ナニトゾ、許サレヨ。――フンッ』
瞬間、少女は嫌な予感がして、一刻も早く裏庭から離れるべく駆けだそうとした。

なのに体は、くるっとふたたび反転して筒に向いていた。さらに両脚が勝手に動きだし、少女の体は自分の意思とは無関係に前進する。落下地点に近づいていく。抵抗しようにも自分の体が糸で操られる人形になったみたいだった。

『少シバカリ、強引ナ手ヲ使ワセテモラッテオル。マア、気ニスルナ、ハッハッハ』

「き、気にします！　なな、なんなんですか、これ。どこが少しなんですかぁぁ……っ」

語尾が涙声になっていた。鉄の筒のあちこちに書かれた異国の文字が、ほのかに発光している。光に誘われるように、少女の体はそのそばで勝手にひざをついた。膝頭に食いこむ小石の痛みだけが、はっきりと自覚される。勝手に上半身が前のめりになり、右腕が持ちあがり、地面に埋まった筒に伸びていく。

『安心サレヨ、痛クハセヌユエ。ドォレ、全身ノ力ヲ抜イテ、楽～ニ』

「やぁっ、抜けないっ、できないっ、安心なんてできません！」

『フーム、残念デアル。マ、ヨイカ。デハ契約ノ儀ヲ、ハジメヨウゾ』

操られるままにかざされた少女の掌と筒の間で力場が発生し、細い電光のような光の筋がいくつも踊る。痛みはない。熱もなにも感じない。ひとりと一個を中心として目に見えない力の波紋が広がり、ホウレン草畑の青葉をゆらす。その余波か風が起こり、ゆるやかに渦巻いて徐々に強まっていく。

なにかがはじまる、と予感させるには十分な現象。声が、おごそかに告げた。

『契約ハ、名ノ交換ヲモッテ成サレル。少女ヨ、ソナタノ名ヲ、ワガ輩ニ与エヨ』
「……え？　あ、あの、それは……」
ためらい。もしかしなくても、これが、この状況を拒む最後のチャンスだった。
けれど、断ればこれ以上なにをされるかわからない、という不安に少女は押し流された。
こんな場面で張りとおせる意地など端から持ってない。おずおずと口にする。
「は、畑野、ちよ、です……」
そう少女が名を告げた瞬間。
『──ハタノ・チヨ！　オオオオオ、ヨキ名デアル！　了解シタ!!』
ごおッ!!　と渦巻く風が強さを増し、小型の竜巻のごとくになった。結いあげていた少女の髪が風にあおられ、ばらりとほどけて宙に踊る。嵐に翻弄されるように、はげしく。まっすぐおろせば腰まで届きそうな長さだ。渦巻く風のなか、片手を差しのべている少女の姿は、体操服姿でありながら騎士に口づけを許す姫君のようにも見えた。
かざした手の先で、歓喜にふるえた声があがる。
『ハタノ・チヨ！　ヨカロウ。ソナタヲ、ワガ主ト認メ、汝ニワガ輩ノ名ヲ捧ゲルデアル！』
「……あなた、の、名前？」
『イカニモ!!　誇リ高キ、ワガ名ハ──魔道甲冑兵《オズボーン》!!』
大音声と同時に輝きが生まれた。鉄の筒から爆発的な、光が。

白い異国の文字がまばゆく明滅し、枷が外れるようにパシィン！　と弾けて、消える。
バキバキバキと全体に亀裂が走るような軋みをあげ、ブロックが組み変えられるように、あるいは積みあげられるように巨大化し、手足と頭部を有した人型に近づいていく。やがて現れたのは物語に出てくる騎士がまとっているような、顔まですっぽり覆う面付きの兜と鎧——陽光を受けて鈍色(にびいろ)に輝く鋼の甲冑だった。
スマートさのない、縦に圧縮されたようなずんぐりした体型。赤い両目が点り、鼻下には立派な鉄製のカイゼルひげが左右にピーンと跳ねていた。甲冑の隙間から覗く内部は、驚くことに肉体ではなく濃い闇のみがわだかまっているようだ。
腰には長大な刃の大剣を佩(は)いている。威圧され、押しのけられるように少女は後方へたたらを踏んだ。赤レンガに足を引っかけホウレン草畑に倒れこむ。息を飲み、それ以外の行動がとれない少女の眼前で、がらんどうの鎧は自らを誇示するように名をくり返した。
『ワレコソハ魔道甲冑兵《オズボーン》！　サンドリヨン陛下ノ忠実ナル剣ニシテ盾ナリ！』
ぴんと尖ったカイゼル髭(ひげ)の先端が、きらーん、と陽光を照り返した。

6

そのころ、次なる騒動の舞台となる体育館では。
「いざ、勝負しなさい、赤ずきん！（びし、と指を突きつけて）」

「うん、受けて立つよー☆　じゃ、はじめ！」
ぴょんこ。ぴょんこ。ぴょんこ。ぴょんこ。
大縄跳びの競技形式のひとつ。縄に引っかかったものから脱落していくサバイバル・ルール。
姫川リサー――の姿を借りたグレーテルが、打倒・赤ずきんに燃えていた。

いままさに嵐が接近しつつあることも知らずに。

7

魔法世界ファンダヴェーレ、大陸北端、――〝滅びの魔女の城〟。
夜行性の魔物の遠吠えがこだまする、明けることのない永遠の夜に包まれた城のなか、選ばれたものしか入ることを許されない広間へ向かって、氷のような印象の少年・ヘンゼルが歩いていた。赤い絨毯がしかれた長い廊下、昨日、妹のグレーテルが潜んでいた石膏石の円柱の前を通りすぎても、その顔にはどんな感情も浮かばない。
青みがかった紫を基調とした、ゆったりめの法服を身にまとっている。右手には藁ホウキを模したような魔法発動具の杖〝ナイトメアブルーム〟を携えていた。機械のように規則正しい歩調に合わせて、藁束の先が小さくゆれている。
やがてヘンゼルは廊下を渡り、広間へと通じる大扉の前に着いた。そして、

「わが名、〝ヘンゼル〟をもって命ずる、——開錠」

大扉に手をかけることもせず、ヘンゼルは扉に彫られた禍々しい紋章に向けて声を投げた。

すると、まるで扉自体に意思があるように、ごごご、とひとりでに開いていった。

……開かれた扉の向こうには、濃い闇が瘴気のようにわだかまっている。

ヘンゼルはためらわず、臆することなく慣れた足取りで踏みこんでいく。

この城の主、大魔女サンドリヨンの玉座の間でもある〝鏡の間〟は、広間というにはあまりに異様だった。一歩踏み入れると、そこは果てのない闇に支配された空間で、夜空の高みに踏みだしたような錯覚を覚える。とても屋内だとは思えない。それでも視界に困らないのは、この広間の名の由来でもある大鏡が、なににも支えられずいくつも宙に浮遊し、薄らと光を放っているからである。夜空に複数の月が座するように。

そして広間の中央、大扉へ背を向けて、サンドリヨンの玉座が浮かびあがっている。

「サンドリヨンさま、参りました。ヘンゼルです」

後ろ姿しか見えない城主にヘンゼルは声をかける。肘かけに軽く置かれた腕も、仰々しく飾られた玉座の背もたれからこぼれる豊かな黒髪も、ヘンゼルの声にまるで反応しない。だがそれは、いつものことなのでヘンゼルは気にせず玉座の前へと回りこんだ。

「サンドリヨンさま……」

再度、呼びかける声が尻すぼみに消えていく。

片方の肘かけに肘をつき、その手の指先で細いあごを支えるようにして、サンドリヨンは目を閉じていた。臙脂にも近い赤みがかった紫のロングドレスに身を包み、頭には牙を剥きだしにした魔物の顔のような髪飾り、両の耳朶にはコウモリの羽に似た装飾品がゆれている。呼吸すら止めているように微動だにしない。

病的なまでに白い肌、近づくことにさえ抵抗を覚える、恐いほど美しすぎる相貌。たとえるなら、死を司る女神だろうか。

ヘンゼルは、この世界におけるフェレナンド軍と魔族軍の戦況について報告する、という当初の目的も忘れ、彼らしくもなく射竦められたようにその姿から目を離せなくなっていた。まるで、敬虔な崇拝者のように。

穏やかに閉じられていたサンドリヨンの唇に、――ふ、とわずかな笑みが浮かんだ。ゆっくりまぶたが持ちあげられ、血のように赤い両の瞳がヘンゼルを見やる。

「ヘンゼルか……、どうした？」

大人の女性らしい深みのある艶めいた美声。ヘンゼルは、わずかに言葉を選ぶ間を置いて、

「いえ、眠っておられるのかと思いましたので」

「眠ってはいない。――夢は、みていたがな」

サンドリヨンは微笑を湛えたまま、謎かけのような文句を口にする。

しかし、回答を求められているわけではなかったので、ヘンゼルは、あくまで事務的に話を

切りだした。

「フェレナンド軍から三銃士のふたりまでが離れたことは、わが軍に有利に働いています。ここ数ヶ月停滞していた戦線も先日より動きを見せており、上手く運べば――」

「ヘンゼルよ」

「……はい」

サンドリヨンが報告を遮ることはめったにない。

いぶかしむように眉をよせ、ヘンゼルは目線を魔女に向けた。サンドリヨンは、どこかふざけたような調子で、問う。

「グレーテルが城を離れたことは知っているか?」

「――、は」

短く肯定するヘンゼルの表情は、ゆるがない。心のない人形のように無感情に、無機質に。ヘンゼルがグレーテル失踪の報せを配下の兵から受けたのは今朝早く――といっても、この地域に昼夜の区別はないのであくまで時間的に――のことだ。それをサンドリヨンへ伝えるのは側近であるヘンゼルの役目だが、彼はしていなかった。理由は単純で、身内の恥などという俗なものではなく、ただサンドリヨンの耳に入れる価値もない、と判断したのである。

捨て置けばいい些末(さまつ)な事柄にすぎない、と。

それよりもこの場合、サンドリヨンがどうやって知ったのかのほうが不思議だった。


サンドリヨンさま
――ヘンゼルか

いや、赤眼の魔女はすべてを見通している、というのが正解なのか。
「どうだ、心配か？　血をわけた妹のことが」
片目を細め、わずかな笑みを含んで問うサンドリヨンに、ヘンゼルは氷点下の声音で答える。
「まさか。あれがどこで野たれ死のうと、興味はありません」
かつてはよき兄だった少年の返事を聞き、サンドリヨンは満足そうな笑みを浮かべた。
少年の耳に甘い毒をそそぎこむように、いう。
「フッ、そうか。――おまえはいい子だ、ヘンゼル」
「……ありがとうございます」
冷然とヘンゼルは一礼する。それだけで、妹に関する話題は終わりだった。

1

六時限めの体育の授業というのは憂鬱(ゆううつ)だ。多くの生徒にとって。

草太が属する2-Aと隣のクラス2-Bの合同授業。紘車中学の体育館は大扉から入ってバスケットコートを二つ挟んだ向こうに、赤い緞帳(どんちょう)の下がった一段高いステージがあり。奥のステージ側のコートを女子が使い、手前のコートを男子が使用している。

今日は男子担当の教師が休んでいるため、両方をひとりの体育教師が指導していた。

といっても、

「そっちは適当にやってろ。いいな、あんま騒ぐんじゃねえぞ」

男子にはバスケットボールを収めた車輪付きのボール籠が押しやられ、教師らしくない口調で告げられて終わりだった。三十代半ば、独身、脳みそ筋肉なゴリラ顔の男性教師。女子の授業は大縄跳びで、体を動かすのが大好きな赤ずきんと、出席していること自体が珍しい姫川リ

サという、まれな組みあわせの一騎打ちが延々と続いている。
だらだら遊びだす男子のなか、草太は、バスケットゴールの真下で壁にもたれ座っていた。
(……なにかが起きてるんだ、きっと。でも、なんだろう?)
ニスの剥げかけた楓(メープル)の床材の上、ひざを抱え、ひとり難しい顔をして考える。りんごの感情を逆撫でするとわかっていながら、赤ずきんたちが学校へ来たこと。昼休みに聞こえたオオカミの遠吠え。なにかが起きている。それも三銃士ふたりが動いているのだから、おそらくは〝封印の鍵〟に関することで。
けれど赤ずきんも白雪姫も、そのことを当事者であるはずの草太に何も教えてくれないらしい。
納得がいかない。草太は五時限めのことを思い返す。授業に遅刻して戻ってきたとき、赤ずきんはヌイグルミを手にしていた。ヴァルを題材にしたものを。そしてそのヌイグルミを、五時限めが終わると白雪姫から無理やり押しつけられたのだ。――肌身離さず持っていてほしいですわ、少々、見てくれはよくないですけれど、といって。だが体育の授業に持ちこむわけにもいかず、ヌイグルミは早速、教室の後ろにある草太のロッカーにしまわれた。
(……僕ってヌイグルミを持たせてれば、大人しくしてそうに見えるのかなあ)
そう考えると、男としてかなり複雑である。草太はうなだれ、切ない吐息をこぼした。
「そ・う・た・さ・ま~~♪」

意識の死角から投げられた声に「？」と顔をあげると、すぐ前に白雪姫が立っていた。
「あ、白雪……」
「はい、〝あなたの〟白雪ですわ」にっこり。
両手を後ろに回し、少し前屈みになって草太の表情をちょこんと覗きこむポーズ。袖口に赤いラインが入った白の上着と、紺のブルマという体操服姿がよく似合っていた。しかし、服のサイズが小さいのか、少し窮屈そうだ。誰が用意したものだろう、と草太は思い、まじまじと見てしまって豊かな胸のふくらみに赤面する。
――ふふ、どうかしましたの？　と上品に笑って、白雪姫はぺたんと草太の隣に腰をおろし、よりそうように体を近づけてきた。半袖の上着の袖から剥きだしになった二の腕同士が、ぴとりとくっつく。体育館特有のひやりとした空気のなか、肌のふれあっている部分だけが妙に熱く感じた。スイッチが入ったように草太はドギマギする。
「ッ！　ちょ、ちょっとダメだよ。こんなの、りんごに見つかったら」
「あら、大丈夫ですわ。いま、遅れている生徒さんを探しに行ってますから☆」
「……え、りんごが？」
「はい。たしか、畑野さんとおっしゃるかたを、ですわ。」
そうなんだ……と草太は思う。だが、ともかく、この場にりんごがいないのは好都合だ。いや別に、白雪姫とくっつき合っているためにではなくて。草太は仲睦まじい恋人のように身

をよせてくる白雪姫からジリジリと離れ、体勢を立て直そうとした。
「えと、そうだ白雪。君に聞きたいことがあるんだ。大事な話」
「大事な?」
「う、うん」
「まあ、なんでしょう? ああっ、さては愛の告白とか——」
「ち、違うよ……って、わあ!」
さらりと草太の右手をとった白雪姫が、その手を自分の左胸に押し当てていた——いや、いままさに押し当てようとしていた。あざとさをまるで感じさせない、淑女のようにごく自然な動作で。そのとき草太の右掌と胸のふくらみの隙間は、わずか数ミリ。危なかった。あと一秒、気づくのが遅ければ、宇宙船『右手号』は神秘なる惑星表面に軟着陸していたところだ。
(いやいや、宇宙船がどうとかじゃないんだって! なに考えてるのさ、白雪は!)
頭をふって混乱した思考を払い、草太はなんとか右手の自由をとり戻し、抗議しようと——
「　　」
口を開いたが一音も発することができなかった。草太は体を硬直させた。ぎこちなく前方へ向けられた視線の先には、男子生徒が群れをなし生者を憎むゾンビのように妬ましげなオーラを放っている。ぐるりと囲まれ、逃げだす隙間はない。恐ろしい声が『ウマそうな脳みそだなぁぁ(←草太の錯覚。正しくは、ずいぶん楽しそうだなぁぁ)』と唱和した。

ひっ、と草太は首をすくめる。とって食われる！　と思った。釈明のセリフが喉に引っかかって出てこない。ずい、とゾンビ軍団が足並みをそろえて一歩前進した。包囲が狭まり嫉妬のオーラが全身に絡みついてきて、草太は手足をふって払おうとする。――と、

「草太さま」

静かな声で名を呼び、草太をかばうように白雪姫が立ちあがった。

とたんにゾンビ軍団の勢いが削がれる。白雪姫は天井を見上げるように顔を上向け、聞きとれないほどの小声でなにか呟き、首の後ろに手を回した。流れるような動作だった。青銀の髪のなかから小型化させていた光輪キルクイトゥスをとりだし、一声かけてサイズを戻す。

白雪姫がなにをしようとしているのか一瞬で悟った草太はあわてる。

「し、白雪、ダメだって！」

「――いいえ。危ないですわ、じっとしててくださいな、草太さま」

制止しようとした草太は、その白雪姫の声に、ふと眉をひそめた。……そこに、この場にそぐわないほどの鋭さが含まれていたことに。だが、草太が胸に生まれた疑問を整理するより早く、白雪姫はしとやかな表情に凛とした眼差しで光輪を大きく真横にふる。魔力を宿した冷たい光がこぼれる。その瞬間。

体育館の半円型天井をぶち破って、鈍色に光る人影が砲弾のごとく突入してきた。


ドキッ
草太さま♡
草太ぁ〜
わぁぁ……
?


いきます!
白雪ちゃぁ〜ん

2

そのときゴリラ顔の体育教師は、咄嗟（とっさ）に「隕石（いんせき）が落ちてきた！」と思ったらしい。

乗用車が高速で壁にぶつかったようなドガンという音がして、天井に穴が開（あ）きなにかの塊が落下してきて床に突きたった。女子側のバスケットコート、赤ずきんと姫川が差し向かいで縄を跳んでいた、白のラインテープで描かれたセンターサークルへ。まるで狙いすました砲弾のように。楓の床板と、その下のコンクリート基盤も砕き地面にまで達する。

驚きのあまり、ふたりをとり巻き応援していた女子の誰もが指先ひとつ反応できなかった。

もうもうと濃い土煙が舞いあがり、……がしゃり、と落下地点で、なにかが動いた。土煙にさえぎられ、おぼろげにしかわからない輪郭の上部で、赤い光点がふたつ点っている。それは明らかに〝目〟だった。隕石ではない、土煙ごしの〝人影〟は落下の衝撃をものともせず『フム、ココガ体育館トイウ場所デアルカ』と声を発した。

それが引鉄となって体育教師は背筋をビクンと痙攣（けいれん）させた。天井を破って落ちてきた影が真下にいた赤ずきんと姫川を飲みこみ、地面に突きたつ瞬間の映像が脳裏に浮かぶ。とても無事とは思えない。背筋がふるえる。体育教師と人影の間はおよそ三メートル、しかし両者の間は分厚い煙幕のせいで視界が利かない。

……と、ぼっ！　と空気の幕を破る音を立て、土煙の中心から輝く大剣の切っ先が突きださ

れた。体育教師の鼻先、ふれるかふれないかの距離に。そのまま、大剣は唸りをあげて空気をかき混ぜるように旋回し、土煙を拡散させる。天井の穴から差しこむ午後の西日が、落下地点に仁王立ちする人影の姿を明らかにした。大柄な体育教師が子供に見えるほどの二メートル半ばに達する巨体。

体育館の床に影を落とす、厳格なる騎士のごとき鈍色の甲冑——。

右手に、子供の背丈ほどもある大剣をたずさえた魔道甲冑兵《オズボーン》の威圧的な姿だ。

『ウヌゥ。シカシ、ココハ戦場ノヨウニハ思エヌナ……、残念デアル』

鉄製のカイゼル髭(ひげ)を自慢げに輝かせながら《オズボーン》は地面から床上へとあがった。よく見ると頭部から足先まで、全身がびっしり霜に覆われている。それは白雪姫が放ったなんらかの攻撃魔法なのだが、たいして効いている様子はない。

「……てっ、てっ、ててて、てめェェ……っ!!」

脳みそ筋肉な体育教師は脳みそまで筋肉であるがゆえに、この常識外れな事態をシンプルなふたつの項目のみで理解した。自分は教師であり、あのふたりは自分の生徒である。この二項目を燃料に変え「俺の生徒になにしやがる」と熱血漢な怒声を吐いて、破れかぶれな勢いで突進する。だが——、すぱんっ。

数歩足をだしたところでみごとな足払いを食らい、前のめりに床へ激突した。

顔面から。モロに。「ぶへあ」と妙な声がもれ、そのタイミングに重なって叱責が飛んだ。

「もうっ、無茶なことしちゃダメだよ！」

体育教師は、無数の〝?〟と黄色いヒヨコを頭上に浮かべ、床を這ったまま周囲へ視線を走らせる。斜め下の死角から小憎らしい足技を食らわせてくれた犯人は、体育教師のすぐそばで同じように床に転がっていた。小柄で全体的にあまり凹凸のない体、ぴょこんと癖毛が立った栗色の髪――、体操服姿の赤ずきんだ。

「て、てめえら!?　あそこからどうやっ……」

横から腕を回したような格好で、彼女より背の高い姫川を抱きかかえ床に倒れている。

「早くここから離れて！」

とても逃げられたとは思えない状態から脱していたことに驚いた、体育教師の言葉を赤ずきんは自らの声で断ちきった。《オズボーン》の赤い両目が、赤ずきんの姿を捉える。表情を浮かべられるはずのない顔面に、はっきり喜色が浮かんだ。

ホウ、と感心したような声をもらして、

『知ッテイル、知ッテイルゾ。……ソナタハ、サンドリヨン陛下ノ怨敵(おんてき)、三銃士赤ズキン！』

がしゃん、と一歩踏みだし、左右に張りだしたカイゼルひげの先を指先でしごいた。

『ハッハッハ、幸運デアル！　コノヨウナ見知ラヌ場所デ、憎キ三銃士ニ巡リ合オウトハ！』

その嬉しげな口上に、体育教師は「……三銃士？　なんだそれ」と不思議そうな顔をした。

赤ずきんは、しまった、と表情にだして、

「いいからっ、先生はみんなを連れて逃げて!!　――早く!!」
彼女にしては珍しく、一切の反論を許さない強い口調で叩きつけるようにいい放った。
その声に、赤ずきんの腕のなかで姫川がビクッと肩をゆらした。

……こんなこと、こんなことあっていいはずがないのに。
赤ずきんに抱えられ床に転がったまま、姫川――グレーテルは息を荒らげ、やり場のない感情に胸を締めつけられる。どうして、という思いだけが頭のなかで渦巻いている。
あの瞬間――。とっくにスタミナは切れて執念だけで縄を跳んでいたグレーテルは、それまでバケモノみたいに疲れを感じさせず跳んでいた赤ずきんが、急に足を止めたことに、なんの疑問も抱かず（勝ったわ！）と思った。
そして天井を見上げる赤ずきんに縄が引っかかり、勝者が確定し、とたんに糸が切れたようにグレーテルの両脚から力が抜けた。それと同時だった。
轟音がして天井が破れ、そこから大きな影がふってきたのは。
突然、自分の体に影が差したことにグレーテルも頭上を見上げようとした。もし本当に見上げていたら、いや、そうでなくとも脱力しきった自分ひとりでは到底、逃げられなかったはずだ。だが、影に飲まれるより先にグレーテルは突き飛ばされるような加重を感じ、一瞬の間にぐるぐると視界が回転して、なにがなんだかわからなくなった。

床板が貫かれる音、舞いあがる土煙――。
ふいに風が逆巻いて土煙が晴れ、グレーテルは一体なにが起きたのかノロノロと理解した。
ただし、〝納得〟にはほど遠い。
「いいからっ、先生はみんなを連れて逃げて!!　――早く!!」
耳もとで発された斬りつけるような声に、思わず身がすくんだ。それから、赤ずきんは驚かせてしまったことを謝るように腕のなかのグレーテルへ――当然、それがグレーテルだとは知らずに――視線を向け、ふに、と微笑んでみせた。そして、いう。
「ゴメンね、だいじょうぶだった?」
「………っっ!!」
瞬間、グレーテルの胸を占めたのは、どうしようもなく屈辱的な怒りだった。
(なんてこと!　なんてことなの!　よりによって赤ずきんに助けられ気遣われるなんて!)
自分への怒りは、すぐに矛先を変えて赤ずきんに対する猛烈な、強烈な敵意に変わる。
姫川の姿を借りていることも忘れて、「あなたね……ッ」とケンカを売るように声を荒らげた。
「いそいで先生といっしょに、ここから離れてね!」
グレーテルの言葉を聞かず、赤ずきんはそう念を押して腕を放し、跳ねるように立ちあがる。
……ふらっ。
わずかな体勢の崩れ。立ちあがった赤ずきんの両脚が一瞬もつれたのを、グレーテルは見逃

さなかった。それが平衡感覚の乱れによるものと、わからないグレーテルではない。反射的にグレーテルは赤ずきんの足首に手をのばし、彼女の顔を見上げた。いぶかしげに見下ろしてくる。気づかなければよかった。見なければよかった、と心底、思った。

その傷。

「あ、あなっ、あなた、それ、ケガ……っ」

舌がもつれる。赤ずきんの左まぶた、ぎりぎりで目に入らないきわどい位置に、真横に走る切り傷ができていた。幅は三センチか四センチ。たかがその程度、とはいえない。あと数ミリずれれば眼球に届いていたはずの傷は、彼女の視界を狭めるには十分すぎた。

それは、豊富な運動量を武器とする戦士には、致命的だ。

「だいじょぶ、だいじょぶ。これくらい心配なっしんぐ〜♪　だよっ」

エルデのテレビＣＭで覚えたいい回しで、さも平気そうにいう赤ずきん。その場でぴょんぴょん跳ねてみせる。たしかに、その姿はもう体のバランスも修正し、なんの問題もないように思えた。だが、そんなわけはないのだ。いまは目に見えない綻(ほころ)びは、はげしい戦闘のなかでこそ大きく、無視できないものになっていく。きっと。

赤ずきんは、グレーテルが敵だとはまだ気づいていない。だからかばったと理屈ではわかる。でも。けれど。気が昂(たか)ぶり、グレーテルは手酷(てひど)くなじるようにいった。

「バ、バカじゃないかしら！　大バカだわっ、あなた、なんでそんなケガしてま――」

「あとでっ」
「……ッ？」いいかけた言葉を、場違いに明るい声にさえぎられ、グレーテルは喉が詰まった。
赤ずきんは左目をつむったまま、にっこりと、それはもう花丸をあげるしかないような笑顔を浮かべた。われ知らず息を止めたグレーテルの前で、くるんと背を向ける。グレーテルの視界に収まる、後ろからピコピコハンマーで一発殴るだけで倒れそうな背中。
体操服姿の小さな背中。
なのに。
「あとで――、また大縄跳びしよーね。わたし、すっごく楽しかったから！」
なにも心配するな、任せろ、と言外に語る背中。少女でありながらも、それは〝漢(おとこ)〟の背中。
（……お、お、大きい……っっ⁉）
どどーん！　と、その背中にグレーテルは圧倒された。
思わず、赤ずきんの背中の向こうに、どこまでも広がる大海を幻視してしまって唖然(あぜん)とする。
だが、あわててそんな自分を否定するようにブンブンとはげしく首をふった。汗で額に前髪を貼りつけ、床に手をついて上半身を起こし、溺れかけたように息を荒げてしまう。
（じょ、じょ、じょーだんじゃないわっ！　なによ、なんなのよ、もう！）
《――ねえ、白雪、聞こえてる⁉》

大剣をかまえる《オズボーン》と対峙した赤ずきんは、〝四つ葉騎士章〟を介した念話で白雪姫に呼びかけた。打てば響くように、すかさず《ええ、厄介なことになりましたの》と重々しい応えが返ってくる。赤ずきんは二倍近く身長差のある鋼の甲冑と正面から向き合い、威圧的な姿に屈することなく一歩も退かずにらみつけた。
魔道甲冑兵。その存在と直接相対するのははじめてだが、赤ずきんは話に聞いて知っていた。それは魔力によって自律行動する人造兵士ゴーレムの上位種だといわれている。すぐには動けなさそうな姫川からじりじりと離れ、頭のなかで目まぐるしく状況を分析。
迷っている時間はない。すぐに方策は固まった。赤ずきんは再度、白雪姫に呼びかける。
《あのね！　いい、白雪、ここは――》
《まったく許せませんわ。わたくしと草太さまのときめきタイムを邪魔するなんて！》
プリプリした念に割りこまれ、赤ずきんは喜劇芝居のようにカクッと前のめりに転けかけた。別に、白雪姫はふざけてるわけじゃないのが困りものだ。赤ずきんは眉をしかめ、
《……もっ、もーっ白雪ったら、そんなこといってる場合じゃ――》
ないよ、と叱ろうとしたとき、ぶん！　と風切り音がして《オズボーン》の大剣が頭上からふってきた。一瞬、赤ずきんの気がゆらいだことを見逃さずに放たれた、鋭く重く速い縦の一撃。それを赤ずきんは肌で感じる風の動きだけで見切り、片足を軸に回転してかわした。宙になびく前髪を掠め、刃は床に吸いこまれる。爆発的な衝撃が床に伝わる。

はっはっと息を弾ませ、赤ずきんは（……危なかったぁ、でも戦える！）と思う。
視界が不自由だろうと、幾多の戦いをくぐり抜けてきた経験が、自分を支えてくれる。
『ホウ、ワガ輩ノ剣ヲカワスカ。腕ハ悪クナイヨウデアルナ。結構、結構！』
魔道甲冑兵もまた、床に食いこんだ大剣を持ちあげ、いかにも楽しそうに声を発した。
さながら老獪な古参騎士のごとき風情だ。
「〜〜〜〜〜ッッ!!」
いまの衝撃、そして《オズボーン》の声を受け、ようやく放心していた生徒たちが意味をなさない悲鳴をあげて転けつまろびつ体育館の外へ逃げようとする。騒ぎが広まってはまずい、と考え、赤ずきんは急いで白雪姫に呼びかけた。
《白雪はみんなをお願い！　ここはわたしに任せて！》
《む〜……、またわたくしがフォロー役ですの？　なんだか、納得いきませんわ〜》
《だって、わたし魔法使えないもん。それじゃ、この前話した『お花畑作戦』で！》
こういう、ひとの多い場所でサンドリヨン軍の襲撃があった場合の対処は、既に相談済みであった。白雪姫は消極的肯定を表すように沈黙の念を返してくる。これで生徒たちはなんとかなる、そう判断し、赤ずきんは勢いよく水平に払われた大剣を頭をさげてかわしながら、体操服の上着のなかに下からめくるように手を入れた。
「——それじゃ、一気にカタをつけるよ！」

銃型弓スレイプニルを顕現させるため、上着の裏から〝四つ葉騎士章〟をとりだそうとして。
動きが、止まった。
かと思うと赤ずきんはゴキPの足のように忙しなく手を動かし、上着の裏をまさぐる。
ない、ない、ない、やっぱりない。赤ずきんの額に漫画ちっくな〝がびーん〟の縦線。
五時限めのあと体操服に着替えるさい、制服から付け替えたのはハッキリ覚えているのだが。
（……嘘、どこかに落としちゃった？　そんなの困るよーっ！）
『ドウシタ、ドウシタ、一気ニ〝カタ〟ヲ付ケルノデハナイノカ⁉』
赤ずきんの動揺を見抜き《オズボーン》が連続して大剣を突きだす。ぼぼぼっ！　と空気の貫かれる音。「わっ、たっ、とっ！」と追い立てられ、つんのめり、赤ずきんは道化みたいな滑稽な動きで逃げ回る。白雪姫と念話が交わせている以上、そう遠くない場所に〝四つ葉騎士章〟はなくてはいけない。斬撃をよけながら、素早く周囲に目を走らせる。
破壊された床穴、バスケットボールの詰まったボール籠、赤い緞帳、エトセトラ――。
（やっぱり、落としたのはさっき……っ）
そう考える赤ずきんの視界の端に、白雪姫が光輪キルクイトゥスを眼前にかまえ、静かに早口で呪文を唱えている姿が映った。その隣では草太が他の生徒と違い、逃げだすことなくまっすぐに赤ずきんを見ている。両手を拳に固め、両足をぐっと床に踏んばって『今度は昼休みのように丸めこまれないぞ』と表情にだして。

――でも、とにかく草太くんを逃がさないと！　彼を、そして彼のなかに眠る〝封印の鍵〟を守るためここにいる赤ずきんにとって、第一にそう考えるのは当然だった。けれど、草太の眼差しは、今度は簡単にいうことを聞いてくれそうにはない。赤ずきんは考える。
（たとえば、もし、ここにりんごちゃんがいたとしたら……）
彼女を巻きこみたくない草太は、彼女の手を引いて、まっ先に逃げてくれただろうか？
そんな仮定をしてみて、ふと（あ、そうじゃない）と閃いた。
赤ずきんがそのことに思い至ったとき、ちょうど白雪姫も呪文の詠唱を終えた。体育館の扉に殺到し、われ先に外へ飛びだそうして、結果、足を引っぱり合っている生徒たちに照準を合わせ大きく光輪をふりあげる。発生した魔力の余波に青銀の髪をなびかせ、丸メガネを鋭くキラーンと輝かせて、白雪姫は声も高らかに魔法を放つ。
「そーれっ♪　とっても不思議なお花畑、ざ・いりゅーじょーん～～～～～っ☆☆☆」

3

カーテンが閉められた薄暗い教室は、見ため以上にがらんとした印象があった。
（……あ、これ抱き心地いいかも）
人気のない2‐Aの教室で、体操服姿のりんごは草太のロッカーからヴァルのヌイグルミをとりだし、そっと抱きしめた。機械仕掛けのようには見えないのに手足がぴこぴこ動くのが面

白い。りんごは草太の席に歩みよって机に軽く腰かけるようにした。
りんごはヌイグルミを抱いたまま、教室前方、黒板の上の壁掛け時計を見やる。
(六時限めが終わるまで、あと三十分。畑野さん、どこ行っちゃったのかな……)
まず考えられた西校舎の一階から三階までのトイレすべてを当たってみたが、外れだった。菜園部の花壇がある裏庭に回って、念のため中央校舎にある保健室も覗いて……、やはり畑野の姿は見つけられなかった。もしかしてと思い、最後に自分たちの教室に戻ってみたのだが、そこにも誰もおらず。
むー、とりんごは短く唸って、胸に抱いたヌイグルミの頭にあごを乗っけるようにする。
肌触りのよさにぐりぐりあごを動かすと、抗議するようにちゃちな手足が上下した。
「…………あっ」
物思いしながら前方を見ていたりんごは、ふと黒板を見とがめた。眉をひそめる。
五時限めの数学の授業内容が消しきれず残っていた。xとyを使った簡単な方程式。
「も〜っ、今日の黒板消し当番は誰？　ちゃんと消えてないゾ！」
りんごは頬をふくらませて草太の席から離れ、黒板に向かって歩いていく。黒板の前の教壇にヌイグルミを置いて、ブツブツ文句をいいながらも黒板消しをかけていき、きれいにする。
チョーク受けに黒板消しを戻して、教壇へとふり返り、ふたたびヌイグルミを抱きあげる。
視線の先には、教室ほぼ中央にある草太の机とイス、机の横にかかっている弁当袋。

「…………バカ」

困ったような顔で席に座っている草太の姿を思い出し、りんごは小さくいった。

今日は、クラスでも目立たない生徒ランキング上位の草太が大いに注目を集めた一日だった。当人である草太にも白雪姫にも聞きづらいらしい女子生徒から、はげしい質問責めにされたのは、なぜかりんごだった。納得がいかない、と思う。

(そんなの、あたしのほうが知りたいゾ!)

──鈴風、どうしちゃったの? あんなカワイイ子からモテモテだなんて。

──ねね、りんごは平気なの? 草太くん、あの転校生にとられちゃっても。

(べ、別に草太は、あたしのものってわけじゃ……)

思い返すだけで苦々しい感情が込みあげてくる。ああ嫌になる、なんなのだ、この苛々は。

「…………バカ、バカバカっ」

草太も草太だ。いつも困ったような顔をするばかりで、煮えきらない態度で。

迷惑ならば、はっきりそういってやればいいのに。

(もうっ、ひとの気も知らないで──)

勢いでそう思ってから、りんごはなにかに耐えかねたようにガバッとヌイグルミを持ちあげ、顔を隠すようにした。ヌイグルミの陰でボア生地に鼻先をくすぐられながら、んっんっ、と喉を鳴らした。さらに、こほん、と咳払い。


がおがお～♪
（※オイ）
2-A
木下

「がおーっ。こらそこ、鈴風草太、おまえがはっきりしないのがいけないんだぞ〜！」
かなり無理のあるヴァルの声真似をはじめる。演目『もしもあのオオカミが先生だったら』。
「一体どう考えているのだ、がおーっ！」
あのオオカミの口調ってこんな感じだったかな、とあまり自信のないまま声真似を続ける。
もちろん、草太の席から声が返ってくることはない。
「わかっているのか？　本当におまえが一番大事にすべきなのが誰なのか、がおがお〜っ」
ヌイグルミを左右にゆらしながら、りんごはここにはいない草太を問いつめる。教室にぽつんとひとりで、草太の席から返事がくることもないというのが逆にりんごを安心させ、だんだん芝居も堂に入ってくる。常であれば絶対、絶対口にしない言葉が口を突いた。
「がおー、答えられないようだな。しかたない、特別に教えてやろう。おまえが一番大事にしなくてはいけないのは、すぐ隣の席に座っている、とってもかわいくて性格もよい木ノ下りんごなのだぞ、が〜お〜〜〜」
「あはは、わかってるよ、それは」
瞬間、りんごの心臓は確実に凍りついた。教壇にいるりんごから見て左、教室前方のスライド式扉から投げられた声によって。りんごはこれ以上ないくらいぎこちない動作で、扉のほうを見やる。そこには、りんごよりほんの一ミリ二ミリ背が低い、少年の姿。
扉が開く音をりんごは聞いていない。けれど、それは単に演目に熱中していたせいである。

「そ、そそそそ草太⁉　い、いいいいいつからそこに⁉」
「え、いつって、えっと……」
　壊れたステレオみたいな問いかけに、草太は思わず及び腰になる。
（……ちっ、違う違う！　いまのはそういうことじゃないんだゾ！　一番大事にしろっていうのは、あくまで長年つきあいのある、ふだんアレコレ面倒をみている人間として当然のことで！　べ、別にあたしが草太のことを……とか、そんなんじゃ！　って、ああもう！）
　りんごは精神的窮地に追いこまれた。なにもわかってなさそうな草太の顔をギッと涙目でにらむ。逆恨みもいいところである。りんごはヌイグルミを床に放りだし——乱暴な扱いに抗議するように手足が動いたが、知ったことか——、なにかいいたそうに教室に入ってくる草太を迎撃するため、足音高く教壇から離れた。
　ものすごい剣幕で迫ってくるりんごに、草太はわかりやすく怯えて足を止める。
「もぉぉぉ……！　こらあっ、草——」
　とにかく草太を叱り飛ばして、とにかくいつもの自分のペースをとり戻さないと。
　そのとき、りんごが考えていたのはそれだけだった。だが自覚症状のないまま動揺によってフラついていた彼女の足は、いいきる前に最前列の机の足にひっかかる。最悪だ。りんごは草太の胸に飛びこむように頭から突っこんでしまった。そして、草太は受けとめきれない。
　りんごは草太を押し倒すような格好で床に倒れてしまう。うっ、と草太が呻きをもらした。

その声が信じられないくらい近くから耳に届いて、りんごはハッとする。息が止まる。
「――」
なにもいえなくなる。ひやりと冷たい教室の床、草太の頭の両脇に手をついて。
背中を打った痛みに一度目をつむった草太が、おずおずとまぶたを持ちあげた。小動物っぽい黒目がちの瞳。りんごはドキリとする。こんな間近で草太と見つめあうなんて、いつ以来かわからない。(ううん、……はじめて、かも――)
ごく至近距離にりんごと草太の顔がある。互いの瞳に相手が映っている。以前、少女マンガかなにかで読んだフレーズが、唐突にりんごの脳裏で再生された。場面は放課後の教室。片想いの少年とふたたきりになった主人公の少女のモノローグ『人気のないふたりきりの教室は、まるで魔法がかかってるみたい』。
そうして恋に奥手だった少女は、見えない力に後押しされて――。
「そ、草、太……?」
りんごは無意識に草太の名を呼んでいた。自分がなにをいおうとしているのか、自分でもわからなかった。……あ、これが魔法ってやつかな、変な感じ、とそんな他人ごとのような思いが胸のうちに生まれて、泡のようにぱちんと弾けた。
それを合図に口が勝手に動きはじめる。夢のなかで自分を外側から眺めているような感覚。
「……草太、あ、あたし」

「う、うん」
「あ、あたし、ね、――――」
そうして唇が、なにかとんでもない一言をいってしまいそうになった、とき。
しかし結果的にりんごの口をついたのは、胸の奥から急速浮上してきた、疑問の言葉だった。
まばたき一回と同時に、
「あれ。そういえば草太、なんで教室に戻ってきてるの？」
変化は劇的だった。
びっくん！　と漁船の甲板に釣りあげられたカジキみたいに大げさに身をふるわせ、草太は限界まで目を丸くした。ひとが痛いところを突かれたときの典型的な反応だった。そしてりんごはそれを見逃すほどヌルくない。「え、あ、いや、それは……っ」と口ごもる草太に対し、魔法が解けたりんごが正気に戻るのに、さほど時間は必要なかった。
草太の顔には〝絶対バレるわけにいかない〟と決意がにじんでいた。むぎゅ、と口を閉ざして。
りんごは、じとーっとした眼差しで草太の顔を観察し、馬乗りになるように身を起こす。
そういえば、考える。記憶を辿る。二階のトイレを調べていたとき、不審な音を聞いたように思う。学校の近くで交通事故でもあったみたいな音。トイレにいたせいで音が聞こえてきた方角はわからなかったし、あのときは畑野を探すことで頭がいっぱいだったけれど。

（うーん、と。これってつまり？）
ぽくぽくぽくちーん、とりんごの脳内で利発そうな小坊主が、ひとつの解答を弾きだした。
「!! 体育館でなにが起きてるの、どうせ赤ずきんたちなんでしょ!!」
鋭い。
「ない、ない！　なにも起こってないってば、りんご！」
「むむむ……、その草太らしくない必死さが怪しいゾ！」
「うわあっ」
鋭すぎる。草太がここに来た理由。——体育館から離れるものかと固く誓っていた草太は、赤ずきんに「りんごちゃんが戻ってこないよう引き留めてきて！」と頼まれたのだった。さすがにそれには同意するしかなく、草太は赤ずきんのいうとおり教室まで戻ってきた。せっかくの決意をひるがえしてまでだ。……絶対、絶対バレるわけにはいかない。
なにより、りんごのために。だが、
「この目でたしかめれば、すぐわかるんだゾ！　もし、あたしの予想が当たってたら——ッ」
と、りんごは弾かれたように立ちあがろうとする。
反射的に、草太は「ダメだ！」と声をあげ彼女の腰に抱きついた。草太らしくない大胆行動に、思わずりんごは「きゃあぁ」と悲鳴をあげたが、ただただ必死に〝りんごを巻きこむわけにいかない〟と考える草太は、その声も耳に届かない。

抵抗するりんご、引き留める草太、ふたりはもつれあい今度は草太がりんごを押し倒した。
……しかし、もはやそこにロマンチックな魔法が存在する余地はない。
「こら草太！　どこに顔当ててるの、ほんとに怒るゾ！　あ、こら、くすぐったいってば！」
ポカポカ頭を叩いてくるりんごに、草太はひたすら「ゴメン」をくり返す。けれど腕の力をゆるめることはない。埃っぽい教室の床に背中をつき、草太に押さえつけられているりんごの顔は、生まれてはじめてというくらいまっ赤だった。見ようによっては、その表情はまんざらでもなさそう……といえたかも、しれない。
とはいえ。
『ホントのところどうなの？』と聞けば、間違いなく必殺パンチが返ってくるだろうが。

4

かくしてりんごが草太に押し倒され、乙女のピンチに陥っているころ（？）。
午後の日差しがふりそそぐ絃車中学の校庭では、これまた奇妙な光景がくり広げられていた。
「それじゃあ、みなさん、両手を頭の上にかまえてウサ耳のポーズですわ」
全校朝礼のときなど校長が挨拶に使う講壇に立った白雪姫は、自分の言葉のとおりに両手を頭の上にかまえる。するときっちり整列した2－Aと2－Bの男女がそろって白雪姫の真似をして両手を同じようにかまえた。これだけでも十分に異様なのだが、さらに生徒たちの頭には

信じがたいことに一輪の花がぴょこりと生えていた。
それはチューリップに酷似していたが、幻のように透きとおり、うっすら発光までしていた。
なるほど、その眺めは不思議なお花畑である。
「では〝森の動物さん〟体操、はじめますの！　はい、いっち、にー」
勢いよくいって、白雪姫はウサ耳のポーズのまま屈伸運動を二回。生徒たちも同じ動きをする。白雪姫はそのあと、まっすぐ立ったままウサ耳にした両手をぴこぴこ前に倒して、数を数えたのと同じリズムで「ぴょん、ぴょん」と声にだす。当然のように生徒たちも、それにならって一斉に「ぴょん、ぴょん（ぴこ、ぴこ）」とやる。
たしかにそれは体操だったが、しかしウサ耳のポーズをする意味はまったく不明である。
「にー、にー」←白雪姫
「ぴょん、ぴょん」←全員
「さん、にー」←白雪姫
「ぴょん、ぴょん」←全員
驚くべきことに、よく見れば生徒たちのなかには、ゴリラ顔の体育教師も混ざっていた。生徒たちと同じようにウサ耳のポーズをとり、頭には半透明のチューリップがゆれている。ゴツい顔を夢心地にとろけさせ、半分眠っているような目つきで、なんとも楽しそうに「ぴょんぴょん♪」と手を動かしていた。

紘車中学の校庭はH型をした校舎の東側にあって、校庭に面した東校舎の窓からまだ授業中の三年の生徒たちが「なんだなんだ?」と顔を覗かせている。位置関係的に北側の体育館を見ることができないのは、幸いだ。白雪姫は生徒たちに向かって優雅にひらりと片手をふり、すべてをうやむやにしてしまう極上の笑みで「なんでもありませんの、みなさん。授業にお戻りになってくださいですわ～☆」と声を投げた。

とたんに野次馬と化していた男子たちはデレッと相好を崩し、行儀良く「はーい」と返事をして納得のいかない顔の女子もろとも、窓から離れる。……うふ、ちょろいですわ、と白雪姫は内心で呟いて、改めてキリリと表情を引きしめ生徒たちと向きあった。

「はいっ、次は、ぐーにした両手を高くかかげて、クマさんのポーズですわ!」

白雪姫の号令に、生徒たちと体育教師は糸で操られる人形のような動きで、素直にしたがう。

「いいですか、みなさん、まるっとクマさんの気持ちになりきってお願いしますの」

……と、いうことらしい。白雪姫はあくまで真剣だ。そして、体を前後に倒す運動。

「いっち、にー」←白雪姫

「がおー、がおー」←全員

「にー、にー」←白雪姫

「がおー、がおー」←全員

種を明かせば、生徒および体育教師の頭の花は白雪姫の精神操作魔法により現れたもの。校

長に使ったのと同じ魔法である。赤ずきんがサンドリヨンの刺客を撃退するまで、白雪姫がこの魔法で一般人を避難させ、あとでみなの記憶を操作し全てを忘れてもらう。これが、赤ずきんと白雪姫が立案した――『お花畑作戦』である。

作戦のなかには、現場に損害があれば白雪姫の復元魔法で直すことも折りこみ済みだ。まったく〝魔法使い〟使いが荒いですわ、と白雪姫は思う。同時に、なんて健気で優秀なのでしょう、わたくしって、と自分に酔ってみたり。わざわざ〝森の動物さん〟体操なんてものを行っているのも、校舎内の生徒たちに見られても怪しまれないように、との白雪姫の配慮なのだが……。それに関しては残念ながら別の意味で怪しすぎた。

凄腕の魔法使いといっても、さすがに二クラス分の生徒と教師ひとりを同時に操るのは並大抵のことではない。見ためはかなりアホっぽいが、実は精神的にはぎりぎり綱渡りの重労働であった。一瞬たりとも気は抜けない。魔法の維持に精神力を傾け、集中し、額には玉の汗がにじんでいる。それを拭う余裕もない。

「その調子ですわ。続いて、小さく体を丸めて冬眠中のヤマネのポーズ！（↑まにあっく）」

だから。白雪姫は気づかないでいた。

生徒たちのなかに姫川リサ――グレーテルの姿がないということに。

5

教室と校庭で、草太と白雪姫がそれぞれ激戦を続けているころ。

「――――ッ!!」

斬撃、回避、斬撃、回避、斬撃、回避、斬撃、回避、斬撃、回避、斬撃、回避、赤ずきんもまた凶悪な太刀風(たちかぜ)の吹き荒れる嵐のただなかにいた。赤ずきんの胴回りほどもある甲冑の籠手(こて)が、赤ずきんの背丈ほどもある大剣を軽々と握り、ふり回している。その太刀筋は速く、正確。赤ずきんがこれまで戦ったことのある人造兵士ゴーレムとは、まるで別物だ。

さすが魔道甲冑兵。伊達(だて)に、立派なカイゼル髭を生やしていないということか――?

『ハッハッ、チョコマカト鼠ノヨウデアルナ。ソレデモ、誇リ高キ三銃士デアルカ』

赤ずきんの体育館履きの靴底が床とこすれるギュキュッという音と、それを追って動く《オズボーン》の重々しい足音。

(〝四つ葉騎士章〟を落としたのは、あそこ……!)

ゴールリングの真下まで追いこまれた赤ずきんは、《オズボーン》落下の直撃を受けて穴が開いたセンターサークルを右目だけでにらむ。だが、視界をさえぎるように魔道甲冑兵の巨体が前に立ちふさがり『ズイブン、気ニシテイルナ。大事ナ落トシモノデアルカ』と見透かすようにいった。大剣の先が、すらりと赤ずきんに向けられる。

静かに張りつめる空気。
まぶたの傷に汗が染みて、ひりひりとしていた。相変わらず左目は使いものにならない。
「そーだよ、落としものなの。だから、ちょっと通してもらえるかなぁ……？」
『フム、要求ナラバ力尽クデ通シテミルガヨイ』
すうっとゴーレムが大剣を上段にかまえる。赤ずきんは、ムッと顔をしかめた。
「……、あのね。それって素手の相手にいうセリフじゃないと思うよ！」
『…………』
「…………」
『……、問答無用デアル！　スベテハ、サンドリヨン陛下ノタメ！』
偉そうな物言いのわりに狭いところもある《オズボーン》だった。大きく孤を描いてふりおろされる大剣の刃は、軌道上のゴールリングをも易々と切り裂いて赤ずきんの頭上に迫る。赤ずきんは大剣の間合いから逃れるように後跳(バックステップ)。背中にドンッと体育館の壁が当たり、自分の迂(う)闊(かつ)さを呪う。後方は壁ということを一瞬、失念してしまった。体勢が崩れたところに連続で刃が襲いかかる。赤ずきんが立っている床、背後の壁が、またたく間に刻まれるが、驚異の見切りですべての斬撃をかい潜った赤ずきんは甲冑の右側方に脱出した。
バスケットコートのサイドライン際、奥手には赤い緞帳のさがった一段高いステージ。センターサークルの穴は右斜め前方——。赤ずきんは、だんっと床をけって穴に向かってダッシュ。

しかし、その鼻先に断頭台の刃が落ちるように大剣がふりおろされ、急制動をかけた。負荷のかかりすぎで、いまにもふくらはぎに痙攣が起きそうだ。

『フフン。甘イ、甘イ、ソノ程度デハ、マダ通セヌデアルゾ』

嫌みったらしく余裕たっぷりに、《オズボーン》が赤ずきんの前に立ちはだかる。

後方から日差しを受ける鋼の巨体の影が、赤ずきんの小柄な体を覆った。肩で息をしながら、赤ずきんは額ににじむ汗を拭う。武器もなく視界も狭い、六時限めが終わるまでに片づけようと考えると時間もない。それに信頼できる相棒のヴァルもいない。

(ランダージョったら！　『ぜんぶ拾った』って、嘘じゃない！)

男子が授業に使っていたコートでグレーテルは車輪付きのボール籠の陰に隠れていた。女子側のコート上で続いている赤ずきんと《オズボーン》の戦況をこっそり見守っている。魔法に耐性のないエルデ人ならともかく、対象を数十名に拡げた〝薄まった〟魔法に支配されるグレーテルではない。

魔道甲冑兵《オズボーン》。それはグレーテルがランダージョの勧めでサンドリヨンの宝物庫から持ちだした魔法道具のひとつだ。封印された状態で持ちだした道具が、どうやって本来の姿をとり戻し体育館に現れたのか、グレーテルには想像もつかない。

——にゃにゃにゃ！　これはオススメにゃ、グレーテルしゃま〜っ。

この世界にくる前、忍びこんだ宝物庫で喜々として説明してくれたランダージョの言葉。
——これはサンドリヨンしゃまが封印される千年前から、サンドリヨンしゃまの尖兵として戦ってきたといわれる魔道甲冑兵《オズボーン》にゃ。その剣の腕は三銃士にも退けをとらないといわれてるにゃ～、ぜひぜひ持っていくにゃ！
グレーテルも以前、『サンドリヨンさまに命じられ、ヘンゼルさまが魔道甲冑兵を戦地に送りこんだ』と人狼兵が話しているのを聞いたことがあった。どれほどの戦果をあげたのかまでは知らないが、みごとに赤ずきんを追いこんでいる現状を見れば、たしかにランダージョの推薦は正しかったらしい……。
（いいえ、違うわ）
ぷかりと浮かんだ自分の考えを否定し、グレーテルは手のなかの〝もの〟を握りしめた。
ステージを背にした赤ずきんの前に《オズボーン》が位置しているので、男子側のコートにいるグレーテルから彼女の様子はよく見えない。ころころと車輪を転がし見やすい場所に移動する。赤ずきんを視界に捉え、グレーテルは小さく息をのんだ。片目をふさがれ、なのにまるで戦意を衰えさせず相手をにらむ姿。それは紛うことなき戦士の姿だった。
ここまでの攻防から、動きに片目による不利をあまり感じさせない赤ずきんだが、今朝ブタの三兄弟が倒されるのを目撃しているグレーテルは、あのときの動きはもっと速くて、もっと鋭かった、とわかっていた。あれだけの動きを見せていながらも、あれは本来の赤ずきんの動

きではないのだ。グレーテルは小さく鼻を鳴らす。
（ふ、ふん、ざまーみなさい！　自分を狙ってる敵をかばってケガするなんてバカだもの！）
ぎりり、とグレーテルは手のなかの〝もの〟にさらに強く力を込めて、握りしめる。
それは、なかに永遠を封じこめているような、どこまでも深い、透きとおるような緑玉細工（りょくぎょくざいく）。
気がつけば偶然、左手のなかに転がりこんでいた。恐らくは、さっきかばわれたときに。
グリーンエメラルド色の騎士章。
そうよ、とグレーテルは思う。この幸運を利用しない手はない。この勝機を。
（そのまま倒されればいいんだわ！　ええ、探してる〝もの〟はここにあるというのにね！）
雑念を払うように、まるで自分を叱りつけるみたいに強く念じる。

《まだ……、ですの？　赤……ずきん！》
ステージを背にする形でふたたび追いこまれた赤ずきんの意識に、白雪姫からの念話が届く。
切れ切れなのは、向こうも魔法の維持でいっぱいいっぱいだからだろう。《こちらも……そう長……くは、持ち……ませんわ！》と続く言葉に赤ずきんはどう返すべきか一瞬だけ、迷った。
ダメだ。弱音は吐けない、助力を求めるわけにはいかない。
白雪姫は白雪姫で、余裕などないギリギリのところで〝戦って〟いるのだから。
きゅ、と赤ずきんは下唇を軽く噛んで、

《ごめんねー♪　ちょっと手こずってるけど、もう終わるからっ！》
ことさら明るい念を返した。
たかが人造兵士一体に時間をかけるな、というような文句がもごもご不明瞭に届いて、白雪姫からの念話は途絶えた。簡単にいってくれるよね、と赤ずきんは苦笑する。正面、日差しを背に受け逆光になっているせいで黒々として見える《オズボーン》を見上げた。
相手は手数だけでは赤ずきんを仕留められないと判断したか、両手で大剣の柄を握って正眼にかまえ、どっしり腰を落としている。本気だ、と赤ずきんは思う。……これまでが本気じゃなかったわけではないだろうが、今度は本気の本気という感じだった。
ひやりとしたものを背中に感じながら赤ずきんは、それにしても、と引っかかった。
人造兵士ゴーレムは、通常、製作者によって多大な魔力を注がれ、それを動力源として活動する。なのに目前の魔道甲冑兵からは、動力源としては甚だ微弱な魔力しか感じられない。赤ずきんの知識の範疇外だった。どうなっている？
『今度ハ逃ガサンデアル。覚悟ヲ決メルガヨイデアルゾ……？』
すっとゴーレムが間合いをわずかに詰めてきた。それだけで一撃必中の決死圏に捉えられる。
赤ずきんは、べー、と舌をだして、
「フェレナンドさまに選ばれた三銃士を舐めないでよね、そんな簡単には――」
轟ッッ!!!!

これまでの連続攻撃が嵐とするなら、それはまさに落雷とでもいうべき一閃だった。どこへ逃げるか一瞬でも迷っていれば、恐怖を感じる間もなく〝ひらき〟にされていたはずだ。赤ずきんはステージを背にした瞬間に決めたとおり、大きく後方に跳んで回避した。ただし真後ろへ、ではない。上へ、ステージの赤い緞帳めがけて全力の後方宙返り。
《オズボーン》の大剣が空を斬る。
『──フムン。ヤハリナ、ソウ動イタデアルカ！』
そこしかない、という回避行動をとった赤ずきんに、それを読んでいたゴーレムは大剣を引き戻し、再度突きを放とうとする。赤ずきんの体はまだ宙にある。狙ってくださいといわんばかりだ。上下逆さまになった赤ずきんは、分厚い生地の緞帳に手をかけ、思いきり天井のレールから引き剥がした。大きく波打つように緞帳がたわみ、はためきながら落ちてくる。同時に《オズボーン》が刃を水平にして赤ずきんめがけ突きを放った。
総重量はかなりある緞帳を、赤ずきんは体が回転する勢いも利用して闘牛士がマントを扱うように軽々とふり払う。突きの軌道の先へ、盾にするように。大剣の切っ先は、やすやすと生地を貫く。けれど、ほんのわずかでも勢いを殺してくれれば、それで十分だった。赤ずきんは宙に浮いたまま軽業めいた動きで体を丸め、天地逆になっている視界で大剣の刃が頭上を掠めていく。ぴょこんと立った癖毛の先端が削られる。
極限に置かれ、時間の流れまでゆるやかに感じながら赤ずきんは、一瞬で全身の筋肉が悲鳴

をあげるほど体を捻り、体勢を変え、突きだされた大剣の刃の上に足を着いた。重さを感じさせない羽毛が地に落ちるような動き。次いで、拳銃から放たれる鉄の弾丸のような鋭さで刃をけり、一心に飛びだす。

緞帳を掴んだ手を思いきりふって、今度は鞭のように操り《オズボーン》を狙う。ひゅごう、と大きな団扇で空を扇いだような音がして、緞帳は竜巻に巻きこまれたような軌跡を描き、魔道甲冑兵の上半身に絡みつき頭部まで覆いつくした。余った赤い生地が荒波のごとく宙になびいている。大剣を突きだした形の甲冑の腕を足場にして、赤ずきんは波の隙間を縫うようにさらに跳躍した。もっと鋭く！

波打つ緞帳の向こう、開けた視界の先には、彼の落下によって開いたセンターサークルの穴。いける。《オズボーン》の頭上を越える――。

――と、いきなり赤ずきんの腹部に穴が穿たれたかと思うほどの重い重い重い、衝撃がきた。どごん、という鈍い音を赤ずきんは耳でなく体内で響く肉と骨の軋みとして感知した。

「あ…………………………!!」

それ以上、苦悶も悲鳴もあげられなかった。全身のスイッチを一気にすべて落とされたようだった。

意識が途切れる寸前、自分の身になにが起きたのか理解する。

鈍器としても十分に凶悪すぎる魔道甲冑兵の兜が赤ずきんを真下から突きあげたのだ。


ビダッ
タン…
たあ!

『ハッハァ！　目的地ガワカッテイレバ、動キハ読メルトイウモノデアル！』
攻防に読み勝ったことを自慢する、嫌みなほど偉そうな声。
赤ずきんの小柄な体が、ぽーんとけり飛ばされた鞠のように面白いほど遠くまで宙を舞った。
糸が切れた操り人形のように体が捻れ、手足が踊る。
落下地点には、バスケットボールが詰まった車輪付きのボール籠があった。

6

血の滴を空中に点々と残しながら、はげしい勢いで赤ずきんが落ちてきた。
それはもう、それ自体が必殺の攻撃といっていい威力だった。
赤ずきんの体は頑丈な鉄の格子でできたボール籠に激突し、なかのボールをぶちまけ、その裏に隠れていたグレーテルを下敷きにして床に転がった。一旦、ボール籠に当たって減速していなければ、その体当たりを食らったグレーテルは、完全に息の根を止められていたかもしれない。
「……あ、うぁ……、な、なんなの……？」
赤ずきんに押し潰されたグレーテルは記憶までが混乱したように、まず疑問を口にした。

ふたりは拳で語りあったあとの男同士のように、半ば折り重なって大の字に倒れている。グレーテルの腹部を枕にして、目を回した赤ずきんの頭が乗っかっている。完全に意識が断たれているようだ。力なく投げだされたグレーテルの足下には横倒しになった空のボール籠。

絞りだすように呻いてグレーテルは床に肘をつき、よろよろと上半身を起こした。

なんとか体は動く。それすら奇跡に思えるほどの衝撃だった。邪魔っけな赤ずきんの頭を押しのけ、膝を曲げようとしたが左足が自由にならない。目を向けるとへしゃげたボール籠に足先が捻じこまれ、足首の辺りで引っかかっていた。抜こうとしてもびくともしない。

体育館内の方々へと転がっていったバスケットボールが、壁にぶつかり鈍い音を立てている。

「――あ、」

短く声をもらして、グレーテルは〝四つ葉騎士章〟を握っていた左手を確認する。

無事だった。しっかり、ぐーになったままだ。ほ、と吐息をこぼした。

「…………ぅ」

ごくごくかすかに赤ずきんが呻き、ぴくりと指先を動かした。

反射的にグレーテルは左手を背後に回して隠してしまう。大丈夫、まだまだ目覚める様子はない。緊張によるものか興奮によるものか胸が高鳴ってしかたなかった。憎い相手を確実に殺せる毒薬を手にしていて、その相手がすぐそばで寝ているようなものだ。しかも、この毒薬はわざわざ相手の口に垂らす必要もない。使わないことが正しい使用法。

隠し持っているだけで、確実に、死に追いこめる。――願いが、叶う。
兄の気持ちをグレーテルから奪ったものが、消える。
いよいよなのだ。
(これでいい、これでいいのよ、グレーテル！　いいんだったら！)
体育館内の北側、もう一方のバスケットコートから、ばさりと布をめくる音がした。グレーテルはそちらへ顔を向ける。上半身に絡みついていた赤い緞帳を床に投げ捨て、魔道甲冑兵《オズボーン》がその全身をあらわにした。
ぴかりーん☆　と研ぎすました刃のようなカイゼルひげの先に、陽光の輝きが点っている。
がしゃんっ、とこちらに踏みだしながら《オズボーン》が居丈高に嘲るように声をあげた。
『フゥム。マ、三銃士トイウノモ、タイシタコトナカッタデアルナァ、ハッハッハ！』

――ムカ

(……え？　〝ムカ〟？)
瞬間、グレーテルは胸のうちで生まれた正体不明の小さな熱量に、戸惑った。
わけもなく胸がざわめく。なんだ？
『マッタク嘆カワシイ。コノ程度ノ相手ニ、サンドリヨン軍ガ、テコズラサレテイタトハ』

がしゃん、がしゃん、と大剣をたずさえて《オズボーン》が近づいてくる。
素手の、しかも片目をふさがれている相手に本気をだしておいて、よくいえたものだ。

　ムカムカ

（……え？　え？）
胸のうちの熱量が、じわじわと増えていくことにグレーテルはさらに戸惑う。
なんだ、この感覚は？　よろこぶべきところなのに。
おかしい。赤ずきんの激突を受けたとき、頭をどこかにぶつけたのだろうか？
『コレマデ倒サレタ兵士ハ、ヨホド貧弱ダッタラシイナ。ヘンゼル殿モ苦労シテイルダロウ』
がしゃんがしゃん。
『ヤハリ、ワガ輩ガ、モット戦場ニ立タネバナラヌカ……』
がしゃんがしゃん。
『……ソレニシテモ遠クマデ、ヨク飛ンダモノデアル。イヤ、軽イ、軽イ、ハッハッハッハ』
がしゃんがしゃん。

ムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカ

魔道甲冑兵の体が近づき、視界のなかで大きくなるにつれ、グレーテルの胸のうちの熱量は、はっきりと不快感を催させるほどになった。不快で、不服で、不満で、不愉快だ。理由？　理由はなんだろう。わからない。

わからないけれど――。

グレーテルは胸の熱量を右足にそそぎ、左足がひっかかっているボール籠を思いきり、けり飛ばした。がらーん、と間延びした音を立ててボール籠が転がって遠のき、左足が自由になった。両脚に気合いを入れて立ちあがる。

赤ずきんの前に進みでて、南側のバスケットコートまで入ってきた魔道甲冑兵と向かい合う。あら、と思った。なにをしようとしているんだろう、自分は？

『……ウム？　ソナタハ、ナンデアルカ？　カヨワキ乙女ヨ』

赤ずきんと重なって倒れていたグレーテルに、いまはじめて気づいた様子で相手は兜の頭をかしげた。首をかしげたいのは、グレーテルも同じだ。自分がなにをしているのか、自分でもわからない。ただ、胸のなかの苛つきだけがたしかだった。

『赤ズキンヲ、カバオウトイウノカ？　止メテオクデアル、ソナタニハ無理ダ』

「な、ななな！　かっ、かばうわけないでしょ、あなた変なことというのやめなさい！」

ぼっ、と頬を赤くして、心の恥部を突かれたみたいにグレーテルは激昂した。

嵐のなかの小舟のように頭が混乱している。かばうわけがない。赤ずきんをかばうわけがない。ボケボケした常春頭な小娘ではないのだ。自分は敵をかばうようなバカじゃない。けれど、だったらこれはなんだろう。自分はなにをしているのだろう。

この胸に渦巻いている煩わしい感情の正体はなんだろう――。

グレーテルはうつむき、両手を拳にしてぷるぷるふるわせた。……やがて、あっ、と思う。

(……そ、そうよ。そうだわ、これは……)

弾かれたように鋭く顔をあげる。《オズボーン》をきつく見据える。

(これは、赤ずきんに倒された三兄弟のための怒り!)

――コレマデ倒サレタ兵士ハ、ヨホド貧弱ダッタラシイナ。

さっきの、あの言葉は、今朝、万全状態の赤ずきんに挑み、倒されたブタの三兄弟を間接的にバカにしたものだ。グレーテルが一体につき一週間もかけて、心血そそいで造りあげた最強の手駒たちを。

『フムン?』

グレーテルのことを、《オズボーン》はこれっぽっちも脅威とは考えていない様子だ。

ムカムカ。決定。一発、へこませてやらねば気が済まない。

魔道甲冑兵はグレーテルのことなど眼中になさそうに足を踏みだした。がしゃん。その一歩で、グレーテルは大剣の間合いに捉えられる。背筋が、ゾクッとした。自分に赤ずきんみたい

なあんな回避ができるとは思えない。
　攻撃されれば、死ぬ。
『……フム、ソノ顔、ワガ輩ニ含ムモノガアルヨウダナ。イイデアル、聞コウデハナイカ』
　表情にありありと嫌悪を浮かべたグレーテルに、《オズボーン》は尊大な態度で話をうながした。その態度もムカつく。息を詰め、グレーテルは左手を突きだす。しかし用があるのは、手のなかのものじゃない。用があるのは、手の甲に張りつけている魔法道具。
　──グレーテルを姫川リサに見せている〝トリック・トラップ・シール〟──。
　シールの端に右手の人差し指と親指をかける。《オズボーン》を、きっ、とにらみつけ、
「ええ、それじゃあ、まずいってあげる。あなた、さっきからデアルデアルうるさいのよ」
　かし、とほんのわずかに人差し指の爪をシールと皮膚の間に、入れた。親指はシールの上にそえる。……これでもグレーテルは、サンドリヨン軍でも〝滅びの魔女の城〟においても、それなりに有名人だ。あくまで、それはサンドリヨンの片腕であるヘンゼルの妹、という意味でしかないが。このさい、それで十分だった。
　シールを剥がして正体を明かし、兄の名前を持ちだせば魔道甲冑兵も逆らえないはず。
　謝罪だ、土下座だ。そこに粛正(しゅくせい)キックで退散させてやる。そして、あとでじっくりと説教だ。
　……どこかに矛盾があるか？　なにかがズレているか？　そんな気もしたが、グレーテルはもう考えない。

ぐ、とシールにかけた指に力をこめ、グレーテルは本命の言葉をいい放つ。
「それから、あなた――ッ」
「……リ、サ、ちゃん……？」
あなた、よくもわたしの三兄弟をコケにしてくれたわね。
シールを剥がすと同時に叩きつけるつもりだった言葉は、そこから先に続くことはなかった。
ごくごくかすかに、すぐ真後ろから聞こえた、かぼそい声のせいで。あぐっ、と息をのみグレーテルは危うく舌を噛みかけた。赤ずきんが目覚めようとしている。
「あ、あな、た……っ」
『……フム？ ドウシタデアルカ？ 遠慮セズ、イウガヨイデアルゾ、サア、サア』
《オズボーン》にその掠れ声は届いていないのか、余裕たっぷりな口調にからかうようなニュアンスを含ませ、彼はグレーテルに続きをうながした。赤ずきんに聞かれるのにいえるわけがない、シールを剥がすわけにいかないのは尚更だ。
（ ）
グレーテルの思考はまっ白な空白に占められていた。
……しかし。かといってこのまま、すごすご引きさがるにはグレーテルの気位は高すぎた。
そう、いっそ致命的なほどに。
「あ、あ、あ、あなたね――!!」

体育館の二階の高さにある窓から差しこむ西日を受けて、《オズボーン》の鉄製のカイゼルひげが、きらり、きらり、ときらめいている。まるで、グレーテルを嘲笑うみたいに。気に障る、ムカつくったらありはしない。

だから、いった。グレーテルはシールから手を離して、いってしまった。

「そのひげ、ぜんぜんちっともこれっぽっちもかけらほども……似合ってないわっ!!」

ぶしゅーっ!! と音がした。

熱した金属を水に浸けたような、それを殺人的なまでに拡大させたような、大音量。音だけではなく、実際に魔道甲冑兵の装甲のありとあらゆる隙間から、ジェット噴射のようにはげしく、熱風が吹きだした。目を開けていられず、反射的にギュッと閉じたグレーテルの耳に、声が届いた。呪わしい怒声が。

『ヌガアアアアア!! ソレダケハ!! ソレダケハイッテナラヌコトヲオオオオ!!』

めきゃめきゃ、ごきゅ、ずぬぬぬ。ぐりゅりゅりゅ……。

熱風のなか、耳障りな異音に耐えかね恐々と薄目を開けたグレーテルは、口を変な形にして、

——ぴぎゃ。

→そのとき、グレーテルの唇からもれた音を、無理やり文字で表すとこうなる。

甲冑の巨体の兜から足先まで、等しく赤熱させた魔道甲冑兵の全身から、にょきにょきと鋭い突起——凶悪な角が何本も生え、彼の体を何倍にも見せていた。恐ろしい姿だ。


あなたねーー!!
……デアル

これこそが、魔道甲冑兵《オズボーン》の真の姿、最終形態、名付けるなら〝怒り爆発モード〟とでもいうところだろうか。……いや、名付けてなどいる場合ではない。逃げろ！　逃げろ！　とグレーテルの生存本能が必死に全身に呼びかけるが、まるで両脚がいやいやをしているようにその場から一歩たりとも動けなかった。

『許サン、許サンゾ、小娘ェエエエ!!　ヨクモ、ヨクモ、ワガ命ヨリ大事ナヒゲヲォッ!!』

グレーテルは「あわ、あわ、あわわ」といまにも泡を吹きそうに、そう声をもらすだけだ。それ以外にできることがあるはずもない。あるとすれば、死を覚悟することくらいだろう。

そして怒り狂った《オズボーン》最終形態は、グオという怒号とともに死刑宣告を発した。

『貴様ハ、タダデハ殺サン!!　ズバリ――――〝ヒゲ殺ス〟!!!!』

「いやああああああああああああああああああああああ!?」

ひげ殺す、ってなんだ。

よくわからないが、とにかくグレーテルはすごい殺されかたをしそうだった。あ、自分はここでヒゲ殺されるんだ、とあっさり理解してしまった。フッと口には笑みさえ浮かんだ。こんなことなら赤ずきんに騎士章を返しておけばよかったかもしれない。押しよせる熱波にじりじり肌を炙（あぶ）られながら、最後にもう一度、兄に逢いたかったな、と思う。

《オズボーン》が、自らの体と同じように禍々しく変形した大剣を、傲然（ごうぜん）とふりかざした。

（ああ、お兄さま。あなたを恋うて死んだバカな妹のことを、ときどきは思いだして――）

「伏せてリサちゃん!!」
背後から、鋭い声。赤ずきんの声。
……え？　とグレーテルは耳を疑い、まるでその声に呪いを解く作用でもあったみたいに、背後へふり返った。

そして、その輝きに網膜を射られた。

凄烈な翠色の光。
ややずんぐりした、太めで短い銃身の先で、きらめく精霊力の粒子が渦を巻いていた。
銃型弓スレイプニル――!!
まだ立ちあがれないのか床に座りこんだ姿勢で、体操服の上着の胸に〝四つ葉騎士章〟を飾った赤ずきんが、スレイプニルを両手でかまえて突きだし、引鉄に人差し指をかけてグレーテルの体ごしに《オズボーン》に照準を合わせていた。
なぜ？　と思う間もない。助かりたければいますぐしゃがめ！　というこれまで無視し続けてきた生存本能の呼びかけに今度はしたがった。足払いをかけられたように不格好に尻餅をつく。同時にその頭を掠めるようにして高密度に圧縮された精霊力の弾丸が、赤ずきんの気合いの声とともに撃ちだされ《オズボーン》の赤熱した甲冑の中心に吸いこまれた。

一発。さらに赤ずきんは引鉄をひく。二発め。続けて三発め。
無音のなか、明々とめくるめく浄化の光が爆発して――あとは今朝と同じだった。

7

あぶなかったあ、と呟いて赤ずきんは、ふたたび大の字に床に倒れこんだ。
手のなかの銃型弓スレイプニルが、色彩をなくし氷が溶けるように形を崩し、無色の光の固まりとなって、赤ずきんの胸もとの〝四つ葉騎士章〟に吸いこまれていく。それを床に尻餅をついた姿勢で眺めていたグレーテルは、はっと左手を見やった。
しっかりと、ぐーのままだ。……なぜ？　一体、なにがどうなっている？
力を入れすぎて強(こわ)ばったみたいで、手を開くのに酷く労力がいる。確認したくない、という気持ちもあったのかもしれない。それでも手を開くと、ころんと小さなコンクリートの破片が床に転がり落ちた。《オズボーン》落下のさいに砕け、飛び散った、床下のコンクリートの欠けらだった。あのときだ、とグレーテルは思う。
落下してきた赤ずきんの体当たりを食らい、一瞬意識が飛んだ、あのとき。
手からこぼれた〝四つ葉騎士章〟を求め、近くに転がっていた同じ大きさのものを、無意識に握りこんだのだろう。
こんなもの、毒薬だと思って必死に握っていたなんて、笑ってしまいそうになる。

「……リサちゃんが、拾ってくれてたんだよね。これ」
「え？」
ぽつんと投げられた声。寝転がったままの赤ずきんが胸もとを指差していた。
「な、なによ、わたし、なにも知らないわ」
「だって、穴のとこで落としたはずのものが、すぐそばに転がってたから。そうかなって」
「だ、だ、だから、知らないっていってるでしょう！」
とにかくしらばっくれた。こういうときは、下手に理屈こねるよりそのほうがいい。
はたして赤ずきんは、白雪姫に魔法で操られているはずの自分がなぜ体育館にいるのか、不思議に思っているだろうか。まだ完全に意識がはっきりしているわけではなさそうなので、そこまで気は回っていないかもしれない。……仮に疑われたとしても、そもそも精神操作という複雑な魔法を何十人という対象にかけるほうが無茶なので、いい逃れは簡単だ。
すべてが終わったいまになって、なにをしたのだろう自分は、と思う。
結局、なにもできなかった。いいことも、悪いことも。
（ええ、そう、バカみたいだわ）
ふ、と自嘲めいた笑みが唇のはしに浮かぶ。銃型弓スレイプニルが消えるさまを見ていたグレーテルは、声を交わしながらも視線をそのまま赤ずきんの胸に合わせ続けていた。
静かに、ゆるやかに、体操服に包まれた胸が上下している。

ふと、赤ずきんが片手を持ちあげ、胸もとに乗せた。グレーテルの目から隠すように。

わずかに頭をあげ、グレーテルを見て、

「えっち」

「な、な――――ッッ!?　……えぅ、けほっけほっ」

衝撃のあまり思わず咽せてしまった。なんてことをいうのだ、この小娘は。やっぱり、やっぱりかばったりせずに――いやいや別に赤ずきんをかばったわけではないのだが。そう断じて――、端から見捨ててしまえばよかった。「ふ、ふん」とグレーテルはそっぽを向く。

逸らした視線の先、体育館に二面あるバスケットコートのちょうど間あたり。

魔道甲冑兵《オズボーン》がクローバー型の光の粒子に分解され消滅したあとの床に、ひとりの少女が俯せに横たわっていた。ずいぶんと長い腰まで届きそうな髪が乱れ、床に広がって顔を隠しているせいで、誰かわからなかった。

グレーテルは思いだす。魔道甲冑兵は、製作時に注入された魔力を動力源とする通常の人造兵士ゴーレムと違い、内部に生命体を収め、その生命力を源として活動する、と。

(死んじゃってるのかしら……?)

グレーテルは床から立ちあがった。ランダージョが全部回収したといいながら、拾い忘れたのだろう魔道甲冑兵が、なぜ本来の姿をとり戻せたのか。これで筋がとおった。通りすがりのエルデ人と契約を結んだのだ。その結果あのエルデ人が命をなくしてしまったというなら、そ

れは間接的には、この世界に持ちこんだ自分にも責任があるかもしれない。
そんなふうに神妙に考えながら、グレーテルは倒れている少女に歩みよっていく。まだ、その少女が2-Aの教室で、自分の隣の席に座っていた畑野という女子生徒であることには気づいていない。体育館のあちこちに散らばったバスケットボールが、壁にぶつかり弱々しい音を立てて跳ね返り、さらに転がっている。
少女のかたわらに辿りつき、膝を折りながら、グレーテルはその髪の色に見覚えがあるような気がした。かすかな息づかいが聞こえる。生きているようだ。ほっと安堵して、グレーテルは手をのばし、少女の顔を覆っている髪を指先で払う。
あらわになった見覚えのある顔立ちに、グレーテルは小さく息をのんだ。
「この娘は……」
掠れぎみにもれた声に、少女――畑野ちよという名前まではグレーテルは知らない――は軽く呻き声をもらした。うっすらと目が開いた。少女は力なく投げだされた手で床をわずかになでるようにし、かすかに口を動かす。
「……ここ、体育、館……？　わたし、じゃあ授業に間にあったの、か、な……」
さらに少女は焦点のぼやけた眼差しをさまよわせ、グレーテルの姿を捉えた。
夢見心地のように、ほんのわずか唇がゆるむ。グレーテルが姿を借りている生徒の名を呼ぶ。
「姫、川、さん」

「……？　なぁに？」
「明日。ニンジン――」
「？？？」
グレーテルの頭上にハテナマークが列をなす。四時限めの少女とのやりとり。転がってきたニンジン型の消しゴムを拾ってやり、「かわいい趣味ね」といい添えて手渡してやったことなど、すでに忘却の彼方だ。なにをいわれたのか皆目見当がつかない。〝明日〟、〝ニンジン〟、それはなにかの暗号だろうか？
まったく意味不明ながらも、とにかくいまは相手に合わせたほうがいいと判断して、グレーテルはやや引きつりながら『にっこり』と笑い、彼女にうなずきかける。これで正解なのかどうかは、わからない。しかし、少女はうれしそうにこくんとうなずいた。
入った！　と、グレーテルは思う。賭けには勝てたらしい。
……この対応が、のちにちょっとしたトラブルを生むとは、グレーテルは知るよしもない。
「っ、こほっ、こほっ」
やはり体にダメージがあるのか、咳こみはじめた少女にグレーテルは顔色を変えた。あわてて立ちあがる。しかし、どうすればいい。自分に治療技術はないし、どこか設備のあるところ

に運ぶにしても、それがどこにあるのかわからない。学校に近づくなとランダージョにいったのは自分だし、かといって三銃士に頼むわけにも――。

どうすれば、どうすれば、と混乱したグレーテルは、とにかくひとを呼ぼう、と決めて踵を返した。焦りのあまり足もとがおろそかになっていたのが不運だった。グレーテルがふり返り同時に大きく一歩踏みだした先には、壁から跳ね返ってきたバスケットボールが一個、転がっていた。イタズラの神の采配かと思えるほど絶妙な位置に、それはあった。

思いきり踏みつけ、そして転ける。

「うきゃんっ⁉（後頭部、痛打）きゅううう……」

――。

はげしい戦闘とはなにも関係のない、しかもよりによって戦いが終わった直後に、グレーテルはただのドジで意識をなくした。床に伏せている少女がわずかに目を見開き「……だ、だいじょうぶっ？」といった。逆に気遣われてしまった。

かなりカッコ悪かった。屈辱を感じる間もなく気絶できたのは、せめてもの幸運か。

四幕

1

ひさしぶりに森の夢をみた。――それは、さいごの記憶だ。

うっすらと目を開ける。
グレーテルが布団のなかで目を覚ましたとき、部屋は薄暗かった。嗅ぎなれない匂いを鼻が嗅いだようにも思う。窓にかかったカーテンの隙間から、夕暮れの朱色の日差しが細く入りこんでいて、ここが〝常闇の地〟に建つ魔女の城の自室ではないことを彼女に教えていた。
（んっ……ここは……どこかしら?）
当然の疑問が浮かんだが、長い眠りから目覚めた直後のように意識がぼやけて、そこから先へ思考が広がっていかない。枕に触れている後頭部に鈍い痛みが残っていて、自分はボールを踏みつけ盛大に転んだのだ、と思いだした。あの死すら覚悟させた戦闘のあとに。

なんとも情けない気の失いかた。ずーんとした痛みが引鉄となって急速に意識が覚醒する。
「！」——ここはどこだ⁉
「あ、起き……」
「‼」
「たッ⁉」がちん。
バネ仕掛けのようにグレーテルが身を起こしたところへ、カウンターを狙っていたみたいに誰かの顔が割りこんで額同士が激突した。磁石の同磁極が反発しあうようにグレーテルはふたたび上半身を倒し、鉢合わせになった誰かも身をのけ反らせた。
——お兄さまっ？
瞬間、グレーテルはかすかな残像として網膜に残った顔立ちに、そう思った。
「あいたた……、ご、ごめんね」
あまりに程度の低い勘違いだ。笑えもしない。涙目になって額を押さえているその相手は鈴風草太だった。似ていると思うくらいならまだしも、不意打ちとはいえ兄と間違えるなんて実妹として屈辱である。まだ寝ぼけているのだ。たぶん、そのせいだ。
森の夢をみたせいだ。
短く吐息をつき、グレーテルは横になったまま天井を見上げた。見慣れない木目の天井。頭がくらくらとする。枕にのった頭はほとんど動かさず目だけで室内を観察した。視界の低さで

わかったのだが、どうやら自分は床にしいた布団に寝かされているらしい。布団の端から手をだし床にふれる。固い草で編んだ素朴な敷物のような手触り。
「ここ、僕のうちなんだ。この部屋はお母さんが使ってた和室で……あ、驚かせちゃった？」
聞き逃がせるはずもない草太の言葉にグレーテルは目を丸くした。
紘車中学のどこかの一室に運びこまれたのかと思ったが、そうではなかったのだ。鈴風草太の自宅？　まさか正体がバレて連れこまれたのか？　あわててグレーテルは掛け布団をまくり、左手の甲を眼前にかざした。星形の《トリック・トラップ・シール》はしっかり貼りついたままだ。ならばバレるはずはない。たとえ白雪姫の魔法で調べられたとしても。
「あ、だ、大丈夫だよっ、着替えさせたのはりんごだから」
グレーテルの反応になにを焦ったのか、草太は急いで弁明した。え、と彼の顔を見る。
「だ、だから、その、服。体操服から」
いわれて、ああ、と思う。
グレーテルは、ゆっくりと身を起こし自分の体を見やった。たしかに体操服の上着と紺のブルマから、着替えさせられていた。白地のTシャツとグレーのスウェットパンツ。そんな呼び名までは知らなかったが、これがこの世界における庶民的な軽装であることは理解できた。Tシャツの胸もとのワンポイントの赤リンゴ柄がかわいかった。
「りんごのなんだ、それ」

「へえ……」気のない返事をしたグレーテルは、さておき気になった。正体がバレていないのだとしても、肝心な疑問はまったく解決していない。なぜ姫川リサである自分が鈴風草太の家にいるのか。気安く連れてくるような間柄とは、とても思えないのだが。
「どうして、あなたの家にいるの？」
主語を抜いていったせいか、草太は一度まばたきをした。どう答えたものか考える顔をして、
「その前に聞いてもいいかな」
まじめな顔をして見てきた。グレーテルはなにを聞かれるかと警戒し、身を固くする。
「……姫川さん、六時限めのこと憶えてる？」
グレーテルは、それか、と思う。白雪姫が魔法を使っていた以上、現場に残っていた人物のことが問題にならないわけはなかった。その部分の記憶を消されていないのが不思議なくらいだ。――いや、草太の問いかけは〝ちゃんと忘れているかどうか〟をたしかめているように思える。おそらく白雪姫は、気絶した自分に記憶消去の魔法を使ったのだろう。
しかしグレーテルはすべて憶えている。
意識のない状態で抵抗できたはずはないから、そう考えると魔法に失敗したとしか思えない。二クラス分の人数に一度に魔法を行使したあとだ、可能性は十分ある。
「……いいえ、なにも。なにか怖い夢でもみていた気はするのだけど」
これで納得させられるか、と緊張した。だが草太は見るからにホッと胸をなでおろしている。

そのことにグレーテルも安堵する。草太は説明をはじめようとして、えーとなんだっけな、と呟いている。しっかりしてほしい。騙されないといけない身にもなってくれないと。
「……姫川さんは大縄跳びの途中で赤ずきんとぶつかって気絶したんだ。それで僕らで保健室に運んだんだけど、なかなか目を覚まさなくって。放課後まで様子をみようっていう話になって……でも学校が終わっても起きなくってね。そうしたら、泉先生が『姫川さんのご両親はいま旅行中で家には誰もいないの。困ったわ』って。『いつまでも学校には置いておけないし、そうだ、鈴風くんの家で休ませてあげてちょうだい』っていわれて――」
「はあっっ⁉」思わず、頓狂な声をだしてしまった。なんだ、そのふざけた展開は。
この世界の事情にさほど通じているグレーテルではないが、その提案が無茶苦茶であることくらいはわかる。安物喜劇じゃあるまいし。
しかし、草太はあたふたといいわけする。
「ほ、本当なんだ。これは本当でっ」
……『これ〝は〟』なんていわないでほしい。迂闊にもほどがあるが、逆に泉先生の言葉に関しては草太は嘘をいってないと保証された。グレーテルは2－A担任の掴みどころのない雰囲気を思いだし、たしかにちょっと変わった感じのひとだけれど、と思った。
「……あなた。でもふつう、断るんじゃないかしら、そういうの」
「あ、いや、僕も最初そう思ったたし、りんごも反対したんだけど……。先生に『もう、女の子

ふたりと同居してるんだから、ひとりくらい増えても同じでしょう』っていわれて。まあ、そうかなって……」
脱力する。担任も担任だが、草太も草太だ。納得できないが受けいれるしかなさそうだった。
「はぁぁ、それで、わたしはあなたの家にいるというわけ……」
「う、うん……。でさ、姫川さんのご両親ってどこに行ってるの？　一応、連絡したほうが」
「そんなの知るわけないわ」
旅行中ということすら初耳なのだ。だから反射的に冷たい口調でいってしまった。案のじょう、草太はどういうことだろう？　と表情にだしていた。自分の迂闊さも他人のことはいえない。グレーテルは目まぐるしく思考し、考え、強くいった。
「そ、そんなものよ！　ええ、ふつうはそんなものなの！」
そして、これ以上口を開いても余計なことをいいそう、と口を閉ざした。草太も「そ、そうなんだ」といったきり黙っている。ふたりの間に奇妙に張りつめた沈黙が満ちる。部屋の薄暗さが、いまさら意識された。
「ご、ごめん、気が利かなくて。起きたならカーテンあけようか。暗いよね」
グレーテルの返事を待たずに草太は立ちあがり、和室の中央にしかれていた布団のそばから離れ、西向きにある窓辺に歩みよった。ベージュのカーテンを開ける。汚れのない窓ガラスからの柔らかな夕陽が室内を染めあげた。目に染みて、グレーテルは目を細める。窓から見える

景色からすると、ここは二階にある一室らしい。

グレーテルは日差しから逃げるように顔を逸らし、室内を眺めた。〝ワシツ〟というものを見るのは、もちろんはじめてだ。それでも家具や調度品がほとんどなく、生活感がないことはわかった。長年使われていなかったのかもしれない。さらに視線をめぐらせ、草太が座っていた布団のかたわらへ向けた。

ふたつの荷物がそろえて置いてあった。ぺたんこな学生鞄とぱんぱんに膨らんだ紙袋。

学生鞄には見覚えがある。姫川リサの持ちものだ。隣の茶色地の紙袋は知らない。着替えさせられた体操服や、学校の制服でも入っているのだろうか。別に、どれもグレーテルのものではないので、どうなろうがかまわなかったのだが――、

（ポシェット！　《ビッグイーター》は⁉）

一瞬、窓辺の草太のほうを見、こちらに背中を向けて窓外を眺めているのを確認してから、急いで荷物に手をのばした。紙袋へ。乱雑に袋を開いてなかを確認する。きちんと折り畳まれた制服と体操服が入っていた。その隙間に手を突っこむ。袋の奥。固い革製品の感触と巻き付いている細いベルトが指先にふれた。引っぱりだす。

長々と息を吐いた。無事だった。

魔法道具《ビッグイーター》を胸にギュウッと押しあてた。

万一、なかを確認されていたら間違いなく終わりだった。いまごろ虜囚（りょしゅう）の身だ。

「それ、大事なものなの？」
ふり向いた草太が、そう問いかけてきた。とり乱しすぎたか、と思うが、草太の声色はグレーテルを怪しんでのものではない。純粋なる好奇心からの質問らしい。グレーテルは平静をよそおって草太へと顔を向け「ええ」と答える。
（あっ、ふたりきり――）
いきなり、いまここには草太と自分ふたりしかいないことが、強烈に意識された。
（いまなら、誰の目もない。邪魔は入らない）
この部屋の外で赤ずきんたちが身をひそめてでもいないかぎり、呪いの短刀《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》をとりだし、草太に突きたてるのは、戯れのようにたやすいと思われた。
じっと草太の目を見つめてしまう。（いまなら）
あう、と呻いて、草太は頬を赤くし、俯いてしまった。――隙だらけだ。
ぐ、とグレーテルはポシェットを抱いた腕に力をこめた。そっと右手の指をフタにかける。
――隙だらけよ、お兄さまっ☆
幼い、まだ貧しい村で家族四人で暮らしていたころ、兄とふたりで出かけたピクニック。どこまでも抜けていくような青空。どこまでも続いて行くような草原と小道。サンドイッチの詰まった籐編みのバスケット。道ばたになっていた野苺をふたりして摘んだ。はいあーんしてお兄さま食べさせてあげる！　い、いいよ、自分で食べるから！　頬を赤くして俯いてしまった

兄。隙だらけよ、お兄さまっ。え、と開いた口に野苺を放りこむと、兄は目を白黒させた。楽しかった。幸せだった。

ポシェットのフタにかけた右手の指は、凍りついたように動かない。

「……姫川さん？」草太が怪訝そうに呼びかけてくる。グレーテルは反応できない。

草太は、グレーテルが具合を悪くしたとでも思ったか、心配そうな声でくり返した。

「姫川さん」

そのとき、グレーテルの中にどのような葛藤があったのだろう。やがて、ゆるく頭をふって、

「ダメね……、やっぱり無理だわ。自分でもバカだって思うけど、わたしには無理みたい」

ランダージョは正しかった。いや、これは同情ではないから半分だけ、正しかった。

よりによって〝いまの〟ではなく〝あのころの〟だなんて——。卑怯だ、とすら思う。

なのに、グレーテルはいっそすっきりした表情をしていた。ポシェットのフタにかけていた指を外す。当然、なにをいっているのかわからない草太は、首をかしげるばかりだ。と、階下から声が聞こえてきた。木ノ下りんごの声だ「草太、夕ごはんできたよ」。

その声に肩をゆらして草太は廊下に通じる和室の扉を見、改めてグレーテルを見た。

「えっと——、よかったら一緒にどうかな？　りんごのごはん、美味しいよ」

「けっこうよ。遠慮しておくわ」

「……うん、そっか。じゃあ、あとで持ってくるよ」

どうやら無理に誘う気はないらしく、草太はうなずいてみせる。グレーテルは冷たくいった。
「いいえ、いらないわ。別に食欲もないし」
その言葉に嘘はなかったのだが、恥知らずな胃袋はその言葉に抗議するように、きゅるるる、と鳴いてみせた。グレーテルは耳までまっ赤になる。昼に食べた菓子パンだけでは、足りなかったらしい。ランダージョのバカ！　とむらむら怒りが湧いた。そんなグレーテルに草太は『にこ』と笑って——その笑顔も悔しいくらい昔の兄に似ていた——。
「いつでもおりてきてよ。僕は先に行ってるから」
といって部屋から出ていく。グレーテルは、今度は彼女が先ほどの草太と同じように俯いてしまって、顔をあげることができない。ト、ト、ト、と草太が布団を回りこむように和室を横切っていく足音がして、きぃ、と蝶番(ちょうつがい)のきしむ音がした。
「それじゃ、待ってるから」ぱたん。
グレーテルは和室にひとり残された。夕陽の朱色に染まっている自分の腕をじっと見ている。やがて、ふと、……くん、と鼻を鳴らす。嗅ぎなれない匂い。なのに記憶の深いところに届いてくるような、和室にごく薄くただよっている畳の藺草(いぐさ)の匂い。
「……なんでかしら。この匂い、はじめて嗅ぐ匂いなのに、少し懐かしい」

2

当然というか、結局というか、りんごには全部バレた。
りんごを足止めする大役をおおせつかった草太だが、しょせん、これまでの人生での数少ない彼女とのケンカにおいて全敗を喫している草太だ。長くは保たなかった。ふりきられ、教室を飛びだし廊下を駆けていく彼女のあとについて体育館まで戻った。
りんごも草太も声をなくした。いっそ、あっぱれなほどの惨状がそこにはあった。
さすがに怒っている場合ではない、とりんごも判断したのだろう。
——あとできっちり説明してもらうからね。
そういって隠蔽工作に手を貸した。授業終了のチャイムが鳴った。
急がなければならなかった。およそ破壊されつくした体育館の北側半分を元通りにするのは、白雪姫にしかできないことだ。草太は畑野を背負い、りんごと赤ずきんで姫川を保健室まで運んだ。そして、いくつかの小さな揉めごとのすえ、いまに至る。
鈴風家の居間の角に据えられているテレビでは、夕方六時のニュース番組が流れている。
「……まあ、問答無用でおかしなやつが襲ってきたんなら、しょうがないけど……」
食卓の端のステンレス鍋から湯気をたてているみそ汁をおたまで掬い、りんごがいう。渋々といった心境がにじんだ口調だ。卓上に並んだ朱塗りの椀にそそいで、りんごは膝上にヴァル

のヌイグルミを置いている草太を見とがめた。
「こら、草太。食事のときは横におろしときなさい」
「あ、うん……」いわれるがまま草太は脇に置いた。りんごからみそ汁の椀を受けとる。姫川を自宅に連れていくことになったときは、抗議するように猛然と手足を動かしていたヌイグルミだが、りんごに「よろこんでるみたいね、これ」といわれてから、もう知ったことかといわんばかりに動きを止めている。変化のない顔も、ふくれっ面のように見える。
「はい、ほら、赤ずきんも」
「わーい、ありがとう」
赤ずきんはたっぷり具入りのみそ汁を受けとる。左まぶたにガーゼが貼られている。処置したのは、りんごだ。ただしガーゼの下、傷口に塗られているのは救急箱にあった薬品ではなく、赤ずきんがファンダヴェーレから持ってきた〝お婆さんの軟膏〟という塗り薬だった。小さな怪我ならあっという間に治る、というふれこみだ。
みそ汁が入った椀を手にした赤ずきんは、ごくごく真剣な顔でヌイグルミを見た。
「安心してよ、ヴァル。ヴァルの分まで、わたしがしっかり食べるからね！」
これで食卓を囲んでいるのは全員だ。庭に面するガラス戸を背にした赤ずきんと、食卓を挟んでその向かいに並んで座っている草太とりんご。白雪姫は紘車中学からタクシーで下校するさい――タクシー代は泉先生が払ってくれた――、学校前のコンビニで山のように栄養ドリン

クを買いこみ、家に着くなり片っ端から一気飲みして「食事は目が覚めてからいただきますわ。まずは心身を回復させないと」と二階の寝室にあがっていった。

魔法使いがコンビニの栄養ドリンクで疲労回復、というのが草太にはなんだか不思議だった。

「それじゃ、いっただっきまーす☆」

元気よくいって、赤ずきんは食卓にならんだ大盛りの白飯、ブタバラ肉の生姜焼き、肉じゃが、ひじきの煮物、手作りノンオイルドレッシングのかかった海草サラダ、などなどをまたたく間に胃袋に収めていく。赤ずきんの回復方法はシンプルに〝食べる〟らしい。

「りんごちゃん、おかわり！」手品のように白飯の消失した茶碗を、満面の笑みでりんごに突きだす。

「はいはい、あとでお腹痛くなってもしらないゾ」

感嘆と呆れを吐息に混ぜて、りんごは食卓の横に置いた炊飯ジャーから、また大盛りによそってやる。

「それで、草太。変な騒動、もうぜんぶ終わったの？」

赤ずきんに聞いても無駄だと思ったか、りんごは草太に問うてきた。そうはいっても、草太にも答えようはない。草太だって、りんごと一緒に赤ずきんから説明されるまで、ほとんどなにも知らなかったのだ。赤ずきんの話は簡潔だった。

サンドリヨン側からの襲撃。たぶん狙いは草太じゃなくて自分たち三銃士。なぜかは不明。


むぐむぐ♡
おかわり!
♪
はいはい

「どうかな、そうだといいって思うけど」
「姫川さんまで巻きこんじゃって。よくないゾ、こういうの」
「うん、そうだよね……」
幸い、畑野は保健室ですぐに目を覚ました。体力を消耗していたが、それ以外に異常はないようだった。わざわざ白雪姫が魔法を使うまでもなく、彼女はあの大きな甲冑のことを夢か幻だと思いこんでいた。それがふつうの反応だろうと草太も思う。
「姫川さん、起きたんでしょ？　ごはん、いらないのかな」
「うーん、お腹は空いてるみたいだったけど」
りんごと並んで座っている草太は、ひじきの煮物を口に運びながら、そう答えた。もぐもぐ咀嚼し、飲みこんでから、上半身をひねって背後にふり返る。居間と廊下を繋いでいる引き戸へ目を向けるが、開く気配はない。
吐息をついて草太は姿勢を戻し、ガラス戸の向こうの庭先へと目を向けた。
六時を回り、景色は夕の朱色から宵の色に染まりつつある。
（………あ、あれ？）
ふと草太は、ぱちくりまばたきをした。日常の非平凡化について思いをめぐらせたから、というわけでもないだろうが、毎日見慣れているはずの庭の景色が、いつもと違う気がしたのだ。ぱちぱちとまばたきをくり返す。予告もなく〝間違い探しゲーム〟を突きつけられたみたいだ

った。しかし答えは簡単だった。すぐに見つけた。
「木が、一本多い……」
え、と草太の呟きにりんごが合わせた。正面の赤ずきんは飯粒まみれの顔で、一度きょとんとしてから、ぱあっと表情を明るくさせ「あ、気がついたんだぁ！」といった。座布団と一緒にぐりんと体を回転させて、草太と同じように庭を見やる。
「あそこの木ね、今朝、種を植えさせてもらったの。〝ポランポランの木〟っていうんだけど、すっごく美味しい実がなって……、あっ、一応、ほかの邪魔にならないところに植えたんだけど、よくなかったかなぁ？」
「や、ううん、いいよ、いいよ。ちょっと驚いただけで。父さんも怒らないと思うし」
宵の薄闇に浮かぶ木のシルエットは、クリスマスツリーに使われる樅(もみ)の木に似ていた。
「今夜中に、実がとれるかもしれないんだ。明日、ごちそうするね」
「うん、楽しみにしてるよ」
あどけない微笑みでうなずいた草太に、隣のりんごは複雑そうな顔をしている。
ときおり、ちらちらと草太の顔をうかがうような目つき。魔道甲冑兵・襲来！　の騒ぎでうやむやになったが、りんごがふたりきりの教室での恥ずかしい言動をまだ気にしているのは明らかだった。だが、草太にすれば〝一番大事にしなければいけないのはりんご〟というのは当然なので、なにか特別な言葉を聞いたとは思っていなかった。

「えっとね、〝ポランポランの木〟の実は、食べかたにコツがあって――」
から……っ。
赤ずきんが草太に向き直って説明をはじめたとき、静かに、こちらを警戒するようにゆっくりと、居間の引き戸が横にすべった。ほんの三センチほど。草太の体の脇でヴァルのヌイグルミがバタバタ手足をゆらした。だが、誰にも注目してもらえない。
引き戸のほうに体を向けていた赤ずきんがまっ先に気づいた。やっほー、と片手をあげる。
「リサちゃん！」
がたん、と引き戸が勢いよく閉まった。赤ずきん、草太、りんごは顔を見合わせる。三対の視線が、引き戸を注視する。すると、ややあってまたゆっくりゆっくり開きだした。今度は四センチほど。隙間から覗いた姫川の顔が、居間のなかを探るようにして草太の姿を捉え、じっとにらみつけてくる。なにかいいたそうだが、なにをいいたいのかわからない。
――と、まるで疾風だった。一挙動で立ちあがり食卓を回りこんで引き戸の前についた赤ずきんは、姫川が閉める間も与えず、ぱーんっと開け放つ。驚きのあまり姫川――グレーテルは家宅侵入をもくろむ空き巣みたいな前のめりの姿勢で、硬直していた。
そんなことにもかまわず赤ずきんは、にこにことほころんだ表情でひと息にいい放つ。
「リサちゃんリサちゃん、あのねあのね――……!!」

3

かっぽーん。

湯船から立ちのぼる白い湯気が、浴室の天井に届いて無数の水滴となっている。ふいにその一粒が落ちてきて、湯船のなかのグレーテルの肩に当たって、弾けた。思いがけない冷たさに、ひゃっ、と小さく声がもれる。

つるつるしたクリーム色の浴槽のなか、グレーテルは小窓のあるタイル壁に背を向け、洗い場のほうを向いて胸もとまで湯に浸かっていた。洗い場では赤ずきんが、わしゃわしゃと全身に泡をまとって目の粗いタオルで体を洗っている。グレーテルから左手の壁、シャワーと曇り防止加工の施された鏡の前で、小さな腰かけに座り、ごきげんな横顔を見せている。

まぶたの傷は早くもうっすらとした赤い筋だけになっていた。さすがは〝お婆さんの軟膏〟。

窓の外は、もう夜の暗がりに支配されている。浴室はさほど広くない。

午後八時。グレーテルが『打倒・赤ずきん！』のスローガンをかかげ、この世界エルデにやってきたのがおよそ朝の八時だったから、ちょうど半日が経っている。十二時間。十二時間。なにがなんでも赤ずきんを倒すのだ、と意気込んで現地に乗りこんでから、十二時間。

「からだっの隅々っまで、ぴっかぴか～♪　ぴっかぴか～のぴか～ってね♪」

アホっぽい即興歌だ。

赤ずきんのアホっぽい歌を耳にしながら、グレーテルは鼻下まで湯のなかに沈ませ、ぶくぶくと鼻息を吐いた。

（…………わたし、なんで赤ずきんといっしょにお風呂なんか入っているのかしら？）

わからない。いくら考えても、わからなかった。

——あのねあのね。

赤ずきんの、ひとを舐めてるのかというほど脳天気な声が脳裏によみがえる。

——さ、入って入って！　りんごちゃんごはん、今日もすっごーく美味しいよ！　それからね、食べ終わったらいっしょにお風呂入ろ！　草太くんちのお風呂、きれいですっごーく気持ちいいよ。ねっ、ねねっ？

なにをいいだすのかしらこの小娘は、とグレーテルは思った。細部は異なれど草太やりんごも同様の感想を抱いただろう。まだしも『おまえの正体はバレている、逃げ場はないぞ、覚悟しろ』とでもいわれたほうが理解はできた。断るつもりだった。当たりまえだ。

というか、草太たちの様子をちらっとだけ確認して、この家から出ていくつもりだった。ランダージョと合流し、混迷を極めるこの事態をどう修正するか、相談せねばなるまいと思っていたのだ。なのに、なにがどうなったのかまんまとりんごの手料理をごちそうになってしまい、なにがどうなったのかまんまと赤ずきんと風呂場で裸のつきあいをしている。

（たしかに美味しかったけれど、とくに……なんといったかしら、あれ。肉、じゃが……？）

自分はわりと流されやすい、という事実がグレーテルはショックだった。
「ぶくぶくぶく、ぶくく」
口を開いたが声にならず、グレーテルは、クリーム色の浴槽の縁にあごをのせた。じとっとした目で赤ずきんを見やった。
「……なに考えてるの、あなた」
「え？」
「いきなり、いっしょにお風呂に入ろうだなんて、頭おかしいんじゃないかしら」
タオルを動かしていた手を止め、赤ずきんがこちらを見た。その顔は、なぜそんなことを聞かれるのかわからない、という表情をしていた。なんでそんな顔をするのか、のほうがわからない、とグレーテルは思う。
うーんと、と赤ずきんは簡単すぎて説明が難しい、というふうに首をかしげて、
「えっと、だって今夜一晩だけっていっても、ひとつ屋根の下で過ごすわけだし、だから仲良くなりたいって思ったし、こないだりんごちゃんとも入ったし、……あ、草太くんには断られちゃったけど――」
「わかってるの？　わたしたちは敵同士なのよ」
いってから、バカ！　と自分を罵る。あまりに呑気でのどかでボケボケしたことをいわれたので、つい本音が出てしまった。だが赤ずきんは、ふに、と相好を崩して、

「わかってるよ、だからまた大縄跳びで勝負しようね」
まっすぐな目でいった。予想外すぎる返事にグレーテルは「あ、え……？」と思考を乱され、まともな反応ができない。そんなグレーテルの態度をどう受けとったのか、赤ずきんはもう一度柔らかに笑って、シャワーの蛇口をひねり体の泡を流す。浴槽の縁にあごをのせた格好で金縛り中のグレーテルをそのままに、シャンプーを手にだして頭を洗いはじめた。
わしゃわしゃと赤ずきんの栗色の髪が泡に包まれていく。んぎゅっと目をつむっている。大縄跳びで対決？　だから敵同士？　赤ずきんは、本当に本当にバカなのかもしれない。
(ああもう、すこしは疑いなさいな！　このわたしを！)
理不尽な怒りがグレーテルの胸に湧きあがってきた。いや、バカなのは、こんな相手を倒すことに必死になって、モンスタークッキーやいくつもの魔法道具をこの世界に持ちこんで、正体をバレないようにして、どんな卑怯な手でも使ってやると考えて、なのに失敗して、こんなところで一緒に風呂に入っている自分自身だと思った。
す、とグレーテルの視線が浴室の床に落ちる。浴槽の手前に転がっていた把手(とって)付きのプラスチックのピンクの湯桶が目に入った。静かに湯船から身をのりだし、把手を掴んだ。カタッと音をたてて持ちあげる。赤ずきんを見る。
もう我慢できない。はっきりさせてやる。いま、ここで！
この手に持っているのは鋼鉄のハンマーだ、と自分に信じこませる。あるいは邪神の呪いが

かかった魔のハンマーだ。どんな相手でも一発で即死だ。あの世行きだ。いや無限地獄で苦しみ続けるのだ。そう念じることで敵意を、攻撃する意志を実戦同様のレベルにまで持っていく。そうでなくてはダメなのだ。これから自分は本気で本気の一撃を赤ずきんに放つ。

（わたしはあなたの敵なのよ！　本当の意味で！　それを忘れないで！）

その言葉が、ほとんど自分へ向けてのものであることにグレーテルは気づいていない。

いま、行き場をなくしかけている敵意が胸のうちで渦巻いていた。

ならばいっそ敵としていられる間に、正面から返り討ちにあい徹底的に叩きのめされればいいと、そのほうがマシだと本気で思う。全力でふりおろした一撃をかわされ、どこからともなくとりだしたグリムテイラーの刃を首に押し当てられ『やっと尻尾をだしたな、逃げ場はないぞ、覚悟しろ』とでもいわれれば。……そうすれば。

いさぎよく敗北を認められる。敗れたりとはいえ、これまでどおりの自分でいられる。

もし許されるなら、すごすごと〝滅びの魔女の城〟に逃げ帰ってやろう。

なにが敵でなにが味方で、誰が好きで誰が嫌いなのか。自分が、自分の知っている自分でなくなっていくのは、怖かった。

でも。もしも。もしも仮に、万一、攻撃が命中してしまったら？

（……まあ、そのときは、そのままタコ殴りにして勝ってしまえばいいのよね、別に……）

敗北の覚悟とは逆に、他人ごとのように投げやりに思う。

「あっわ、あっわ～♪　かっみのっけ、つるんつるん～♪」
アホっぽい即興歌だ。
赤ずきんのアホっぽい歌を聞きながら、グレーテルは湯桶の把手を掴んでいる手に力をこめる。頭からこぼれ落ちてくる泡のせいで目を開けていられない赤ずきんは、ふらふらと泡だらけの両手を突きだし、手探りでシャワーの蛇口を探している。絶好すぎるほど絶好のチャンス。
グレーテルは胸のうちで、これで最後とどびっきりの攻撃呪文を唱える。
兄の気持ちを奪った憎い憎い憎い敵が、目の前でがら空きの頭をさらけだしている！
「はぅ～、蛇口蛇口、どこ――」
脳天かち割ってやれ、自分！
(でりゃあああああああああああああああああああああああ‼)
あまり品のない気合いの声を心のなかで吐いて、グレーテルはざばっと湯船から身をのりだし、大きく湯桶をふりかぶり、これまでの人生最強最大と思える勢いで、それはもう渾身の力で、全体重をのせて、誰もがほれぼれするようなスイングで、浴室に満ちる湯気を切り裂いて、赤ずきんの頭めがけてふりおろした。
「ふみゃっ⁉」
ぱっかーんっっ、といい音がした。
そもそもが捨て身の一撃だったグレーテルは当然、湯を後ろ足でけりあげながら前のめりに

すっ転び、これっぽっちも回避できなかった赤ずきんもまた、叩かれた衝撃で腰掛けから尻をすべらせタイル床にひっくり返った。そのとき手がシャワーの蛇口に当たって回転させ、弱々しい水流がタイルの上でもつれあうふたりにふりそそいでくる。

「な、な、なにするのリサちゃんっ？　うう、痛いよ〜〜……」

シャワーに泡を流され、目をしぱしぱさせながら赤ずきんがグレーテルを非難した。涙目だ。グレーテルは打ちつけた肩にじんじんと痛みを感じながら、手から湯桶をとり落とす。からん、と転がる。唇からもれる吐息。微妙な勢いの水流に肌を打たれている。くすぐられているみたいに、どうしようもなく笑いがこみあげてきた。——だから、笑った。

赤ずきんが不思議そうにこちらを見ていた。

痛みとくすぐったさの混ざった感覚にグレーテルは笑いが止まらない。「ふみゃ」だって！　バカみたい。バカみたいで笑える。赤ずきんも、自分も。

（——ああ、帰ろう。魔女の城へ）

笑いのなか、予定していたのとは真逆の答えが、どこからか、すとん、と落ちてきた。

4

からり、と二階の和室の窓を開ける。

夜気をはらんだ涼しげな風が吹きこんでくる。グレーテルの目に映るのは、住宅街の同じよ

うな家屋ばかりだ。食事のあと、自分も残りたそうな雰囲気を漂わせながら近所の自宅に戻っていったりんごは、寝巻きも用意するといってくれたのだがグレーテルは断った。どうせ夜の間に、去るつもりである。

夜風が湯にほてった肌に心地よい。まだ肩にはじんとした痛みが残っている。

（ランダージョ、近くにはいないみたいね。……けど、声にだして呼ぶわけにもいかないし）

出ていくのは、みなが寝静まったあとと決めていた。名残おしいわけじゃ、ない。

できれば、いま着ているTシャツとスウェットパンツは洗ってから返したかったが、そうもいっていられないだろう。とにかく夜中にここを出て、ランダージョとともに本物の姫川リサのもとへ向かって、衣服を交換して。それから。

………にー。

ふと風のなかに猫の鳴き声を聞いたような気がした。わずかに眉をよせて、グレーテルは耳を澄ます。いまのはランダージョの声だっただろうか？　もう声は聞こえなかった。けれどランダージョだとしても、そう何度もグレーテルを呼べはしないはずだ。

（家の近くまで、来ているのかも——）グレーテルは、和室から出ていった。

5

樅の木に似ていたが、それはおよそ樅の木であるはずがなかった。

たった半日で成木にまで育った〝ポランポランの木〟は、夜空からふる月明かりを受けると、それまで緑一色だった葉たちを淡い七色に光らせはじめた。さらに一枚一枚の葉は刻々と色合いを変え、それらが夜風にゆれるさまは草太の心を奪わずにいられない光景だった。

(きれいだな、まるで色とりどりの星の海が波打ってるみたいだ……)

草太は庭に面したガラス戸を開け放ち、縁側に座ってぶらぶらと素足をゆらしていた。

やはり開けたままの居間の引き戸から、廊下を歩く誰かの足音がした。ふり向くと、それは姫川リサだった。ばったり視線が合うと彼女は『まずいところを見られた』という顔をした。

草太は首をかしげる。

「――どうしたの、姫川さん」

「え、いいえ、なんでも……」

ごまかすようにいった。〝ポランポランの木〟の鑑賞に誘ってみようか、と草太が考えたとき、庭の片隅でかさりと草がゆれた。横目を向けると一匹の猫が庭に入ってくるところだった。〝ポランポランの木〟のそばまで歩みよって、物珍しそうに見上げている。「あ、猫」という草太の呟きに、姫川はぴくりと反応して足早に居間を横切り、縁側までやってきた。

草太の横に立つ。庭に入ってきた猫は、この辺りでたまに見かける三毛のノラ猫だった。名前はない。にー、と短く鳴いた。

「なんだ……」

姫川は落胆したようにいって、ふっ、と吐息をついた。しん、と夜の静寂がおりてくる。
ふたりの間の空気を持てあまし、草太は「えっと……」と口ごもってから、〝ポランポランの木〟を指差した。どうせ気づかれるだろうし、なにかいわれたら外国産の珍しい木だといい張ればいいかと思って、
「すごいよね、あの木。〝ポランポランの木〟っていうらしいんだけど……」
草太の言葉に、姫川は庭の七色の輝きを宿した木を見やって「ああ」とだけいった。
たいして驚いているようには見えない。どういうことだろう、と草太は思う。まさか自分が知らないだけで、この世界にも同じ木があって、姫川はそれを知っているのだろうか。名前に草の字が入っているせいか、植物に興味があってそれなりに詳しい草太もまるで知らなかった、この木のことを。だとすれば、かなりの博識である。
尊敬するような眼差しで、草太は座った姿勢のまま、斜め下から姫川の顔を見上げた。
夜空に浮かんだ満月の明かりを受ける、彼女の大人びた顔立ち。
——あれ、と草太は思う。一瞬、ほんの一瞬、姫川の顔に重なって、誰か別の顔が見えたような気がしたのだ。ふたつ括りにした長い金髪の、幼くもととのった顔立ちをした、どこか寂しげな影を宿した少女の顔。
同時に、ぽうっ、と胸のなかに不思議な感覚が湧きあがっていた。……それは以前、白雪姫に『〝封印の鍵〟の力の一端が目覚めかけたのですわ』と説明された感覚と似ていた。一週間

前のあのときは、たしかヘンゼルという魔法使いに捕まったりんごの姿を見て、ただ必死になんとかしなければと思って、そうして得体の知れない感覚が体内で爆発したのだ。
あのときに比べれば、もっとずっとかすかだけれど、いま感じているのは、あれと同じだ。
そんなふうに思った草太だが、その感覚は一瞬で消えうせ、姫川の顔に重なって見えた誰かの幼げな顔も、まばたきひとつの間に消えた。……どうかした？　と姫川が視線を落としてくる。草太はあわててぶんぶんと首をふる。
(なんだったんだろう、いまの……)
わずかに首をかしげ、姫川は草太と並ぶようにして縁側に腰をおろした。
「……赤ずきんは?」
探るように問うてくる彼女に、草太は再度〝ポランポランの木〟を指差して、いった。
「えと、さっきあの木から実を摘んで二階にあがっていったよ。部屋じゃないかな」
「ふぅん。あなたは、ここであの木を?」
「うん、きれいだなって」
「そう、――そうね」
会話はそこでとぎれた。にーにーと鳴いていた三毛猫は、やがて飽きたように身をひるがえして庭から出ていった。もとより草太は2－Aのクラスでも姫川とたいした仲ではない。というか、こんな機会でもなければ、まともに話をすることもなかっただろう。

なにを話せばいいのかな、と思う。
「あの、姫川さんてさ……、花とか、草とか、木とか、好き……なのかな」
植物に詳しいのかもしれない、という曖昧な推測から、一か八かで話題を切りだしてみた。
姫川は、ふっと物思いにふけって、応える。
「ええ、好きよ。上品な甘さのクッキーと同じくらいにね」
「そうなんだ、実は僕も――」
「でも森は嫌い」
「え?」
「……とくに、夜の森は」
吐きだされる姫川の声に冷たく固いものを感じて、草太は(迷子になった思い出でもあるのかな)と思った。ふたたび会話がとぎれ、しかし草太は今度はなにをいえばいいのかわからない。姫川は、様々な感情が混ざった瞳で草太を見つめてきた。考えは読めない。けれど草太は、彼女が自分を見透かして別の誰かを見ていることだけは、わかった。
「ね、手をつないでもいい?」
と唐突に聞かれた。え、それって……と戸惑う草太に、姫川はからかうような顔をした。
「深い意味はないわ、手をつなぐことがそんなに変かしら」
「あ、ううん、……そうじゃない、けど」

じゃあ、と隣から伸びてきた手に、草太は手を重ねる。きゅっ、と指に力がこめられる。その、すがるような意外な強さに、草太はドギマギとするより、ただ困惑した。
「……ね、こんな話はどうかしら。つまらない恋のお話」
いきなり話題が飛んだので「？」と草太はきょとんとする。おかまいなしに彼女は続けた。
庭先へと顔を向け、静かに、ひりひりとした空気をまとって述懐する。
「あるところに女の子がいて、その子にはとっても大好きなひとがいて、そのひともとってもその子のことを好きでいてくれたの。けれど、あるときを境に女の子が大好きだったそのひとは、まるで別人みたいに変わってしまって、それまで大好きだった女の子じゃない別の誰かのことばかり考えるようになってしまったわ。女の子は我慢できなくて、その別の誰かを、亡きものしようとまで考えたそうよ。ひどい話。でもね、無理だった」
「……どうして？」
「その別の誰かは、どうしたって女の子が敵わないくらい強くて……、ええっと、そうね、そのうえ面白いやつだったの。最初は憎くて憎くて憎くてしかたなかったのに、いつの間にかその女の子も、ちょっとは友達になってもいいかな、って思ってしまうほどに。でも、その女の子が大好きなひとを大好きだって思う気持ちも本物で、だから、その女の子は――」
と、そこまでいって姫川は急に押し黙った。唐突で、強引な中断。いま即興で話を考えていてその先が思いつかないのか、先はあっても口にできないだけなのか草太にはわからなかった。

これでは、なんのためにはじめた話なのかも不明だ。草太の喉が詰まる。聞いていいのか。彼女は聞かれるのを待っているのか、その反対なのか。迷いながらおずおずと口を開いた。
「それで、その女の子は、それからどうしたのかな……？」
姫川は〝ポランポランの木〟を数秒見つめ、いった。
「――あなたは、どうしたと思う？」
「えっ？　……ん～邪魔なひとを消すんじゃなくて……自分の魅力を磨くことにした、とか」
問い返されると想定してなかった草太は、実はそれほど深く考えて答えたわけではなかった。けれど、姫川は驚いたようにぱちりと大きくまばたきして草太を見た。ありふれたことをいうなと叱られるかと思ったが、彼女は、ふいに悪戯っぽい表情を作って、
「うん、そうよね。正解。――ただ困ったことに、その女の子はもう十分魅力的なのだけど」
そういって、無垢な花が咲いたような朗らかな笑みを浮かべた。

6

ずきん、と胸が痛んだ。
ていねいに畳んだかわいい桜の花柄の寝巻きを、ぎゅうっと胸に押しあてりんごはその場に立ちつくした。草太の家から木ノ下家は直線距離にして百メートルも離れていない。家を出て、アスファルトの路地に等間隔に並んだ街灯を三つ数え、そこにある角を曲がれば、もう鈴風家

の庭が見える。
——縁側で、草太と姫川が手をつないで座っていた。なんだか、いい雰囲気だった。なぜだか、見てはいけないものを見たような気がした。
一度は断られたものの、やはりあのTシャツとスウェットパンツで寝させるのも悪いと、寝巻きを持っていくことにしたのだった。草太と姫川の間を怪しんでいたわけじゃない。ひとつ屋根の下だからといって、なにかできるような草太ではないことは、りんごが一番よく知っていた。……だから、これはあくまで善意で。
「っっ！」
夜の闇を切るように髪をひるがえらせ、街灯の下、りんごは踵を返した。胸に抱いている寝巻きの存在が煩わしく、この場に投げ捨てていきたいと思う。けれど、ぎりぎりのところでそんなみっともない真似をせずに、堪え、りんごは顔を俯けて駆けだした。自宅へと。
たいしたことじゃない。草太が誰かと手を繋ぐくらい。ダメという決まりなんてないのだし。でも、だったらどうして自分は逃げているんだろう。
(違う、違うんだゾ、これは逃げてるんじゃなくって、そんなんじゃなくって……っ)
にー。
駆けている路地の、少し前のほうで猫の鳴き声がした。たまにこの辺りで見かけるあのノラ猫だろうか、と思い、一瞬とはいえ思考が脇に逸れてくれたおかげで、りんごはわずかだが落

ちつきをとり戻せた。歩調をゆるめる。
街灯が作る明かりの外、路地の脇のブロック塀の上に一対の瞳が光っていた。猫の目だ。風のように暗がりのなかから飛びおりて、りんごの視野に入ってきた。その姿を見たりんごは驚きに目を見開いた。あの三毛猫ではない。
いや、それは純粋な猫ですらなかった。二本足で立った、子供の背丈くらいの半人半猫(はんじんはんびょう)。
魔物、という単語が頭のなかに浮かぶ。黄みがかった茶色の毛並みをして、探検家が所持するようなふくらんだ荷袋を背負っている。どこかで見たことがあるとりんごは思う。どこかで。
それはすぐに悪夢にも似た記憶と結びついた。一週間前、ヘンゼルと名乗る魔法使いの少年と、その配下である魔物に襲われたとき。
あのとき少年のかたわらにいた猫人だ。恐怖がよみがえり悲鳴をあげかけた喉が、凍りつく。
「――――ッッ」
『あのー、悪く思わないでほしいにゃあ』
いきなり猫人が口を開いた。どこかすまなそうに人間の言葉をしゃべった。
『これも、…………の命令なのにゃ』
聞き取りにくいその言葉を耳にした瞬間、りんごの全身に悪寒めいたものが走った。
その頭上で、街灯の光に誘われパタパタと一匹の蛾が舞っていた。

7

「うーん、まだちょっと早かったかなあ」

ベッドの上に摘んできたばかりの〝ポランポランの木〟の実を広げて、赤ずきんは腕を組んで唸った。サクランボのように細長い蔕（へた）の先に小さな実がついている。けれど、その実は球形ではなくコンペイトウのような形をして質感はグミかゼリーのようだった。

シーツの上に転がる十数個の実に顔を近づけ、くんくんと鼻を鳴らす。香りもまだ薄い。

赤ずきんと白雪姫は同じ洋室を寝室としている。草太の寝室の隣の部屋だ。白雪姫はまだ寝ていたのだが、かまわず蛍光灯をつけていた。少しすると白雪姫はもぞもぞ身じろぎして、隣のベッドの上で身を起こした。ずいぶん疲労困憊（ひろうこんぱい）の様子だったが、きっちりパーティドレス風のパジャマに着替え、頭にナイトキャップまでかぶっているのが、さすがだ。

「もう、まぶしくて寝ていられませんわ〜……、あふ」

「このまま朝まで寝ちゃうつもりだったの？　ごはん食べてから寝直したほうがいいよ」

食いしんぼらしい助言をする赤ずきん。視線はコンペイトウのような実に向いたままで、白雪姫のほうを見もしない。白雪姫は、いまにも寝ぼけて倒れそうなフラフラの様子で、なんとかベッドから床へ足をおろした。ぐっちゃりとちらかっているファッション雑誌や通販カタログや錬金術の書を爪先でよけてカーペットの上に立ちあがる。

ふたりの部屋は惨憺たるちらかりようなのだが、それは九割九分が白雪姫の所業である。見ための清楚さやお洒落さに反し、白雪姫は身の回りのことに関しては、ちょっと……いやかなりルーズなところがあった。目をしょぼしょぼさせて「メガネ、メガネ」と枕もとをまさぐり、愛用の縁なしの丸メガネをとりあげて、顔にかける。
「……ふあ、りんごさんは？」
その声に、赤ずきんはやっと実から顔をあげて白雪姫を見た。
「白雪。メガネ、逆、逆」
「？？？　あら、まあ」丸メガネを上下反転させ、かけ直す白雪姫。
「りんごちゃんならもう帰ったよ。台所に白雪のぶん用意してあるからチンして食べてって」
「なるほど、わかりましたわ～」
足下で裏返っていた牛さん顔がついた白黒のスリッパを、行儀悪く足で返して片足を入れる。だが、どう見渡してももう片方が見つからず、あっさり諦めて素足でいくことにした。もたもた雑誌の層を踏みこえ寝室の扉をめざそうとしたが、すってーんと足をすべらせ、勢いよく背中からベッドに倒れこむ。そのまま、すーすーとまたも寝息を立てはじめた。
まったくぅ、と肩を落として、赤ずきんはもう放っておくことにした。シーツの上の十数個の実のそばに、同じように転がしていた小さな布袋を見やる。手にとり、なかから折り畳まれた紙切れをとりだす。今朝、フェレナンド国王から届いた、大事な手紙。


ふぁ・・・
うーん、もうちょっとかな?

「うん、やっぱり、とびきり食べごろじゃないとごちそうにならないよね」
一晩、寝かして熟させるのがいいかな、と考えた。かといって、どこに置いておくか。どこに置いておいても、白雪姫になくされるか、あるいはダメにされるかわかったものではない。寝ぼけて食べられる可能性もある――これは白雪姫にすれば「あなたじゃないんですから」と反論がありそうだが――。
赤ずきんは実をすべて集め、手紙と一緒に布袋のなかに入れておくことにした。そして床におり立ち、壁の把手にかけているロープや兜といった戦闘装束に歩みよる。そのなかのひとつ、革の腰帯に括りつけておくことにした。白雪姫といえど、さすがに他人の装備にまで手はださないはず、と前向きに期待して。
これでいい、とうなずく。ひと仕事終えた充足感。
赤ずきんはローブの下方、無造作に壁に立てかけていた双剣グリムテイラーに目を留める。
「手入れしとこーっと。もとに戻ったヴァルにガミガミいわれないようにねっ」
といって、鞘に収まった一対の剣をとりあげた。
そのとき階下から、ぴんぽーん、と玄関チャイムの音がした。来客だ。赤ずきんは寝室の壁にかかっている、文字盤にネズミのキャラクターが印刷された時計を見やる。いま時刻は夜の九時。……誰だろう、こんな時間に。
りんごちゃんかな、と赤ずきんは思った。

8

——あれ、泉先生？　どうしたんですか、こんな時間に。
——ふふ、一応、姫川さんやみんなの様子を見にね。これでも、先生ですから～。
チャイムに呼ばれて玄関に向かった草太の驚いたような声がした。続けての返事は2‐A担任の泉先生のものだった。ぴくりと眉を動かし、縁側に残っていた姫川——グレーテルは居間にあがって廊下へと出ていく。いい機会だ。こんな、わけのわからない状況に置いてくれた張本人に、嫌みのひとつでもいってやろうと思って。
鈴風家は、居間から廊下に出てすぐ正面に二階へあがる階段、左手に玄関がある。玄関脇の下駄箱の上で、ギターを抱えたポンチョ姿の人形が首をゆらしていた。草太の背中ごしに、コンクリートの沓脱ぎに立っている泉先生の姿が見えた。
日中、学校で見たままの地味めの服装に身を包んで、草太とにこやかに会話していた。
「あら、姫川さん。こんばんは」
居間の引き戸のそばに立つグレーテルに気づいて、ふわりとした笑みを向けてくる。思わず油断させられる表情だ。つい、まあいいか、と許してしまいそうになる。いやいやしっかりしろ自分。そう気を引きしめて、グレーテルも玄関へと歩みよった。
「えと、あがっていきますか、先生。お茶くらいだしますけど」

気を遣っていった草太に、泉先生は糸のように柔らかく目を細めて首をふった。
「遠慮しておくわ、そうね、でも一応赤ずきんさんと白雪姫さんの顔も見ておこうかしら」
「わかりました、じゃあ呼んできます」
「ごめんなさいね、別にいそがなくてもいいですから」
こくん、とうなずいて草太は階段へととって返した。玄関には泉先生とグレーテルだけが残される。たんたんたん、と草太が階段をのぼっていく足音。グレーテルは、にこにことこちらを見てくるのほほん女教師に、なんといって切りだしてやろうかと思案した。えい面倒くさい、ストレートに不満をいってやれ。
……よし。ぐっ、と唾を飲み、舌先で唇を湿らせ、口を開く。きりりと鋭い眼差しをして、
「先生、あな――」
「どう、上手くやってる?」
ゆったりした声にさえぎられた。は? とグレーテルは思う。上手く? 上手くとはなんだ。思考の死角を突かれ、声をなくしたグレーテルに泉先生は「ふふ」と笑った。
「だって、ほら。せっかく草太くんとお近づきになれるよう、チャンスを作ったのよ?」
説明されたが、それはグレーテルの混乱を深めるだけだった。泉先生は「ね?」とウインクまでしてくる。なんだその、おせっかい焼き丸だしな表情は。もしや、と考える。グレーテルは知らなかったが、いま姿を借りているこの姫川という生徒は、実は鈴風草太のことが好きで、

泉先生はそのことを知っていた、とかいう衝撃の事実でもあるのか？
だとしても、大きなお世話だ。
――赤ずきん、白雪、泉先生がきてるんだ、ちょっと顔だしてくれるかな。
――先生が？　うん、わかったよー。あ、でも白雪まだ寝てるんだよね、起きるかなぁ。
二階から草太と赤ずきんの声が届いてきた。意識の片隅でその声を聞きながら、グレーテルはこのまったくもって余計なことをしてくれた女教師に文句をいうなら、三人がおりてくる前に済ますべきだ、と思った。でないと、ややこしくなりそうだ。
素足の裏に廊下の床の冷たさを感じながら、皮肉げに、
「それは、まあ上手くやってますけど。でも――」
「あら、おかしいわね～。じゃあ、どうして草太くんはまだ息をしているのかしら？」
一瞬、なにをいわれたのか、わからなかった。
泉先生は、ただにこにこした糸目でこちらを見ているだけだ。グレーテルは向けられた質問の意味が頭のなかで形をなさず、ぼんやりと（なにいってるのかしら）と思った。息？　息をしていることが、なぜおかしいのか。変、……なにかが変だ。
理由もなくグレーテルは息苦しさを憶える。玄関の空気が、ねっとりと粘性を帯びたような。
気がつけば口のなかが渇いていた。苦労して舌を動かし、
「え？　先生、なにをいって――」

「ふふ、ダメね。わからないの？」
そして、グレーテルは次の言葉に魂の灯火が吹き消されるような衝撃を受ける。
『使えない駒だ、おまえは。なんのために魔法道具を持ちださせてやったと思う』
ぞく！　と頭のてっぺんから足の爪先まで信じがたいほどの悪寒が突き抜けた。
それはたしかに泉先生の口から吐かれた言葉だった。グレーテルの目が極限まで見開かれる。
『フ、そう驚くな。いったろう、朝、――〝怒ると恐い鬼（まじょ）の登場だ〟とな』
「なっ――、ぐぅッッ!?」警戒する暇もなかった。それまでだらりと垂らしていた左手を、泉先生が無造作に、いっそ気軽にグレーテルの首にのばしたのだ。まるで察知できなかった。万力のような力で首を鷲掴（わしづか）みにされる。焼けた鉄棒を喉に突っこまれたような灼熱感。たやすく気管も頸椎（けいつい）も握り潰されるのではと思えるほどの激痛が、爆発した。
「……！　……！　ッ、ッ、……っ!!」
苦悶の息を吐くことすら許されない。こよりを千切るよりたやすくグレーテルの意識が断ち切られていく。酸素を求める魚のようにグレーテルの口が喘ぐ。二階から、能天気な赤ずきんの声が聞こえてきた。

――ほら白雪、起きてよ、草太くんがね、先生がきてるんだって。

ちらりと顔を上向けてから泉先生はグレーテルを見据えた。口もとに浮かぶ優しげな笑みはそのままに糸のように細めていた目がゆっくり見開かれる。まぶたの下から現れたのは呪わしい赤い輝きを宿したふたつの瞳。――見覚えがある。それはグレーテルの意識下に、絶対の畏怖の対象として刻まれている赤眼。

あの魔道甲冑兵の両目と同じでありながら、それはまるで別次元の代物だ。

禍々しさの度合いが違う。感じる恐怖の大きさが違う。叩き落とされる絶望の深さが違う。

さ ん ど り よ ん さ ま ?

たどたどたどしくグレーテルの唇が紡いだ言葉に、泉先生の笑みがより大きく、はっきりしたものに変わった。見紛うはずのない大魔女の瞳。だが、グレーテルの脳裏は〝滅びの魔女の城〟にいるはずのサンドリヨンが、なぜ供のものも連れずこんなところにいるのか、という疑問に占められていた。こんな話は聞いたことがない。

ぞぷり。

その疑問に答えるように、グレーテルの首を掴んでいる泉先生の左手が形を崩した。まず色が肌色から闇を溶かしこんだような無明の黒となり、指先から腕へと、みる間に粘性の液体へ変質し、独立した生物のようにおぞましくうごめく。さながら蛭(ひる)かなにかのようだ。グレーテルの首に絡みついている元・手だった部分から、ねばつくコールタールのような粘液の筋が枝

分かれし、蜘蛛の巣のように彼女の全身に絡みつき覆っていく。

手も足も動かせない。声も出ない。助けも呼べない。

——起きた、起きましたわ、肉じゃがさん。この赤ずきんをチンすればいいんですの？

——むぅー、なに寝ぼけてるの、白雪！　わたしはチンしちゃダメだよっ。

そして、いまにも消えそうな意識と視界のなか、グレーテルは見た。黒い粘液への変質は左腕だけではなく、泉先生の左半身すべてにおよんでいた。身にまとっている衣服までがきれいに左側だけ、黒く溶けこみ一体化している。残る右半身は元のまま。サンドリヨンである証拠の赤眼をのぞけば、それはたしかに泉先生だった。顔の右半分だけで浮かべている、ふわふわしたタンポポの綿毛のような笑みが恐ろしい。

——うーん、寝かせておこうか、赤ずきん。泉先生、待たせちゃってるし。

二階から聞こえてくる草太の声は、もはやグレーテルの耳には届いていない。グレーテルはかすかに明滅する意識のなかで思いだしている。大魔女サンドリヨンは、魔女の城にいながら自らの影を自在に飛ばし、どのような姿でもとらせ、いかなる場所へも侵入できる、と噂されていた。いま、その真偽をグレーテルは身をもって知った。ここにいるのは——、

『フ、しょせん余興なのだ。できれば、わたしの手を煩わせず楽しませてほしかったぞ？』

ここにいるのはサンドリヨンの〝魔影(シャドウ)〟だ。

はじめから、すべて知られていていたのだ。はじめから、すべて見られていたのだ。

『グレーテル。やはり、おまえもヘンゼルと同じか』
どうしてここで兄の名前が出てくるのだろう、とグレーテルは思う。なにか聞いてはいけないことを聞かされようとしている、と予感した。逃げたい、耳を閉じたい、だが全身はまったく自由が利かない。涙のにじんだグレーテルの視界で〝魔影〟は、拷問器具を見せつけるがごとくゆっくりと右手を持ちあげた。
それはきれいに爪の切りそろえられた人間の手だ。温かみのある肌をした、泉先生の、手。なのにグレーテルは、その手と指先からとてつもなく邪悪なものを感じた。
『ヘンゼルと同じだ。弱い。弱すぎて、そのままでは欠けらも役に立たん――クズ同然だ』
やめて、と思う。――お兄さまをそんなふうにいわないで。
右手がグレーテルに迫る。五本の指がグレーテルの額にふれる。そのまま、ずぶずぶと埋没していく。痛みはまるで感じない。なのに頭のなかをさわられている、という感覚だけは、はっきり認識できた。全身がおぞけ立つ。涙が止まらない。指は、容赦なくグレーテルの頭の奥の奥まで侵入し、そして〝魔影〟はサンドリヨンの声で、さあ、と歌った。
『おまえの頭のなかをシチューのようにかき混ぜてやろう。わたし好みの味になるようにな』
呪わしい赤眼の向こう、魔女の城で玉座に座るサンドリヨンの姿が見えたような気がした。
笑っている。
『――そう、おまえの愛しい兄と同じに』

それは死にも等しい宣告。

（ああ、そうか、お兄さまはやっぱり、そうだったんだわ）

兄が可哀そうだ、と思ったのを最後に、グレーテルの意識はプツンと途切れた。

五幕

――やってくる。はるかなる天の高みから、名もなき〝森〟が。

1

玄関にはなにも残されていなかった。
まるではじめから誰もいなかったように、そこから泉先生と姫川リサの姿だけが消えていた。揉めたような――そもそもふたりが揉める理由もないはずだが――形跡もない。ただ下駄箱の上で、ポンチョ姿の眠そうな目の民族人形が、カタッカタッと首をゆらしていた。
二階からおりてきた草太、赤ずきん、白雪姫の三人は、さては外かと玄関から出てみたが誰も見つけられず、念のため家のなかも探したが、やはりどこにもいなかった。ばらばらに家捜しをしたあと、三人は居間に集まって困ったように顔を見合わせた。
「帰ってしまったんですの……？　わたくしが少々、遅くなってしまったばかりに」
少々、の部分を強調して白雪姫がいった。寝巻きから青と白を基調としたしとやかなドレス

に着替え、頭のナイトキャップも外して髪もととのえられている。ふたりだけでおりていこうとした赤ずきんと草太を引き留め、白雪姫は自分の支度が終わるまで待たせたのだった。どうだろう、と草太は思う。仮に帰ったのだとしても、黙ってとは考えにくい。

「なにか聞いてない？　ヴァル」

草太が食卓に置いたヌイグルミの頭に手をのせ、赤ずきんが問いかけた。

本気で答えがあるとは思っていない様子だ。言葉を選んで草太はいった。

「……あのさ。ひとつ気になることがあるんだ」

三銃士ふたりの視線が草太に向く。庭の草葉がゆれ、開放してある縁側のガラス戸から夜風が吹きこんでくる。流れる群雲に空の満月は隠されていた。庭は、居間の明かりの届く範囲だけが薄明るい。そのすぐ外側は闇だ。

「和室を覗いてみたんだけど、姫川さんのポシェットがなくなってて……」

「ポシェット、あの黒い？」

赤ずきんと白雪姫の声が重なった。草太はうなずく。黒い本革製で、ずいぶん年代もののようで、姫川が大事にしているようだったポシェット。消えたのはそれと？　と聞く赤ずきんに草太は、それだけと答えた。沈黙がおりる。

そこにどんな意味があるのか、三人とも考えていた。三人が三人とも、このできごとを今日の一連の騒ぎと関連づけていいのか決めかねている。赤ずきんが双剣グリムテイラーを

さげた革の腰帯に手をふれさせる。黒の上下という軽装だった彼女は、家捜しの途中、自室に立ちより戦闘装束に身を包んでいた。おそらくは甚だ漠然とした予感によって。

当たらなければいい、そんな予感。

居間の外、庭で強まった風の音がしていた。ひゅううう、るるるう、と風が鳴いている。

草太はふと、自宅に戻ったりんごはどうしているかなと気になった。もう寝ているころだろうか。今日の騒ぎがまだ終わってないにしろ、少なくとも家に帰った彼女が、これ以上巻きこまれることはないはずだ。

なにがあっても明日りんごに会ったら、なにもなかった、平穏だった、といおう。

——るるるるるるううう！

ざんっ、と〝ポランポランの木〟を派手にゆらし、炎のごとき赤い毛並みが庭へ飛びおりてきた。着地のさい鉤爪（かぎづめ）で千切られた雑草が、ぱっと宙に舞う。大きな、ヌイグルミになってしまう前のヴァルの倍はある、オオカミだった。

ちょうど明と暗の境界線あたりに立ち、居間をにらみ、毛並みのなかに埋没する赤く濁った両目で、なにかを探し、捉える。

三銃士ではなかった。白目の部分まで赤く染まった瞳が見いだしたのは草太の姿だった。

『るう、るるるうう……っ』

風の音に混じって聞こえていた奇妙な音、唸りが喉からもれている。

草太をにらみ、オオカミは大きく牙を剥き、どんっ！　と地面をけった。

『……っるるるるるうううううっっ!!』

まさしく神速。全身のバネを利かせて跳躍する。体の前で両腕を交差させ、腰の左右から双剣グリムテイラーを二本同時に抜き放つ。

しゅきんっ、という刃が鞘走る音――。涎の尾を引かせオオカミの顔が迫る。

「――――ッッ!!」

オオカミが跳ぶと同時に、赤ずきんも前傾姿勢で畳をけり、庭へ駆けだしている。

舐めるなっ！　と赤ずきんは思う。

草太の家は、たとえるならファンダヴェーレにおけるフェレナンド国王が住まう王城にも等しい大切な場所だ。そう何度も蹂躙されていい場所ではない。幼げな赤ずきんの顔に明確な怒りがよぎる。革兜、ローブ、長靴と戦装束に身を包んだ赤ずきんと、燃えたつような毛並みで覆われたオオカミが空中で正面衝突する。その光景は勇壮なる赤と赤の激突だった。

赤ずきんがくりだす二本の刃、オオカミがふるう凶悪な爪と牙。それは一瞬の間に数えきれないほど操りだされ、両者は互いに九十度方向転換し、さらに跳んだ。闇夜に火花が散ったように見えたのは、オオカミの体毛か。

――赤ずきんは居間から見て右手へ、オオカミは左手へ。

常人の目には、いくつもの斬光が閃いただけと映ったはずの攻防、どちらが優勢だったのか答えはすぐに出た。まだ宙にある赤ずきんの全身にはかすり傷ひとつなく、対するオオカミはその前肢を両方斬り飛ばされ、空中で大きく体勢を崩している。

（こっちは、りんごちゃんのごはんでお腹いっぱい体力満点なんだからっ）

「ダメですわ、赤ずきんっ。相手は、ただのオオカミ族ではありません！」

凛とした表情の赤ずきんに、居間から白雪姫の警告が飛ぶ。

しかし赤ずきんは「わかってる！」と当然のように答えて、地面に足が着くなり再度、全力で跳んだ。グリムテイラーをかまえ直し追撃する。宙を舞っていたオオカミの前肢がボウッと炎を発して消滅し、次いで地面に転がった前肢が一瞬のうちに再生した。

己の健在を示すように咆吼をあげる。ダメージがあるようには見えない。無傷に戻っている。

（やっぱり！　感じる魔力の大きさが全然ちがうと思ったけど――）

サンドリヨン軍に属するオオカミ族・人狼兵は大なり小なり魔女の魔力の影響下にある。けれど目前にいる赤毛のオオカミは全身から発している魔力の濃さが尋常ではなかった。その密度は、オオカミの体自体が魔力でできているのではと思えるほど。半人半狼の姿をとらないことといい、一般的な人狼兵ではないようだ。……ならば体の欠損が、またたく間に再生されることも驚くには値しなかった。

グリムテイラーをかまえ飛びこんでくる赤ずきんに、オオカミは再生した前足をふりあげる。

だが、その前足は赤ずきんの体に当たるどころか、掠ることすらできない。

キンッ！　と斬光が宙を走って前足は十以上の輪切りにされ、二本の剣はさらに頭部を討ち、それでも足りないと赤ずきんの膝蹴りが真下からオオカミを吹き飛ばした。炎の塊みたいな巨体が軽々と真上に踊り、着地した赤ずきんの足もとに重々しい音を立てて落ちてくる。

どずんっ。

「――――ふぅっ！」

ここまで息を止めていたように、赤ずきんは鋭く呼気を吐いた。その額には一滴の汗さえ浮かんでいない。

草太は居間に立ちつくし、息をのんで見守っていた。

蛍光灯から下がる紐が、オオカミ落下の余波で地震でもあったようにフラフラゆれている。

（すごい……）

としか、いいようがなかった。圧倒的だった。以前、赤ずきんのお菓子を黙って食べ説教された白雪姫が教えてくれたことがある。くどくどガミガミ叱っていた赤ずきんのことを、草太が「でも、そんなに恐くないね、赤ずきんが怒っても」と笑っていったときのことだ。

白雪姫は青ざめた顔で述べた。本気の本気で怒った赤ずきんの恐ろしさ、強さを。

肩をふるわせ涙目になって、それはもうバケモノ並みだ、と評して、

――あれを見れば、きっと草太さまも敵に同情せずにはいられませんわ。ええ。ええ。
話題になった当人は、大げさだよと反論していたが、たしかに。
「……あれが、本気で怒った赤ずきん、なのか……」
草太の呟きを聞きとがめて、隣に立った白雪姫が「?」と顔を向けた。そして、首をふる。
「なにいってるんですの。あんなの、怒ってるうちにも入りませんわ」
「え?」
嫌なことを思いだささせられた、というように白雪姫は肩を抱いて身をふるわせた。
「そんなことより、あのオオカミもたいしたものですわ。ほら」
白雪姫の声に、草太は赤ずきんとオオカミの戦場、庭へと目を向ける。赤ずきんのすぐ前で地面に伏せていた赤い毛並みが、むくりと身を起こした。赤ずきんが後方へステップを踏んで距離をとる。オオカミは、まるでダメージを負ってないように見えた。それどころか与えられた損耗を己の力に変換し、その体をさらに大きくしているようにさえ見える。
「……どうやら、想像以上に厄介な敵のようですの」
オオカミは赤ずきんを無視することに方針変更したのか、ぐりん、と居間へ顔を向けた。すぐに赤ずきんが回りこみ、その前に立ちふさがる。だが相手は無限の体力、再生力を持っているのではと思えるほどの魔物だ。いま赤ずきん優勢なのは間違いないが、これがいつまでも続けばどうなるのか――。

「……あ、スレイプニル、あの銃型弓ならっ」
「無理ですわ」
草太の言葉を、白雪姫が言下に否定する。
「スレイプニルは多大な精霊力を凝縮し、放つ神器。精霊力の希薄なエルデでは、そう何度も撃てるものではないんですの。赤ずきんは昼間、魔道甲冑兵を倒すのに三発撃ったという話ですから、おそらく今日はもう使えないですわ」
打つ手はないということなのか、と困惑した顔の草太に、白雪姫はウインクをした。
「だ・か・ら。そういう厄介な相手にこそ、わたくしの魔法が役に立つんですわ」
「君の、魔法が……?」
「はい。おまかせくださいですわ、草太さま♪」
白雪姫は、青銀の髪のなかから小型化させていた光輪キルクイトゥスをとりだす。しかし草太は知っている。今日、無茶をしたのは白雪姫も同じだ。それどころか赤ずきんから聞いただけだが、単純に力を消耗した分ならおそらく彼女が一番だろう。
大丈夫なのか、無理をしないほうが……、という草太の表情に、白雪姫はにこりと笑った。
光輪に一声かけて元の大きさへと戻し、人差し指の爪でキンと弾く。
「問題なしですわ☆　伊達にマホビタンZ1ダース一気飲みしてませんの。草太さまはこれでも抱っこして、安心して見ててくださいな」

白雪姫はそういって食卓の上からヴァルのヌイグルミを片手でとりあげ、草太の胸にムギュッと押しつけた。次いで鋭く表情を引きしめ「赤ずきん！」と呼びかける。阿吽(あうん)の呼吸で、うんっ、と庭から声が返ってくる。

「わたしが足止めするから、白雪、お願い！」

正面から飛びかかってくるオオカミの牙をグリムテイラーで受けとめ、赤ずきんが応える。

白雪姫が呪文詠唱を開始する。……今度こそ自分が場の主役たる華々しい活躍のときだと。

（うん、三銃士のふたりに任せておけば大丈夫だ）

ヌイグルミを胸に抱いて、そう思った草太だが、――――？　と急になにか違和感を感じた。

（なんだ？　これ……）

どくんと胸が動悸(どうき)を起こす。違和感、予感、直感、霊感、呼びかたはなんでもいいが、とにかくその感覚に導かれるように草太は視線を向け、赤ずきんを押し倒そうとしているオオカミと目を合わせた。白目の部分まで酷く血走ったように赤く濁り、染まった、禍々しい両目。獰猛(どうもう)に逆立っている全身の赤い毛並み。

……赤。それは赤ずきんの色であり、炎の色であり、血の色であり、それから――。

「ッッ！」その連想に、草太は感電したように背筋をふるわせた。

同時に呪文を唱え終わった白雪姫が「——いまですわ！」と赤ずきんに声をかける。
それを合図に赤ずきんが、わざと後方へ倒れこみながらオオカミの体を受け流し、地面に背中を着いた。グリムテイラーから両手を離して体をギュッと丸め、両手で地面を突いて体を支え、バランスの崩れたオオカミの巨体を真下から全身のバネを利かせた両足げりで、けり飛ばした。
同時に、白雪姫が自信満々に光輪キルクイトゥスを高々とふりあげる。
「さあ、いきますわっ！　わたくしの華麗にして優雅なる、この美しき絶対凍結魔——」
ダメだ、と草太がヌイグルミを投げつけて光輪を弾いた。
すぴゅーんっと白雪姫の手から飛んだ光輪は、鋭利な刃を持ったフリスビーのように天井に刺さり静止して、空になった手を「——法！」とふりおろした白雪姫は、がっくんと体勢を崩した。「ななな、なにするんですの、草太さまっ？」と混乱した声をだす。
顔に浮かぶのは、〝今度こそと思ったのに！〟という色。
壁に当たり、ぼてっと畳に落ちたヌイグルミも、またかよ、と手荒な扱いに不満げだ。
「……ごめん、でも、ダメなんだ！」
白雪姫を置き去りに、草太は居間から駆けだし庭へと飛び出た。オオカミの巨体が孤を描いて落ちた暗がりへと駆けよる。くるりと反転し三銃士たちに体を向ける。
きっと、どう説明してもわかってもらえない、そんな、まるきり自信のない表情で、

「あ、あの、このオオカミはなんていうか……、その……、えっと――」
草太の背後で発せられた『うるるうぅッ!!』という鋭い唸りが重なった。その声に草太は後ろへふり向き、跳ねるように立ちあがら空きの背中。赤ずきんが叫ぶ「あぶない！」の声と、がった赤ずきんも絶対に間に合わないタイミングで、後ろ足で仁王立ちになったオオカミが大きく牙を剥き、その顎がいままさに少年の頭を捉える――瞬間に。
（だいじょうぶ、もうだいじょうぶだから）
草太は信じがたいほど澄んだ眼差しをしてオオカミの顔を見上げ、諭すように、叱るように、包みこむように、
「――やめるんだ、りんご!!」

燦（サン）っ!!

草太の全身から白光が爆発した。それは銃型弓スレイプニルが生む浄化の光など比べものにならないほど苛烈にして清冽で、なお神々しく、また圧倒的な、光の――いや力の発現だった。あらゆる〝魔〟や〝邪〟や〝呪〟や、いっそ〝聖〟さえも消し飛ばすほどの、ただただ強烈で純粋なエネルギー。
居間にいる白雪姫までもその力は届き、彼女は白光の波に溺れそうになりながら、

「……こ、これは〝封印の鍵〟の、力……っっ！」
草太のなかにある神に匹敵する力の、ごく一時的な、そしてごく一部の、無意識的解放現象。
どうっ！　と至近距離で正面からその力を受けたオオカミの体が、一瞬でぐずぐずに融解し、鉄砲水に押し流されるように一気に後方へ弾け飛んだ。空中で炎を発し、またたく間に完全に消滅する。そのあと、元の地点に残されたのは、剥きだしになった粘土細工の心棒のように立ちつくす、木ノ下りんごの姿だった。
その胸に飾られていた蛇眼模様の羽を持った毒蛾のブローチが、ぱしんと弾けて霧散した。
草太は必死にりんごの名を呼ぶ。
――しかし、りんごはその声に応えることもできず、立ったまま意識をなくしたように、くたりと地面へ倒れこむ。草太は血相を変えて、あわてて駆けよる。地面に膝をつき、鈴風家で食事をとったときのままの服装のりんごを抱き起こした。膝の上で抱くようにして上半身を何度もゆするが反応はない。だらりと力なく地面に垂れた両腕は、動かない。
「りんご、りんごっ、しっかりしてよ！　りんご！」
「……ぅ、ぁ」
それでも諦めずに呼びかけていると、かすかにりんごが呻いた。地面にふれている右腕がぴくんと弱々しく反応する。まぶたが小さく小さく痙攣し、ほんのわずかに薄目が開く。そこにあるのは愛嬌のある鳶色の眼差し、草太がよく知っている、りんごの瞳だった。


あぶない！
やめるんだ！

「そ、うた……？」
悪夢にうなされていたような、弱々しくうるんだ両目が草太の姿を捉え、かすれた声で呼ぶ。
「りんごっ？　りんご！　よかったぁ……気がついたんだ」
ほーっと草太は長い安堵の息をついた。りんごは「そう、た……」と途切れがちな声で名をくり返している。喘ぐように口が動く。声にならない声でなにかいっている。草太になにか伝えようとしている。なに？　と草太はりんごの口もとに耳をよせた。そ、う、た、となんとかはっきり言葉にしようと一音ずつ区切って発される声。
「……うん、なに？」
その声は、こう続けた。に、げ、て。
逃げて？
「りんご？　逃げてって、なに？　どこから？　だれから？」
あ、た、し、か、ら。

——居間の明かりが届ききらない薄闇のなかで、草太がりんごを抱き起こしている。りんごを内部に宿した魔物に攻撃を加えていたことが、少なからず赤ずきんには衝撃で、起こったできごとに反応するのが、遅れた。だが、そのおかげで気づいた。縁側の近くに立っている赤ずきんから見える、暗がりのなか地面に垂れているりんごの腕。その右腕がぴくんぴく

りんごの上半身に覆いかぶさって耳をよせている草太はまだ気づいていない。
ンと痙攣していた。さっきから、ずっと。
「…………？」
その手がなにかを持っているように見える。空の満月を隠していた群雲がふと途切れ、その隙間からふる月光を受けて、〝ポランポランの木〟の葉がふたたび七色を宿し、りんごの右手のなかのものが、きらりと冷たい光を反射させた。――まさか刃物？　赤ずきんが思ったと同時に、びくんっ、とりんごの右手が大きく跳ねた。彼女自身の意志ではありえない動きで。
危険なきらめきが不穏な軌跡を残して、りんごの右手とともに高くかざされる。
「どういうこと？　りんごから逃げろって、ねえっ」草太の声。
まばたき一回の短い時間のなか、赤ずきんの網膜にそれは強烈に焼きついた。りんごが手にしているのは短刀だった。不気味な短刀だ。硬質な輝きの刃に血管のような筋が浮かびあがり、短い刀身の根元にはきょろきょろと動く眼球が付いている。右手に握られている生物っぽい質感の柄から、植物の根のような、あるいは神経糸のような生々しい筋が幾本も伸びてりんごの手首から肘まで絡みついていた。胸の悪くなる光景だ。
いけない、と不吉な胸騒ぎに突き飛ばされたように、赤ずきんは地面をける。
「草太（くん）逃げて!!　!!」
悲壮な声で叫んだのが、実際は誰だったのか赤ずきんはわからなかった。りんごが声をふり

絞った気もするし、白雪姫の声だったたような、また自分も叫んだような気がするが、少なくとも感覚のうえではすべて他人の声としか聞こえなかった。
そして、誰もの〝草太、逃げて〟という願いは、けして叶うことはなかった。
赤ずきんが見ている前で、短刀の刃は、草太の背中めがけて閃いた。

2

深い、深い、深淵の奥底のような暗黒。負の澱み。渦巻く瘴気。
〝滅びの魔女の城〟、無明の闇わだかまる広間の玉座で、サンドリヨンは冥く微笑する。
邪悪なる唇が刻む短い言葉。

「……はじまりだ、《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》」

知るものはまだ少ない。悪趣味な短刀の姿をしたその魔法道具は、正しくは武具でなく一個の魔法生命体である。魔女が自らの手で造りだした個体だ。硬質な刃である刀身も実際は斬るためのものでなく口、栄養摂取器官でしかない。それ自体に殺傷能力はない。生物の体内に水のように浸透し、その生命力を根こそぎ吸収する。
しかし、今回の件に関して狙うべきは生命力でなく、鈴風草太という少年の体内に眠る〝封

印の鍵〟である。それを得るために魔女はいくつかの策を弄した。草太に〝封印の鍵〟の力を発現させること――でなければ短刀は生命力しか吸収できない――、強大な魔力を宿す《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》の接近を三銃士に気取られぬこと。

そのためランダージョを使って利用したのが木ノ下りんごという少女だ。少女を捕らえ、短刀を持たせ、魔法道具《スネークアイ・モス》の鱗粉で彼女の負の感情を増大させ、そこから強力な魔物を生みだす。草太のなかの〝封印の鍵〟は、彼自身ではなく彼の周りのものの危機により強く反応することは、以前の事例で判明していた。

そうして生まれた、内部に木ノ下りんごを宿した赤き魔狼は、草太に〝封印の鍵〟の覚醒を促し、同時にその身を形づくる濃い魔力は《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》の隠れみのにもなってくれた。はたして、この手で造りだした呪いの短刀は、〝封印の鍵〟の力を御することができるのか。できたのだとして、どれほどの力を行使しうるのか。

――しょせん余興なのだ。できれば、わたしの手を煩わせず楽しませてほしかったぞ。

サンドリヨンが影を通じていった余興という言葉、だがそこには別の意味もこめられていた。

赤眼の魔女は果てなく広がるような闇にささやく。

「フ、試みには犠牲がつきもの。だが、それもまた、わたしを少しは楽しませてくれよう」

そして、金髪の〝少女〟が赤ずきんたちの前に、姿を現す――。

3

鈴風家の三角屋根の上から、その少女は飛びおりてきた。
闇を織りあげたようなゴシックなドレスに身を包み、ふたつ括りにした長い金髪をゆらして、折り重なる草太とりんごを背に赤ずきんの前に立ちはだかる。全力で駆けだしていた赤ずきんは地面をけりつけ急停止した。いや、止められたといっていい。
少女から感じられる危険な魔力に。それはこれまでにも、ある敵から受けた感覚と同じだった。
「誰っ⁉」
赤ずきんの問いに少女は、感情をいっさい廃した表情と声で冷たく答える。
「大魔女サンドリヨン麾下(きか)、グレーテル」
「……ああっ、噂に聞いたことありますわ！　たしか魔法使いヘンゼルの妹が――」
白雪姫の声を無言で聞き流す少女・グレーテルの背後で、背中に《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》を突きたてられた草太が、ぐらりと体勢を崩した。りんごの上半身からすべり落ちるように横倒しになる。「……ぁ、は……っ」と掠れた息がもれている。草太の背中から抜けた短刀の刃は、びきっびきっと血管のような筋を脈打たせながら、その刀身を徐々に伸ばしはじめる。それは生物が成長するさまにも似ていた。

奇妙にも草太の背中には傷がなく、それどころか服さえ破けていない。なのに苦悶の声をこぼしながら、草太はグレーテルを見て「姫、川、さん……」ときれぎれにいった。なぜ？　と赤ずきんは疑問に思う。グレーテルは赤ずきんを見据えながら、左手を後方へ差しだした。見えない糸に絡めとられたように、短刀の柄を握るりんごの右手が持ちあがった。

グレーテルはその手から短刀の柄を強引にもぎとる。

ずるり、とりんごの手首から植物の根のような神経糸が剥がれ、柄のなかに戻っていった。

「――ッ！　ふたりから離れて！」

弾かれたように鋭くいって赤ずきんはグリムテイラーを腰だめにかまえ、グレーテルの懐に飛びこむ。ヘンゼルの妹、自分と同じくらいの歳の少女、なにかが赤ずきんの体に制動を、心に抵抗を生んでいた。しかし手加減できる相手でないことは対峙した瞬間にわかっている。全力でいくしかない、と双剣の片方を無理やり横薙(よこな)ぎに払う。その軌道の先に、無造作に短刀の刃がかざされた。刃と刃が激突する。無音。双方、ぴたりと宙に静止していた。

グリムテイラーは相手の刃にふれてさえいない。その寸前で、不可視の力場に阻まれている。いくら力をこめても微動だにしない。しかもグレーテルは短刀を握る手に、まるで力を入れていないように見えた。赤ずきんは息をのみ、残った片方のグリムテイラーで斜め下から斬りあげる。ぎょろり、と短刀に付いている眼球が、こちらを見た気がした。嘲笑った。

どんっ！　と赤ずきんの体が巨人の拳で殴られたように吹っ飛び、砲弾のように居間に飛び

こんで食卓を直撃し、粉砕した。さらにバウンドして受け身もとれず、めりこむほどの勢いで壁にぶつかる。……どすん、と畳に落ちた。居間にいた白雪姫は赤ずきんの体が疾風のごとくわが身の脇を掠め、後方へ飛んでいったことに、声もなく立ちすくむしかなかった。

グレーテルがなにかしたようには見えなかった。いや、たしかに指一本動かさなかった。

《赤ずきん！　赤ずきんっ》

《だ、だい、じょうぶ……っ、それより草太くんとりんごちゃんが……っ》

《わわ、わかってますわ！　このわたくしにお任せを！》

赤ずきんとの念話でそう答えた白雪姫だが、そんな簡単にいくとは自分でもとても思えない。なにより素手でどうにかなる相手ではないだろう。近づくことすら危険だ。白雪姫は、きっと天井をにらみ、ぴょんっと飛びつく。光輪さえあれば、魔法さえ使えれば、まだ――。すかっ。しょせん白雪姫の跳躍力であって、光輪に指先が掠ることもなく、手は宙をかいた。

（ああもうっ。もっとまじめに体術の訓練を受けておくべきでしたわ！）

その滑稽なさまを無感情に眺めていたグレーテルは、一歩踏みだし、短刀を天へとかかげた。

「……これが、吸収した〝封印の鍵〟の力か」

それはすでに短刀ではなかった。ゆるやかに反り返る細い刀身を長くのばした曲刀だ。ただそこにあるだけで、びりびりと庭の空気をふるわせ草花や木々の葉をゆらしている。畳に転がるヌイグルミに駆けより抱きあげた白雪姫は見た。吸いよせられるように見てしまった。

その曲刀が放っている無色の力、陽炎のように周囲の景色さえ歪ませているのは、たしかに先ほど草太が発生させた力と同じものに感じられた。吸収だって——？

「そんな、まさかですわ！」

「疑うか。ならば信じられるように見せてやろう、いまの力など戯れにしかすぎないと」

グレーテルの可憐な声が、不吉な響きを宿して吐かれたとき。

ずくんっ、と曲刀の刀身全体が鳴動した。その余波は天を衝くように突きだされた刀身から、〝封印の鍵〟の力が爆発的にふくれあがる。その余波は大気をゆるがすのみならず、地響きまでも引き起こしはじめた。……なにかまずいことが起きる。とてつもなくまずいことが起きる。白雪姫が感じているのは、もはや決定された運命だった。

呆然とするのも束の間、鋭い眼差しをして、胸に抱いているヌイグルミにギュッと力をこめ、頭上にふりかざし天井に刺さっている光輪めがけて投げつける。こら！　と叱るようにヌイグルミは手足をバタバタさせた。しったことか。しかも外れた。震動の続く畳をけって、もう一度ヌイグルミを拾い狙いを定めてさらに投げる。また外れた。

（ああもうっ、もっとまじめに投擲の訓練を受けておくべきでしたわ！）

「……な、なにやってるの、白雪！」

「なにって、それは——」

辛うじてグリムテイラーを手放さずにいられた赤ずきんが、よろけながら立ちあがったとき、

はげしさを増す震動のおかげて、天井から光輪がこぼれ落ちてきた。白雪姫は受けとめ、一瞬、顔がほころぶがよろこんでいる場合じゃない。ふたりは顔を見合わせ、次の瞬間、並び立って居間から駆けだし——足もとでサッカーボールのようにヌイグルミがけり飛ばされたが『もう好きにしてくれ』という感じだった——庭へと飛びだす。

「草太くん！　りんごちゃん！」

それを待っていたように、グレーテルはふたりに酷薄な笑みを向け、上空を見上げた。

「さあ、おまえたちも見ろ」

ぱんっ——と、はるか上空から空気の弾ける軽い音が聞こえたような気がした。

その一瞬だけで、それまで夜空に広がっていた群雲がすべてきれいに消滅した。神の息吹で吹き飛ばされたように。さえぎるものがなくなった夜空は、満月と星々の輝きで明度を増したみたいにさえ感じる。大小合わせて無数の天体を映しこんだ湖面のように澄んだ夜空。

そして変化は、それだけに留まらなかった。上空を見上げる白雪姫は「な、な、なんですの、一体……っ」と声が上ずるのを抑えようがない。やがて夜空一面に、超大規模な蜃気楼が浮かびあがるようにして巨大な〝なにか〟が現出し、それを目の当たりにした赤ずきんと白雪姫は、意図せず呼吸を合わせ困惑がにじんだふるえる声を吐く。

あれは〝森〟？　と。

――はるか上空に、この街全体を覆うほどの荘厳なる森が現れていた。
鏡映しにしたように上下逆さまで、いまにも地面に向かって落ちてきて、辺り一帯をたやすく滅ぼしてしまいそうなほどの……夜空を塗りつぶす黒々とした一面の樹海。
それは息苦しさを覚えずにいられない悪夢のような情景だった。
「フフ、どうだ。あれこそが、〝封印の鍵〟のなせる業」
兄とそっくりに平坦なグレーテルの口調に、いつしかほのかな狂躁が混じりだしていた。長い曲刀となった《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》を中心に、重力を断ちきる力場が発生し、グレーテルのみならず背後の草太とりんご、赤ずきんと白雪姫、周囲に存在するものも巻きこんで宙へ浮上させる。白雪姫がとまどいの悲鳴をあげる。
赤ずきんは空気をかいて泳ぐようにして、なんとか草太とりんごに近づこうとする。
必死に手をのばす。
「草太くんっ!! りんごちゃんっ!! 草――」
「貴様たちの相手はあそこでしてやろう、希望も安らぎも飲みこむ、あの黒き森で!」
赤ずきんの声は冷たい哄笑めいたグレーテルの宣言に、かき消された。

4

「あー、びっくりした。おさまったみたいだな、地震」

紘車中学の正門の向かい、四車線の車道をはさんで建つコンビニの店先。店名のロゴが入ったエプロンを付けた青年は、屋外掃除の手をとめ、辺りを見回していた。歩道を歩いている通行人たちも「けっこう、大きかったな」「震度いくつだ?」などと会話している。

「あれ、さっきまで雲があった気がすんだけどな、空。これも地震の影響か?」

帰ったらニュースでも観てみるかと思いながら、青年は、ふと空を見上げた。

月、数多の星。それだけが占めている夜空。むろん、そこにそれ以外のものなど見えない。

――そこにある黒き〝森〟は、常人の目には映らない。

「あ、やっべ、商品倒れてんじゃねーの」

ちっ、と舌打ちをして、あわてて青年はホウキとチリトリを手に店内へ駆けこんでいった。

やがて、街上空から〝森〟は何処かへと姿を消した。

5

なにもない、ここは死の世界だ。そう肌で感じていた。

「りんご!　……りんごっ?」

粉っぽくざらついた地面にひざを着いて、草太は、目を閉じ仰向けに倒れているりんごの体をゆすっている。自身の体を襲った、魂を引っこ抜かれるような脱力感からは、ずいぶん回復していた。自宅の庭で起きたことを草太はすべて覚えている。

「安心しろ、死んではいない。たとえ、そうなっていても別にかまわないが」

背後からの声に、ふり向いた。

闇夜をまとっているかのようなゴシック・ドレス。ふたつ括りの金髪をゆらし、右手に生物めいた曲刀をたずさえる少女、グレーテル。「姫川さん――」と草太は呟く。あれは気のせいではなかったのだ。月明かりのもと、縁側で見上げた姫川リサの顔に重なって見えた、別の少女の顔は。グレーテルは草太の言葉を沈黙で肯定した。

けれど、草太は（ちがう）と思う。あの少女と同一人物でありながら、まるで別人に感じた。

――およそ十分ほど前、この場所で目覚めてはじめに目に映った空は、厚い暗雲に覆われている。

その向こうは見通せない。

いま草太たちがいるのは、階段状の斜面を有する四角錐の建造物の頂上部を切りとってできたような平地。未完成のピラミッド、神殿、あるいは巨大な祭壇を連想させる場所。そこからは密生した木々が生い繁り、なのにまるで生命力を感じさせない空虚な砂漠のような森が地平線まで広がっているのが見えた。

驚くべきことに建造物は、畳一畳はあるかというクッキーを、並べ、重ねて造られていた。甘い焼き菓子製の台地、けれどバターの匂いもなんの香りもしない。森と同じく、この世界のものすべてが形だけの偽りであるようだ。紙に描いた背景のように。急ごしらえの舞台装置でしかないように。

「その娘。親しいものに刃をふるったことが、よほど堪えたらしいな」

底冷えするグレーテルの声に、草太は顔をりんごに向けた。浅い寝息をくり返している。たしかに命に別条はなさそうだ。悪夢にうなされているかの表情だけが気がかりだが。

くっと顎を引き、草太はふたたび仮面のようなグレーテルの顔を見返した。正面から、強く。

(彼女になにがあったんだろう……)

あのとき見た、幼げで、甘えっ子の雰囲気をまとい、なのに孤独の影が落ちていた顔。

——あるところに女の子がいて、その子にはとっても大好きなひとがいて。

——憎くて憎くて憎くてしかたなかったのに、いつの間にかその女の子も、ちょっとは友達になってもいいかな、って。

——そうよね。正解。ただ困ったことに、その女の子はもう十分魅力的なのだけど。

いまグレーテルの顔には優しさも愛らしさもなく、そもそも人間らしさが欠如していた。

なにがあった⁉

「————ッ」

草太は地面をけって、跳ねるように立ちあがった。その眼前に曲刀の先が突きつけられる。とくっとくっと血管のような筋が脈動しているのが間近に見えた。
「おとなしくしていろ、鈴風草太」
草太の命を奪うことになっても、わずかもためらわないだろう虚無的な声。眉間のごく至近距離にある鋭利な刃先に、じんじんした不快な圧迫感を受けながらも、草太はひるむことなくグレーテルを見やった。
恐れよりも先に、彼女をこんなふうにしてしまったものへの怒りが胸に充満していた。
「貴様は、わたしとともに三銃士の亡骸が運ばれてくるのを待っていればいい」
亡骸？
聞き過ごせない単語に、草太は眉間のしわを深くする。
「……赤ずきんと白雪姫は、いま、この無辺なる森をさまよっている。おまえと、木ノ下りんごの姿を求め、わたしが奪った〝封印の鍵〟をとり戻すために。そして、わたしは、この森に多くの家畜を放ってある。いまごろ、すでに餌になっているかもしれないな。五体満足な姿は期待しないほうがいい」
グレーテルの無機質な声からは嘲りも、そのほかの感情も読みとれなかった。
そのことが草太の胸を痛切に刺す。
草太はグレーテルから視線を離し、建造物の外に広がっている森を遠くまで見渡した。

（この森のどこかに、赤ずきんと白雪姫が、いる――）
ここからでは、どこにいるのかわかるはずもない。いまも、どこかで戦っているのか。
無事でいてくれればいいと思う。無茶をせずにいてくれればいいと思う。けれど、ふたりは自ら危険にも飛びこむだろうし、平気で無茶もするのだろう。元いた世界ファンダヴェーレの国王という人物から授かった〝四つ葉騎士章〟の誇りにかけて。
それが、まだ短いつきあいのなかで、草太が知った三銃士と呼ばれるものの姿だった。
草太は、きっ、とグレーテルをにらむ。
「……〝封印の鍵〟を奪われ無力となりながら、よくそんな目ができる」
「僕は、そんなのに頼って生きてきたんじゃない。……そんなものなくても、僕も戦える」
思いがけない反抗、だがグレーテルの冷徹な面（おもて）はゆるがない。
草太は言葉を続ける。剣の技も、魔法を唱える術もない自分にできる、これが、戦いだ。
いまここで、なにがあってもりんごは自分が守ること。それから、
「赤ずきんと白雪は。ふたりは。三銃士は、きっとここにくるよ。――生きて、くる」
ふたりを信じること。
さらに草太は重ねていった。グレーテルの人形のような瞳を見つめ、口が自然にいっていた。
「僕らが、君のことも助けてみせる」
ぴく、と向けられている刃先がゆれた。彼女のなかで無視できない火種が弾けたように。

6

そして時間はさかのぼる。草太がこの空間に運ばれて、まだ目覚める前。

果てなく広がる森のいずこか、湿った地面の上で、くぐもった呻きがあがった。

「ん、んんっ……、あっ？」

意識が戻るなり赤ずきんは、がばっと身を起こす。鈴風家の庭から、上空へと落下していくような奇妙で不快な浮遊感のなか、気を失っていたのだと思いだす。周囲で、ざわざわと不安を煽るように木々がざわめいていた。ここは森のなかだ。

あのとき庭から見上げた、逆さまの森。しかし、いま体が天地逆になっている気はしない。

……失神する前、なにをしていたのだったか。自分も含めて視界に映るものが次々と浮かびあがっていくなか、必死に草太とりんごに向かって宙を泳ぎ、手を伸ばしたのだ。けれど、届かなかった。叫ぶようにふたりの名を口にし、赤ずきんは跳び起きた。

きょろきょろ周囲を見回すが誰の姿もない。ひとりきりだ。辺りは木々が密生し、見晴らしもよくなかった。上空へ顔を向ける。一面の暗雲で、太陽どころか月も星も見えない。暗雲の向こうに鈴風家があるあの街が見えるのかも定かではない。

そんな見ためだけでなく、ここが異質な場所であることは、目覚めてすぐに肌で感じた。異

質で、危険な場所。赤ずきんの目には森の景色が映っているが、肌で感じるここはいかなる生命も存在しない死の世界だといわれたほうが、よほど納得できた。

「草太く～～ん！　りんごちゃ～～ん！　……あ、それから白雪～～っ！」

うっかり忘れていた名前も加え、遠くまで届く大声で呼びかけてみるが返事はない。白雪姫には〝四つ葉騎士章〟を介した念話も送ってみるが、なにも返ってこない。しかしそれは相手に問題があるというより、この場所のせいだ。どうやらこの世界は精霊がいっさい存在せず、精霊力を利用して念を飛ばし交信する〝念話〟が不可能なのは当然だった。

エルデどころではない、ここではおそらくスレイプニルは一発も撃てないだろう。

感覚的にはがらんどうにしか思えない、こんな空虚な世界になぜ森が存在しているのか。

いや、なぜこの世界は森の姿をしているのか？

そんな、世界の有りさまを改変してしまうほどの力など、ひとつしかない。

（〝封印の鍵〟――）

「……ううん、でも、まずふたりを助けないと……っ」

現在位置も方位もさっぱりなので、ともかく赤ずきんはでたらめに歩きだした。

そして、三分も歩かないうちに草太の姿を見つけた。

「――草太くんっ?」
草太は一本の木の根元に、幹にもたれて眠るように目を閉じていた。りんごの姿はない。白雪姫も。それでも幸運というべきだろう。てっきりあのグレーテルという少女のもとに囚われているのではと、考えていたところだ。
赤ずきんは駆けよって草太の体を何度かゆすった。安らかな寝息がくり返されるばかりで起きる様子はなかった。ほっと赤ずきんは安堵した。とりあえず外傷はないようだし、あの短刀は少なくとも草太の生命は奪わなかったということだ。
「草太くん、ごめんね」と断って赤ずきんはその頬を叩いた。うっすらと目が開いた。
ぱちぱちとまばたきをくり返し、ぼやけた焦点が徐々に合っていき、小さな声で呟いた。
「赤、ずきん……?」
「うん、そう、赤ずきんだよ~☆　どこか具合の悪いところない?　草太くん」
赤ずきんは草太を安心させるため、ことさら朗らかにいった。
「ああ、えっと、だいじょうぶ。平気だよ。ここは――あの空に見えた、森なのかな」
とまどいぎみに応えた草太に、赤ずきんはうなずく。あのとき草太は、意識があるかどうか微妙な様子だったが、ちゃんと覚えているらしい。まだ若干、夢みているようだった草太の目が、ふいに見開かれた。
「りんごはっ?　それに白雪も……っ」

「ふたりともいないの。白雪がりんごちゃんを見つけてればいいんだけど」
そんな！　と草太はあわてて立ちあがる。赤ずきんは気が急いている草太に、自分もそのつもりだから焦らないでほしい、と何度も伝えたが、草太は「そんなの無理だ」と同じだけ反論してきた。気持ちはわかる。けれど。赤ずきんは恐いくらい真剣な顔で告げた。
「ここはエルデでもファンダヴェーレでもない世界だから、慎重にならないと」
ふたりは並んで森のなかを歩く。慎重に、けれどやっぱり、方角はでたらめに。
「どちらでもない世界、そんなのがあったんだ……、へえ」
「うーん、と、これはファンダヴェーレでもあんまり知られてない知識なんだけど」
隣を歩く草太が、こっちを見てくる。詳細を期待されている。
けして勉学に熱心ではない赤ずきんが知っているのは、白雪姫から聞いたことがあるからだ。
あるとき、ファンダヴェーレの王城の白雪姫の部屋で、彼女とクッキーでお茶しながら。
――ところでファンダヴェーレとエルデ以外にも世界が存在するって、知ってました？
――んーん。だって、そんな話聞いたことないよ。作り話なんじゃないのー？
――では、いまいったふたつの世界が、元はひとつだったという話は？
バカにするな、とうなずいた赤ずきんに白雪姫は、まん丸なクッキーを一ヶ見せた。

——さて、それでは分かれる前の世界を、この一個のクッキーだとしますわね。……そして。
それをまん中から、ぱきん、と割ってみせた。
——ちょっとした〝謎かけ(リドル)〟ですわ。これでクッキーは何個になったでしょう？
——そんなの簡単、二個だよー。破片がふたつ。片っぽくれるの？　わーい、ありがとうっ。
——大はずれ～☆　この謎かけが解ければ、世界はふたつじゃない、の意味もわかりますわ。
——ええーっ、わかんない、わかんない、説明してよ～。
あっさり考えるのを放棄して、その後なんと解説してもらったのか。
(たしか、ふたつに割ったときに、断面からこぼれるクッキーの粉が、どうとかって……)
首をひねっていた赤ずきんは、そうだ、と、ぽんっと手を打った。
「クッキーを割るときは粉がこぼれるから、受け皿を用意しないとダメなんだよね！」
「あ、うん、そうだよね」
「…………………あれれ？」
惜しいところまでは行ったのだ、惜しいところまでは。赤ずきんはどこで間違えたかと、しきりと首をかしげる。だから、そっと草太が森の暗がりへと顔をそむけて、世にも醜い形相となり、小声で吐き捨てたのには気づかなかった。
『話合わせるの苦労するぜ。思わず、素でツッコミかけちまっタ』

ふたりは歩く。ときおり草太は「ひとの声がした」といって、赤ずきんを導いた。

「あ、森がとぎれたみたい」

赤ずきんは呟いた。そこは森のなかにいきなり現れた木々の生えてない芝だけの広場だった。天然とは思えない短い芝の地面が、きれな円形に広がっている。広場をぐるりと囲んでいる木々は、まるで背の高い柵のように見えた。そのせいか、檻みたいだ。

「……おかしいなぁ、たしかにこの辺から誰かの声がしたんだけど」

草太は首をひねっていた。周囲を見晴るかすように広場のまん中まで歩いていく。

赤ずきんもあとに続きながら「ね、草太くん」と呼びかけた。

「え、なにかな?」

「わたしも耳はいいけど、なにも聞こえなかったよ? 気のせいじゃないかなぁ」

「うーん……、そんなことないと思うけど」

広場の中央に立ち、草太は腕組みをした。檻みたい、とは思ったけれど、これまで鬱蒼(うっそう)とした木々を縫って歩いてきたことを考えると、赤ずきんは解放感を覚え、ほっと吐息をついた。

ゆるやかとはいえ風も感じる。乾いた、冷たい風。

どうしよう、と思う。草太には悪いのだが、やはり自分が仕切る必要がありそうだった。

「……っっ?」

ふと草太が真向かいに立って赤ずきんを見てきた。赤ずきんは、きょとんっと首をかしげる。
「ほら、肩にケムシが」
「――えっ？」左肩に目を向ける赤ずきん。
「そっちじゃなくて、右の、ああ、もう背中に回っちゃったみたい」
首をねじる赤ずきんだが、背中までは見えない。
「服のなかに入ると危ないよ。背中、こっち向けて。とってあげる」
「あ、うんっ、おねがい」
赤ずきんは素直にうなずき、くるんと背中を向けた。「わ、いるいる」といって草太は右手を持ちあげた。その手首から先が、狐色に焼けた素朴なクッキーの質感に変じる。「すぐ済むからじっとしてて」と草太はいって軽く手首をひねる。と、手首から先が音もなく、熱された飴のように形を変えて、質感も変わって、重量感のある鉄製のハンマーと化した。
「よし……」と草太は優しい表情と声でいって、目の奥だけで嫌らしく笑い、ハンマー化した右手を大きく後ろへ引き、
「ははっ。それじゃあ、いま、殺ってあげ――」
濁点突きの「るっっ!?」という声があがった。なぜ自分がそんな変な声をあげたのか、わからないという顔で草太は、何度もまばたきする。まだ人間のままの左手を動かしてぺたぺたと顔にふれる。顎から頭頂へかけて、すらりとした真白い刃が芸術的な鋭さで突き抜けていた。

草太は不思議そうな顔をして左手でその刃にふれる。

つつ、と指先で顎から刃をたどると、赤ずきんの右の脇下から突き出ているとわかった。

「ね、草太くん……」

「あえ」なに、といおうとしたが口が動かず、奇妙な音しかでなかった。

背中を向けたまま、赤ずきんは続ける。

「草太くん、草とか花とか動物とか虫とか、生きてるものはなんでも好きだけど、でも、」

「ひゅひ」うん、といおうとした。

「小さいころ刺されてから、ケムシだけは苦手だっていってたよ――」

ね、というと同時に赤ずきんは草太の顎からグリムテイラーを引き抜き、さらに同時にその場で急速旋回、そのときすでに抜き放っているもう片方のグリムテイラーでハンマー化していた草太の右手を下から斬り飛ばす。しかし痛みを感じていないように平然と芝をけり、草太は――、草太だったものは後方へ跳んで距離をとろうとした。

『げひゃひゃひゃひゃひゃ！　ちっ、せっかくここまで上手く騙せたのにヨ！　ひゃは！』

草太の姿が、一瞬でのっぺりした等身大の人型クッキーになり、次の一瞬でそれが二倍ほどの大きさにふくれあがり、てかてか黒光りする体表と、両のこめかみから一対の角が伸びる山羊の頭と、コウモリの翼を備えた黒の魔物へと姿を変えた。それは、まさしく宗教画にしばしば描かれる〝悪魔〟も同然の姿だった。恐ろしい姿だ。

グレーテル、最新のモンスタークッキー〝山羊頭（ゴートヘッド）〟。
だからどうした、といわんばかりの無造作さで、赤ずきんは〝山羊頭〟へと特攻をかけた。
「うまくなんか騙せてないよ」
いっそ低く押しころした声。回避という言葉を忘れたような愚直な突進に、〝山羊頭〟は哄笑をあげてガラ空きの赤ずきんの頭、それを覆っている脆弱（ぜいじゃく）そうな革兜に『食らエ、〝サバト・ダンス・クロー〟‼』とマイネーミングの必殺技を放った。とはいえ、やってることは鈎爪の生えた手で思いっきり攻撃するだけである。
――遅すぎ。そんな攻撃当たるの待ってたら、あくびが出ちゃうってば。
『あ
れ？』
空中で何等分に
も輪切りにされ
た〝山羊頭〟の
体が一段ずつズ
レて芝の地面に
落ちた――。
どさどさっという落下音の重なりを背中で聞いて、赤ずきんは着地する。

うまく騙せてなんかない。わかってしまえば、なんでここまで偽物だと気づかなかったのか、自分を殴り飛ばしたくなるほど杜撰な化けようだった。なのに、まんまと敵の卑劣な策に引っかかってしまったことが悔しい。

草太の姿をしたものを斬らなければならないなんて。

……そういえばあれもだ、と赤ずきんは思う。

鈴風家の庭で、戦闘をくり広げた魔物のなかから、りんごの姿が現れたのを見たとき。

あのとき受けた嫌な感覚も、いまだ澱のように胸のなかに残っている。

『げひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！　うしゃしゃしゃしゃしゃしゃしゃ！』

背後からの汚い笑い声にふり向くと、黒い表皮から狐色のクッキーの質感へと戻り、ぼろぼろと崩れる〝山羊頭〟が、滅びながらも勝ち誇った声をあげていた。

『オレを倒したくらいでよろこんでじゃねーゾ。しょせん、オレはここまでの案内役でしかねーんだからナァ。ほれ、よぉーく耳をすませてみろヨ。聞こえてくんだロ？　押しよせてくる闇の軍勢の行軍がヨォ！　ギャハハハハハ……ハハッ……ハ……』

赤ずきんは、しゃんっと双剣グリムテイラーの刃同士を涼やかにこすらせ、眼差しを鋭くして周囲へ目を配った。奴隷闘士を逃がさないための鉄柵のように広場を囲んでいる木々。その隙間、森の深奥の暗がりからその音が近づいてくる。ざわざわと、はじめはまばらで、小さく、遠く、数も少なく。それが徐々に合流し、ふくれあがり、大きく、近く、数も多く。


たった
それっぽっち?
ドドドドドドドドドド

そして、

ど、ど、どど、どどど、どどどどど！　と木々を押し倒し、へし折りながら、それは現れた。

まさしく闇の軍勢――。

赤ずきんは片足の踵を支点に、とんっ、とその場で軽やかに一回転した。ふわり、と上下に分かれた赤のローブがひるがえる。赤ずきんはその一周で、広場の外周を埋めつくす、まるで円形闘技場(コロシアム)の観客席に詰めかけたような魔物の群れを、一度に視野に収め記憶した。……その魔物たちはぜんぶがぜんぶ、あの〝山羊頭〟だった。

一匹、一匹はたいしたことはないかもしれない。

ただし、

（りんごちゃんや草太くんを利用された！　わたしの大切な人たちなのに！）

ただし、その数、およそ四百体!!

ちょん、とグリムテイラーの柄を握ったまま人差し指で革兜の前をおろし。

眼差しを隠すようにして、赤ずきんは口だけで笑った。次いであごをあげ、革兜の下から両目を覗かせ、四百体の魔物を挑発的に見下ろす。

その両目は、白雪姫が見れば悲鳴をあげて逃げだす例のアレだった。そして、いった。

「――なんだ、たったそれっぽっち？」

ただし……、その数、およそ三百体!!

7

「いくらなんでも多すぎですわ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っっ!!!!」

かたや、白雪姫はしごく常識的な声をあげていた。

これでも、赤ずきんを囲んだ敵の数より百体も少ないとは知らずに。ここまで至った経緯は、ほぼ赤ずきんと同じである。目覚め、仲間の姿を求めて歩きだし、すぐに草太を見つけて、彼に導かれるようにし、この広場へと足を踏み入れた。

天然とは思えない短い芝の地面の、木々の檻に囲まれた公開処刑場のような、正方形の広場。

——そういえばふたりきりだね、白雪。さ、もっとこっちへ、ふふ……。

——そっ草太さまは、そんな嫌らしい目をしませんわっ!!

と、光輪キルクイトゥスから放った氷弾(ひょうだん)の魔法で、〝山羊頭〟を粉砕した。

そこへ闇の軍勢が姿を現し、襲撃してきたのである。それはまさしく四方八方から黒々とした津波が押しよせてくるさまにも見えた。なまじ敵の集団が黒光りする体表をしているせいか、白雪姫は自分が角砂糖になって、蟻の大群に群がられているような錯覚さえ起こした。

（それは、まあ、わたくしの容姿はとっても〝すうぃーと〟ですけれどっ）
そんな軽口を心に浮かべていられたのも、戦闘がはじまって二分が経過するころまでだった。なにせ三百体だ。それが広場の中央付近に位置する白雪姫に、ひっきりなしに、休むことなく飛びかかってくる。前後左右のみならず、羽が生えているため上空からも。
「氷弾！　氷弾！　氷弾！　氷弾！　氷弾！　ひょうたん――、じゃなくって氷弾っっ‼」
あまりに連続で早口言葉のごとく氷弾ばかり発動させるせいで、ときおり噛みかける。〝山羊頭〟の鈎爪が空を薙ぐ音ばかりが耳に届く、殺戮（さつりく）の黒い嵐のなか――、ひょいと頭を下げる、風のように体を右へ投げる、休む間もなく左へ、後ろへ、ころんと芝の上を前転、視界の外から襲いくる一撃すらもギリギリでかわす。
きわどい近接戦闘には不向きなしとやかなロングドレスの裾を、ひらりひらりと踊らせながら光輪をふる。何度も、何度も。そのたびに、ばきゅ、ばきゅんっ、と鉄より固く凍結した氷の弾丸が放たれ、群がる〝山羊頭〟の一体、一体を吹っ飛ばす。すでに何体、いや何十体倒したのかもわからなくなっている。
なのに、数が減っているようには感じられない。
頭の片隅で、白雪姫はこんな単体攻撃魔法では埒（らち）があかない、と冷静に戦況を分析している。
戦士が盾となって時間を稼いでいる間に、長い呪文を唱えて強力な魔法を放ち、敵の集団を全滅させる。それが魔法使いの戦闘セオリーだ。けれど、こんな状況では広域攻撃魔法の呪文

を唱えている余裕など、どこを探しても転がっていやしない。
(こ、こっ、このままではジリ貧ですわっ)
じわりと足下に絶望感が這いより、癇癪を起こしたように白雪姫がブンブン腕をふったとき。
「もぉぉ〜っっ、氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷弾氷だぴょッ!?」
集中力の乱れからか舌がすべり、ガチンと思いきり噛んでしまった。
口内に激痛が走る。さらにそのせいで体のバランスが崩れ、むぎゅう、と自分の右足がドレスの裾を踏んづけた。こける。こけるしかない。背中から、みごとに真後ろにひっくり返ってしまった。
仰向けにされたカエルみたいな格好になった。そして上向いた白雪姫の視界が、待ってましたとばかりに突きだされた無数の〝山羊頭〟の顔面で埋まる。闇に包まれる。
数えきれない空腹そうな眼光に見下ろされ、ひぃ、と白雪姫の喉からねじれた悲鳴がもれた。
テンパった脳裏に、テンパった言葉が浮かぶ。
(そそそ、それはまあ、わたくしの体はとっても〝すうぃーと〟でしょうけれど――っ!?)
『はっ、そのまま食われちまう気か?　白雪』
まるで、白雪姫の心を読んだような声が魔物の壁の向こうからした。と同時に、ごんっ！
ごかっ！　と硬いものを砕く音が連続して聞こえ、続けて〝山羊頭〟と白雪姫の間に青灰色の突風が強引に割りこみ、高く咆吼をあげ、めくるめく破壊の嵐となる。
口々に混乱した怒声をあげ、ざざざっと〝山羊頭〟たちが一斉に飛びのいた。

黒々とした輪が広がり、その中心の白雪姫の回りにだけ静かな空気が流れる。
そして後頭部に痛みを覚えながら、もそっと身を起こした白雪姫は間近に見た。その、姿を。
「――ひゃふ！（ヴァル）」
『ふん、こういうときはちゃんと呼べ。じゃないと、締まらないだろうが』
舌を噛んで呂律の回らない白雪姫に尻を向けて四つ足で立ち、首をねじ曲げて見返してきた青灰色の毛並みのゲジゲジ眉をしたオオカミは、気難しそうな顔で『ニヤリ』と牙を剥いて笑った。白雪姫の顔にみるみる歓喜が広がり、しかし、ふいに不思議そうな顔をする。
こほっ、と咳払いし、舌の痛みをこらえていう。
「で、でも、どうしてですの」
『おまえらに、けっ飛ばされて庭に出たおかげでな。己もここに連れてこられたんだよ』
「いえ……、そうではなくて」
いま、白雪姫の目の前にいるヴァルは、ヌイグルミではない。当然、着ぐるみでもない。
正真正銘の生きているオオカミだ。どこにも縫い目も〝水洗い禁止〟のタグも付いていない。
『白雪の考えが当たったってことだろうが。そのつもりで、己を草太に預けたんだろ？』
「あっ」
――肌身離さず持っていてほしいですわ、少々、見てくれはよくないですけれど。
『どんな厄介な呪いでも解いちまう切り札が、一個だけあるよな。己たちには』

思いだす。あのとき草太が庭で放った〝封印の鍵〟の力。それを浴びたヴァルの体から呪いの作用が消えたことは十分考えられる。ええ、そうですの、と白雪姫はうなずく。ただし、それは賭けだった。それも、けして赤ずきんにはいえない類の賭け。

〝封印の鍵〟は草太の、あるいは草太の身近なものの危機に発動することが多いのだから。

それを期待しての賭けなど、赤ずきんにいえたはずもない。

『悪いな、おまえだって本当はそんな乗り気じゃなかったんだろ』

いえ、と白雪姫は上品に微笑んだ。

「知りませんの？　こう見えてもわたくし、酸いも甘いも噛みわけた大魔法使いですから☆」

ふん、と鼻を鳴らしてヴァルは頭をめぐらせ、新たに現れたオオカミの実力を見計るように、じりじりと包囲を狭めてくる〝山羊頭〟たちを睥睨(へいげい)した。ぐるるるる……！　と低く物騒な唸り声をあげて威嚇する。

『よう、白雪。……的当ての玉にしてくれたことはチャラにしてやるよ』

あう、と呻く白雪姫。

『赤ずきんもガキどもの匂いも己の鼻は捉えている。とっとと、ここを突破して合流するぞ』

がっがっとヴァルは短い芝の地面に爪を立て、全身のバネを利かすために体勢を低くする。

だから――、と不敵に笑って。

ヴァルは地面をけり、白雪姫を中心とした円を描くように駆けながら、ふれるものみな粉砕

する勢いで手当たりしだいに〝山羊頭〟に体当たりを食らわせ、爪をふるい、牙で引きちぎり、見るまに数を減らしていく。
『己が盾になってやる!! その間に、でっかい魔法でもなんでも唱えやがれ!!』
「あ? え、ええっ」
ヴァルの言葉にゆるんでいた気を引きしめ、白雪姫は、すっくと立ちあがった。光輪キルクイトゥスを眼前にかざし、目を閉じ、意識を高め、すばやく正確に長い呪文を唱えていく。光輪の輝きがその明度を増し、月が地面におりてきたような冴々とした冷たい光で広場の隅々までを照らす。〝山羊頭〟たちはその光景にとまどい動きを鈍くするが、そうする間にもヴァルの攻撃は休むことがない。牙と爪の猛威は、よりいっそうはげしさを増す。
はっ! とヴァルは高揚したような声をあげた。
『昔っから山羊とは気が合わなくてな。白雪っ、己がぜんぶ片付けても文句はいうなよ!』
「ふふ、いってくれますの、ヴァル。――けれど、そうはいきませんわ♪」
ふわりと極上の笑みを浮かべ、白雪姫は呪文を唱え終わり両手で優しく光輪を胸に抱くようにした。同時に、ふっ、と唐突に広場を占めていた光が失せる。いや、光は失せたのではなく白雪姫の頭上で拳大の小さな光球へと凝縮されていた。目に痛いほどまばゆい白色。猛然と立ちのぼる冷気。それは誰の目にも、そこに莫大な力が集まっているとわかる光景だった。
巻きこまれたくなければ自分のそばへ、という白雪姫の声にヴァルが風のようにしたがった。

〝山羊頭〟は、この短時間でその半数にまで数を減らされている。

「――それでは、みなさん？」

白雪姫が優雅に右手を持ちあげると同時に、カッ、と光球が弾けた。

そこからダムが決壊したようにあふれだした極低温の光の洪水は、広場に残ったおよそ百五十体の〝山羊頭〟を一飲みにし、残らず凍りつかせ、氷の彫像に変えてしまう。冷光は短い芝の地面も、ぐるりと周囲を囲んでいる木々も侵し、白雪姫とヴァル以外のすべてが巻きぞえを食らった。広場は一転して〝完全なる氷の世界〟となった。

そして仕上げとばかりに白雪姫は、人差し指と中指を唇にふれさせ、

ちゅっ、と軽やかに口づけを投げる。

「ごきげんようですわ☆」

パキィン――――。

それを合図に、すべての氷の彫像が涼やかな音色をたてて粉々に砕け散った。

破片がキラキラと宙を舞う。極寒の地となった広場で、白雪姫はうっとりとその光景を眺め、

「……ああ、すっとしましたわ」

と呟いた。その隣ではヴァルが、迷惑そうにブルッと背筋をふるわせていた。

8

——呼ばれている。

——呼ばれている。

——呼ばれている。

真夜中の森を少年と少女が歩いている。暗い、寒い、怖い、夜の森を。
びくびくと不安な表情を隠しもしない銀髪の少年と、涙をこらえ怒ったような顔になっている金髪の少女。ふたりともベッドから抜けだしたままの質素な寝巻き姿だ。辛うじて靴は履いている。でなければいまごろ、幼いふたりの足は傷だらけになっていただろう。
「……どうなっちゃったのかしら、村は」
「わからないよ。どこもかしも火ばっかりで……」
少年は悪夢をふり払うようにぎゅっと目をつむった。目のはしから涙のつぶがこぼれる。
覚えているのは一面の炎。——それは戦火。
以前から不穏な噂は流れていた。北の果て〝常闇の地〟にて魔族の大軍団が結成されつつあ

ると。指揮するのは長き眠りより目覚めた魔女。けれどファンダヴェーレ西の辺境であるこの地まで戦禍が及ぶのは、仮にあったとしてもまだまだ先だと村の誰もが思っていた。
なのに今夜、辺境のさらに片隅にある小さな村は魔物に襲われた。
魔物の数は少なかった。それでも戦時に対するそなえなどなかった村は、あっけなく滅びた。
「…………」
ふたりは沈黙を保って歩き続ける。およそ頼りない農具を手に魔物からふたりをかばい、逃げるよう促した父と母がどうなったのか。そのことを話題にすることすら恐ろしかった。身を守る武器にでもする気なのか、少年は家から持ちだした藁ホウキを片手にさげている。けれど、それはいまにも切れそうな命綱にしがみついているようにしか見えなかった。
少年は空いているほうの手を隣を歩く少女の手にのばした。
少女を安心させるようにつながれた手。けれど、ふるえているのは少年の手のほうだった。
「ごめん、僕がもっと強かったら、父さんも母さんも」
——助けられたのに。
藁ホウキの柄を、ぎゅっと握って吐かれた少年の声に少女は応えない。応えられない。ふたりで腕相撲をしても少女が負けたことは一度もない。駆けっこをして負けたことも一度もない。少年のとりえは優しさだけで、でもそれで十分だと少女は思っていたけれど、いま少女は少年を傷つけない言葉を吐く自信がなかった。

いわないで。聞きたくない、そんな話。だって、お兄さまはなにもできなかったのだもの。幼い自分たちは無力で。どうしようもないくらい無力で。

地面に目を落として歩く少年の口がくり返す呟きは、彼自身を捉える茨の呪いのようだった。

「強くならなきゃ、強くならなきゃ、強くならなきゃ、強くならなきゃ、強くならなきゃ」

『――フ、弱さを憎むか？　少年よ』

森の奥から忽然と、ふたりの前に現れたその女性は、夜よりも暗く、闇よりも濃い、まったき暗黒をまとっていた。

『ならば、わたしとともにくるがいい。おまえに〝力〟を得る機会を与えてやろう』

呪わしい赤眼が少年を見つめた。自分が見られたわけではないのに、少女はその眼光に射殺されるかと思うほどの恐怖を感じた。逃げなくちゃ、このひとは怖いひとだ、魔物なんかよりもよっぽど怖いひとだ、だから逃げなくちゃ。

頭のなかで本能が叫んで、少年の手を少女が引くと、わずかな抵抗のあと、するりと抜けた。

少年が手をほどいたのだ。その手は、ふるえが止まっていた。

「連れていってください。どこへでも。僕は、力がほしい」

心底、驚いて少女は少年の横顔を見た。

「大丈夫だよグレーテル。僕は強くなりたいんだ。守るべきひとを、この手で守れるように」

そういって少年は少女に笑いかけた。だから、引きとめられなかった。

——それが、少女が最後に見た、少年の、いつもの優しい笑みだ。

ああ、あのときからふたりは、わたしは、あの夜の森のなかでずっとさまよい続けている。

つなぐべき手を見失い、無明の闇に囚われ、どこにも光を見いだせずに。

9

とぎれた意識が戻ってくる。一瞬、記憶が混乱し、自分がどこにいるのかわからなかった。
じん、とした痛みが右のこめかみに生まれていた。
……あれ、と草太は左頬にざらついた感触を覚える。うっすら目を開けるとぼやけた視界にこんがり焼けたクッキーの地面が入った。壁かと思った。そこに立っている漆黒のドレスから伸びた白い足首が見える。自分は横倒しになっているのだ。
すぐ後ろからわずかに浅い規則的な寝息が聞こえる。りんごの前で倒れている。
「わたしを助けるといったか？　鈴風草太、〝封印の鍵〟もなくした無力なおまえが」
無機質ななかに隠しきれない苛立ちが含まれた少女の声。グレーテルの声。
地面にひじを着いて身を起こしながら、草太は彼女を見た。グレーテルは曲刀《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》の刀身を肩にかつぐようにして、草太に柄尻を見せていた。あれで右

のこめかみを殴られ、地面に叩き伏せられたのだと頭では理解する。けれど。
感覚の、それだけでなく感情の大半がまだ、いまの一瞬にみた〝夢〟に引きずられていた。
痛々しい夢。いや夢じゃない、あれは記憶だ。自分のものじゃない、誰かの。
(グレーテルの――)
「起きろ、鈴風草太」
グレーテルが草太に歩みより、襟首を掴んで強引に起こした。少女の細腕とは思えない力で立たせられ、さらに数発、腹部を殴られる。草太の口から苦悶の息がもれる。グレーテルは草太の体を、食べ終わった果実の芯でも放るように真横へ投げだした。
地面に落ち二回三回と体が転がってからやっと止まってくれる。……そうか、と草太は思う。
――でも森は嫌い。とくに、夜の森は。
全身に広がる痛みのなか、理解する。この世界は、この森は、彼女の心を映している。
希望も、安らぎも飲みこむ、黒き森。
そしてグレーテルの記憶は映像だけではなく、そこにいた彼女の感情も伝えてくれた。
――あるところに女の子がいて、その子にはとっても大好きなひとがいて。
「悟れたか。弱さを。自分の手は誰かを助けるに、欠けらも役に立たないということを」
平坦な声に明らかな怒気が混ざっている。
「どうしようもなく無力だ。いっそ罪深いほどに」

「………そんなふうに、自分を責めちゃダメだ」
倒れたまま、掠れた声で吐かれた草太のその言葉は、刃となってグレーテルの胸をえぐった。
――ぴしり、とどこかから音が聞こえた。ガラスにひびが走るような音が。遠く、遠くから。
凍りついた仮面のような彼女の顔が、一瞬、泣きだす寸前のように歪む。
けれど、すぐにその表情は消えた。かわりに過剰なまでの感情が浮き上ってくる。
「舐めたことを」という声に殺意めいた苛烈さが宿っていた。投げ飛ばされた草太が離れてしまったグレーテルのすぐ前には、目を閉じ、仰向けに倒れているりんごの姿。曲刀の先が彼女の寝顔に向けて突きだされる。柔らかなうぶ毛が生える頬にふれるほど、近くへ。
刀身の根元の眼球が『食べていいの？　食べていいの？』と喜ぶようにキョロキョロと動く。
グレーテルがなにをしようとしているか、悟った草太は「やめるんだ……！」と叫ぶ。
「戯れごとをきく口を黙らせてやる。弱い、ということがどういうことか、思い知れ！」
グレーテルが曲刀をふりあげる。びし、びしりっ、と頂上部を切りとった四角錐の建造物の上空で空間に大きな亀裂が生まれる。草太は立ちあがり、ふらつく体をなんとかりんごの前に投げだそうと地面をける。泣くよりも辛そうな怒りの顔でグレーテルは刃をふりおろし、りんごの口から「草太、ごめんね……」と寝言がもれ、同時に青灰色の影が飛ぶように建造物の斜面を駆けあがってきて、その背中からさらに、カタパルトから撃ちだされるがごとく小柄な赤い影が宙を疾り、グレーテルとりんごの間に割りこんだ。

ふりおろされる曲刀の刃に、真下から上へとグリムテイラーの刃をふりあげ、叩きつける。
「――赤ずきん、それにヴァル!?」
クッキーの地面の継ぎ目に爪先をひっかけて、草太はりんごのずいぶん手前で転んだ。
ごろごろっ、と転がる草太の体。ぎいんっ、と甲高い音をたててぶつかりあう刃と刃。
「ち、生きて現れたか、三銃士！」
「とーぜんっ☆　最強コンビも復活だよっ!!」
まだ宙にある赤ずきんは、ふにっ、と笑ってみせる。グレーテルは即座に刃の目標を変えて、曲刀を引き、浮いている赤ずきんの胴を狙った。赤ずきんもまた、電光の剣さばきでそれをグリムテイラーで受けとめる。にぃ、とグレーテルの口もとが歪む。それを合図に曲刀の刃が不可視の力を弾けさせ、赤ずきんの体を吹き飛ばす。
鈴風家の庭での攻防の再現。壁に当たったゴム鞠(まり)のように跳ね返された赤ずきんの体は、建造物の頂の平地から投げだされるかに見えたが、彼女はグリムテイラーを地面に突きたてて制動をかけ、勢いを殺し、とんっと着地した。すぐにヴァルもそばに駆けよる。
草太の体は、ごろごろ転がって、りんごとグレーテルのそばで止まった。目が回っている。
頭をふりながら身を起こし、視界に入った三銃士のひとりとその相棒の姿に――そういえばいままでどこに行っていたのだろう？――、思わず声をあげかけて、首をかしげる。なんとなく現れるなら三銃士ふたりそろってと勝手に想像していたのだ。

『無事か、おまえたち！』
「う、うん、だいじょうぶだよ、ヴァル。……えと、白雪は？　いっしょじゃないの？」
『へ？』
赤ずきんはヴァルの背中を見やって「あ、ほんとだ！」と声をあげる。
「ちょっとヴァル、白雪は？　わたしの後ろに乗せてたのに」
『……。あ～』
ヴァルはきょろきょろと周囲を見回して、
『どっかで落っことしたかな』
ヴァルの後方、建造物の斜面のずっとずっと下のほうから、白雪姫の「わ、わ、わたくしはここですわ～～……」という弱々しい声が届いてきた。草太の口もとが、ふっとゆるむ。
グレーテルは、まず倒すべきは目障りな三銃士と決めたか、ばっとドレスの裾をひるがえらせて、体ごと赤ずきんとヴァルに向いた。血管の脈打つ刀身を見せつけるようにかざす。
「――〝封印の鍵〟を宿したこの曲刀には敵わないと、わかっていながら現れたのか？」
赤ずきんは地面に突きたつグリムテイラーを掴んでいた手を離し、掌に残る感触をたしかめるように、ぐーぱーをくり返す。そして、改めて地面からグリムテイラーを抜きとり、かまえ直した。ぴかぴかと明るいいなかに不敵な色を混ぜて、にこっと笑う。
「そんなことないみたいだよ、なんとかなりそう。ヴァルがいってたのが当たりみたい」

『──だろ』
軽口めいていた赤ずきんとヴァルの言葉に、グレーテルはぎりっと奥歯を噛み合わせた。
鋭く足を踏みだす。
その肩が背後から、立ちあがった草太によって引きとめられた。
「ダメだ、赤ずきん。君たちが戦っちゃいけない！」
「な、なにいってるの草太くんっ!!」
だっ、と駆けだしかけた赤ずきんとヴァルだが、機先を制して草太の首に当てられた曲刀の刃によって立ちどまらざるを得なかった。グレーテルは体を半身にして、顔はまだ赤ずきんに向けている。草太は考える。グレーテルが好きなひとは誰で、その人物の心をいま占めているのが誰なのか。……いつだったか、ヴァルが言っていた言葉。
──ヘンゼルの野郎は赤ずきんを宿敵だと認めてるらしくてな、そりゃあ執拗に──。
──憎くて憎くて憎くてしかたなかったのに、いつの間にかその女の子も、ちょっとは友達になってもいいかな、って。
〝友達〟、それは誰と誰のことなのか。
「赤ずきんっ、彼女は──、グレーテルは姫川さんなんだ！　あ、いや、姫川さんになりすましてたっていうか、えっと、ああもうっ、とにかく彼女は君がいっしょにごはんを食べて、君がいっしょにお風呂に入ったひとなんだよ！　……だから、戦っちゃいけないんだ」

草太の言葉に赤ずきんは面白いように「えええっ⁉」と目を丸くして驚いている。けれど、ふっと考えこむように細められた眼差しは、なにか思い当たるふしでもあるようだった。余計なことをいうな、と刺々しい声をあげ、グレーテルが鋭く髪をふり草太にふり返った。

斬りつけるような眼光を向けてくる。

——そうよね。正解。ただ困ったことに、その女の子はもう十分魅力的なのだけど。

草太は思う。あんな無垢な笑みができる彼女が、いま涙も流さずに泣いている、と。

なら、自分になにができる？　剣技も、魔法も、鋭い爪も牙も、〝封印の鍵〟もない自分に

——。

ふたりの眼差しが正面からぶつかる。グレーテルが氷点下の声を吐く。

「いいだろう、まずその口をふさいでやる。ちっぽけな命を食われて滅びろ、この森で！」

曲刀が食事を待ちかねたように刀身をふるわせ、赤ずきんとヴァルは、いま飛びこむべきかわずか一瞬だけ迷ってしまった。

（……あっ。あった。ひとつだけ）

グレーテルが曲刀をふりあげる。

怒りと困惑と、その奥に呪縛されている魂の痛みをにじませた紫眼(しがん)に、草太の姿が映される。

（グレーテル。僕は、君のいうとおり無力かもしれないけれど）

草太は勇気をもって彼女に右手を差しだした。グレーテルが曲刀を持っているのと同じ手を。

グレーテルが曲刀をふりおろす。
「あ、あ、ああああああああああああああああああああああ‼」
(君と、友達になることはできるんじゃないかって、思うんだ)
「ねえ、グレーテル。赤ずきんとだけじゃなくてさ、僕らみんなと友達になろうよ」

この右手は、戦うためじゃなくて、誰かと〝握手する(つながる)〟ために——。
それは草太だけでなく離れて見ている赤ずきんとヴァルにもわかった。その一瞬たしかにグレーテルの両目には正気の光が灯り、悲しみや痛みによるものではない涙がにじんだ。その一瞬グレーテルが浮かべた表情は、たしかに草太が自宅の縁側で見たあの無垢な笑みに、ちょっとすまなそうな、ちょっと照れたような色を混ぜた、愛らしい表情だった。
その一瞬たしかに曲刀をふりおろしたグレーテルの右腕は、止まるように見えた、はずだ。
あのとき引きとめられなかった手を、今度こそ掴もうとするように。
——ぶるんっ、とものすごい勢いで、大人しくしていた曲刀の柄から無数の神経糸が吐きだされ、ものすごい勢いでグレーテルの手首から腕全体へと絡みついた。またたく間にグレーテルの右腕の指揮権をのっとり、止まるどころか加速させて、まったく無防備だった草太の左の

鎖骨の上から体内深くに刃を潜りこませる。
曲刀にとって、たいしてタフでもない一般人の生命力など、半秒で食らいつくせる安い餌だ。
きょろりっ、と眼球を回してシンプルに歓喜の表現をする。笑う。
——と、その半秒のさらに半分という、ごく短時間が過ぎた時点で《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》の生物のような刀身に爆発的な変化が起きた。まるで、細いゴムチューブに一度に無理やり許容量以上の水を流しこんだようにブクリッと不格好にふくらんだのである。ありえないことだった。こんなのは常識で考えられるひとりの人間の生命力では——。
彼らしくもなく鋭い眼光をした草太が、刀身を素手で掴み、根元の眼球をにらみつけていた。まばゆい光をまとい、〝封印の鍵〟の力を発現させて‼
「グレーテルから離れろ」
彼らしくもなく低く押し殺した声で、短く言葉を発した。それだけで終わりだった。赤ずきんがいった『ヴァルのいったことが当たったたみたい』。赤ずきんと白雪姫を背負い、草太とりんごの匂いを追って森のなかを駆ける途中、ヴァルはいったのだ。あんな短刀で吸いだせるほど〝封印の鍵〟はちっぽけな存在じゃない、およそ放っておいても薄れて消える、カスほどしか奪われていないはずだ、と。
強制的に送りこまれた、楽勝で許容量オーバーの絶対的な力に、《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》は余裕で内側から弾け飛んだ。刀身と眼球と柄と右腕に絡みついていた神経糸が全

部まとめて小爆発を起こし、内部の肉片や臓器がばらまかれる。至近距離で煽りを食らったグレーテルが「きゃあっ」と短く悲鳴をあげて、その体を地面に投げだす。
あわてて草太は駆けより、抱き起こす。そして、この空間全体を支えていた力が消失し——。
世界の崩壊がはじまった。

10

「はあ、はあ、やっと追いつきましたわ。——草太さま、いまお助けしますのっ☆」
そう、白雪姫が頂上に顔をだしたと同時に。
「……あら？」

終幕

1

それは天からはじまった。
はてなく広がる森の上空をはしからはしまで占めている厚い暗雲。クッキーでできた四角錐の建造物の直上、はるかなる高みの一点から全方位へと、電光が閃くような速さで亀裂が走り、虚飾(きょしょく)の空が剥がれ落ちてくる。
精緻(せいち)に描かれた天井画が、叩き割られ、崩落してくるさまにも似ていた。
欠けた空の向こうにのぞくのは、もときたエルデの街ではない。
どんよりと赤黒くにごり、その澱みの色あいを刻々と移ろわせる、光すら飲みこむ底なし沼のごとき〝混沌(こんとん)〟である。ファンダヴェーレやエルデといった世界を島にたとえるなら、島々の浮かんでいる大海といっていいだろう。そして草太や赤ずきんたちがいる、この森の世界は、いま海底に沈んでいこうとしているのだ。

空間に走る深々とした亀裂は、やがて建造物の頂の平地から見渡せる黒き森にまでおよぶ。
立体であることが嘘のように、森を映す鏡面が砕かれていくような現実味のない光景だった。
砕けた森の巨大な断片は、大気を鳴動させ、大地をふるわせ、いずこともしれぬ赤黒い奈落へと落ちていく。ぽっかりと森が剥がれた、その奥に見える腐った血のような混沌は、いましも熱された溶岩が地表へ噴出しようとしているさまにも映った。
誰の目にもわかる、それはたしかに、ひとつの世界の終焉の姿だった。

そして草太と赤ずきんたちは――。

「……ねえ、まだ？　白雪まだ？　このままじゃ僕らも、巻きこまれちゃうよっ」
「そうだよ、白雪！　いそいでいそいでいそいで、早く早く早くっ！」
「わっ、わ、わかってますわ、草太さま、赤ずきんっ。そう急かさないでほしいですの！」
『おい、やばいぞ、ここまで亀裂が入りはじめた！　白雪、急げって！』
「だから、わかってるといってるんですの、ヴァル！　でも、この魔法は手間が……」
「もぉぉ～っ、とろい魔法使いね！　はあ、ちっとも使えやしないわ」
「こらあっ、あなたにいわれたくありませんわよ、グレーテルさん！」
「むにゃ……、白雪……、ちゃっちゃとやらないと、明日の夕ごはん抜きだゾ……」

「ああっ、寝言でりんごさんまで！　ひどいですわっ」
「白雪！」
「白雪～っ」
『白雪ッ』
「ダメ魔法使いっ！」
「むにゃ……雪」
「あああああああああっっ、もうっっ!!」
草太と赤ずきんたちは、そろって白雪姫をどやしつけていた。この世界から脱出するために。
脱出といっても、そこらの亀裂から出ていけばいいわけではない。それでは混沌に突入するだけだ。草太たちは、あの街に戻らなければいけない。そのためには、自分たちがここへと運ばれた〝路〟――世界同士をつなぐ穴というのが正確か――を逆にたどるしかなかった。一番手近で確実と思われたグレーテルと草太、りんごが通ってきた建造物上空の〝路〟は、すでに混沌に蝕まれ消失していた。
白雪姫が地図魔法で調べたところ、残っているのは、この建造物から南へ、はるか遠くにある一地点のみだった。赤ずきんと白雪姫が運ばれてきた〝路〟でもない。それは鈴風家の庭で偶然巻きこまれたヴァルが、この世界に落ちてきた場所だ。
走って間にあう距離ではない。みな子供とはいえ、ヴァルの背に五人も乗ることはできない。

そこで白雪姫が移動魔法〝雪の浮舟（スノウシューター）〟を使うことになったのだ。
呪文自体は、たいした長さではない。すぐに唱え終わった。光輪キルクイトゥスが畳二畳ぶんくらいに大きくなり、輪型から六角形に近い雪の結晶型へと変化する。透きとおる正六角形のそれぞれの角から、三叉銛（みつまたもり）のような突起が伸びた〝枝付き角板（えだつきかくばん）〟という形。五人と一匹がぎりぎり乗れる大きさだ。あとは動力源（ガソリン）となる魔力をそそぎ、貯めるだけ。
……これに時間がかかっている。
「きゃああっ、ちょっとダメ魔法使い！　もう足場が保たないわ、もたもたしないで！」
「フフッ。あらグレーテルさん、置いていかれたいんですの？」丸メガネ、きらーんっ。
宙に停泊する〝雪の浮舟〟に手をかざし続けている白雪姫は、身勝手といえばこれほど身勝手な言葉もないグレーテルの売り文句に、本気の冷たさで買い言葉を放った。完全なる買い手市場だった。グレーテルはすごすご大人しくひっこみ草太の背中に隠れるようにした。
すっかり〝甘えた〟な感じである。
グレーテルが赤ずきんを狙ってこの世界にきたこと。けれどあきらめて帰ろうと思ったこと。それがサンドリヨンによって精神を〝書き換え（カキマゼ）〟られ、この事態を引き起こしたこと。すべて、白雪姫の魔法発動を待っている間に、草太とグレーテル自身の口から語られていた。赤ずきんを狙った理由と帰ろうと思った経緯は、恥ずかしいのか伏せられたが。
「――はいっっ、これでいけますわ！」

どるるんっと船体をふるわせた〝雪の浮舟〟を示して白雪姫がいい、五人と一匹が――まだ寝ているりんごは草太と赤ずきんに抱えられて――、そこに飛び乗る。その重みに、ぐんっと船体が沈み、それと同時に隅々まで亀裂が走っていたクッキーの建造物が、砂の城が崩れるがごとく奈落へ落ちていった、黒き森の中央に巨大な空洞を生む。

赤黒い混沌をのぞかせたそれは、さながら大規模な火口だった。

〝雪の浮舟〟を空中で安定させ、ゆるやかに白雪姫は加速させていく。――一路、南へと。

2

「うう〜……、せ、狭いよーっ」

と赤ずきんが窮屈そうな不満をもらす。風を切って飛ぶ〝雪の浮舟〟の船上は『落ちたら地獄・大押しくらまんじゅう大会』の様相だった。配列は先頭に白雪姫とヴァル、その後ろでりんごが体を横に伸ばして寝こけ――夢の中で草太に謝ってすっきりしたのか、その寝顔は安らかなものだ――、最後列は右からグレーテル、草太、赤ずきんと並んで、後ろ向きに座り、船体の端を掴んで体を支えている。

グレーテルの髪が前へ引っぱられるように、はげしくなびいている。

船上から一望できる崩壊は、いまや森の中央にできた火口を中心として拡大しつつあった。

「すごい――」

遠ざかる情景に目をこらすグレーテルは、その一言を呟くことしかできない。
黒き森と暗雲と、なにもない空間までがひび割れ、砕け、世界が赤黒い混沌に侵されていく。
それは息をのむほどに恐ろしく、なのになぜか美しいとも感じてしまう悠大さだった。
「……よく見ておくんですの」
風にまぎれながらも、先頭から、はっきりと白雪姫の声が聞こえた。
「これが、自分の意志だけでないとはいえ、あなたの行いが招いた〝世界の最期〟ですわ」
——かつて世界はひとつだった。それが神の手でふたつに分けられファンダヴェーレとエルデが生まれたとき。分割される世界の間(はざま)からこぼれ落ち、どちらの世界にも属せず混沌の海をただようばかりとなった、世界ともいえない小さな泡のような空間が、いくつも生まれた。それはいまも、親をなくした孤児のように、混沌の海のどこかでさまよい続けている。
以前、学術書で読んだ知識を要約して白雪姫はみなに語って聞かせた。
『聞いたことあるぜ、泡沫世界(オルファン)ってやつだろ。しっかし、すげえ力だな〝封印の鍵〟は……』
ヴァルは眉をしかめて、そう声をもらした。呪いの短刀に奪われた〝封印の鍵〟の力は、氷山の一角にも満たない、ごくわずかなものでしかなかったはずだ。しかし、それでさえ、小さな一世界をエルデに呼びよせ、自在に改変させてしまうことができた。
「うん……」と、草太は神妙な顔で胸に片手を押しあて、うなずく。この身に宿っているという〝封印の鍵〟、もしその力が完全に解放されたなら、それはどれほどのものになるのだろう。

想像などできるはずもない。怖い、という感情すらわかない。とにかく実感がない。
「？　なにかな、あれ」
ふと思索に沈みかけた草太の意識は、赤ずきんの声に引き戻された。右隣に座る赤ずきんにならって、視線を前に向ける。左隣のグレーテルもそうしていた。じっと目をこらす。そして、三対の視線がガキッと音がするほど明らかに凍りついた。三人の視線の先には、周囲の森も飲みこんでどこまでも円周を広げる火口が口を開けている。なにもかもがその大穴へ、混沌へと沈んでいく、――すべてが落ちていくばかりの世界。
その世界のなかで、なにかが。
そう、〝なにか〟としかいいようのないものが火口の底から這いあがってこようとしていた。るおおおおおおおおおお、と咆吼とも思えない、ただ大規模な空気の振動を起こしながら。
「――白雪っ!!　なにか出てくるよっ!!」
赤ずきんの鋭い声にふり向いた白雪姫は、やはり音がするほど明らかに全身を硬直させた。一瞬、大きく〝雪の浮舟〟の操縦が乱れ、草太たちは空中に放りだされそうになる。あわてて、なんとか安定させるが、続けて発された白雪姫の声は安定からはほど遠かった。「あ、あ、あれは――ッッ？」といったきり絶句してしまう。
混沌の大穴から這いでてくるもの。それは見ためだけでいうなら、絡まりあう黒蛇（くろへび）だった。数はわからない。無数の蛇が絡まりあって一匹の大蛇をなしているような、そんな動きを見

せている。それと比べれば〝雪の浮舟〟などピンポン玉ほどの、いやそれ以下の大きさでしかなかった。そしてまた、よく観察すれば、それが黒色をしているのは天を覆っていた暗雲、地に広がっていた黒き森で体が構成されているからだとわかる。

白雪姫は、すでに顔を前へ向けている。だが、あんなもの一度見ただけで網膜に焼きついてしまっている。これから、たびたび夢にみてうなされるのではないかと思う。

「――世界の亡霊――」

寒々しく吐かれたその呟きを聞きとれたのは、すぐ隣のヴァルだけだった。滅びゆく世界を内包した大蛇は、どこにも目があるようには見えないのに、まるで鼻で憎き生者の匂いを嗅ぎわけたように草太たちへ向かって、頭部らしきものを旋回させた。そして。

るおおお
おお
おお
おお
おお
おお
おお
おお

おお
おお
その巨体がゆっくりと宙へ首をもたげ、天に虹をかけるような軌跡を描いて追ってきた。

「っきゃ――――――――――――――――――――――――――――――ッッ!?」

船上で一度に発された裏返った悲鳴が、誰と誰のものだったのか、把握できたものは誰ひとりとしていなかった。白雪姫とグレーテルは当然のこととして、草太も、ことによってはヴァルですら女々しい悲鳴をあげていたかもしれない。あくまで、かも、だが。

あまりに巨大すぎて速度はゆるやかに見えたが、その巨体はみるみる迫ってくる。間違いない。狙いは確実に、ここだ。体内に潜りこみ、暴れた異分子として滅ぼす気なのか。

「白雪！ まだ〝路〟につかないのっ？」

「ちょっと、もっと速度だしなさいよ！」

赤ずきんとグレーテルの言葉がぴったり重なり、白雪姫をパニックに陥れる。

「そっ、そんなことといわれても、空間がねじまがって、〝路〟がどんどん遠ざかっているんですの！ 大体、ただでさえ定員超過なんですから、これで全力ですわ～っっ!!」いってから、しまった、と口もとを押さえる。これだけは、絶対いうつもりはなかったのに。

即座に、跳ねるように立ちあがったのはグレーテルだった。ぐらり、と体をふらつかせる。
「――わかったわ、わたしがおりる。そうすれば、もっと速度がだせるのでしょう？」
「なっ、なにいってるんだよ！　グレーテル、危ないから座って！」
「ダメよ。だって、ここで責任をとるべき人物がいるとしたら、わたししかいないもの」
「そんなこと考えてはいけませんわ！　そんなつもりで、いったんではないんですの！」
「そうそう、そうだよ、グレーテル」
グレーテルに続いて立ちあがったのは赤ずきんだ。不安定な船上で危なげなく立っている。
ふにっと草太とグレーテル、ふたりに笑いかけて、
「グレーテルがおりたって、結局は、追いつかれちゃうもん。残るんなら、あのでっかいのを倒せる武器を持ってるひとが残らなくちゃ。で――、わたしには、とっておきの武器があるんだよね。どんなデカブツでも一発！　だから、おりるなら、わたし」
その瞬間、白雪姫が、ハッと息をのんだのに気づいたものがいたかどうか――。
この精霊力が存在しない空間では、銃型弓スレイプニルは一発も弾を撃てない。
「待って赤ずきん！　ダメだ、そんなの絶対ダメだよ！　帰るなら、僕らみんなでっ」
赤ずきんは、ふたりから視線をそらして〝雪の浮舟〟の後方へ向けた。そして朗らかにいう。
「話してる暇はないみたい。だいじょーぶ、あんなのちょちょいって、やっつけて帰るから」
でも、口ごもる草太だって、こんなときこそ〝封印の鍵〟の力を、と思ってはいた。

なのに、発現するときは草太の意志などおかまいなしのくせに、いざ使いたいと思うと、この胸の奥に眠っているという力は、うんともすんとも反応してくれない。……泣きたいくらい悔しかった。バカみたいにくり返すしかなかった。

「いや、ダメだ！　ダメだったら、ダメだったら、ダメだったら、ダメ――」

それからの赤ずきんの行動は本当に待ったなしだった。彼女は一瞬もためらわなかった。必死に左腕を掴んでくる草太の手首に軽く指をあてて、どこをどうしたのか必死に掴んで力をゆるめるはずもない草太の右手が、手品のように簡単に外れた。「じゃ、白雪、あとよろしくねっ」と、ちょっとお出かけしてくるみたいにいって、過重量でありながら懸命に速度をだそうとしている〝雪の浮舟〟の船上から、両足をそろえて、いっそ気軽に、ぴょんっと飛びおりた。あっという間に戦装束の小柄な体と〝雪の浮舟〟との距離が開いてく。

――ゴメン、わかってると思うけど。たぶん、時間は稼げない。だから、いそいで！

あとよろしくね、に重ねて彼女が瞳で伝えてきたものに、白雪姫はきつく下唇を噛む。その彼女の隣から、赤ずきんに続いて、ひらりとしなやかに宙を舞った影があった。青灰色の四つ足の影。予想はしていたし、止められるわけもなかったので、白雪姫はもう赤ずきんの言葉の途中から、彼を黙って行かせることに決めていた。――やっぱり行くんですの、と奇妙

に冷静に思っただけだ。それより考えかたを変えなくていけない。理知的に。
ふたつも重量が減ったのだ。
そのぶんだせる速度は、あのクッキーの建造物を離れてからずっと、まさに喉から手が出るほど欲しかったものだ。草太が、喉をつぶすかの勢いで赤ずきんとヴァルの名前を呼んでいる。急がなくてはいけない。彼が遠ざかるふたりの姿に気をとられている間に、急がなくてはいけない。ふたりのところへ戻れ、と命じることを思いだす前に。
白雪姫は、両掌をぎゅっと船体に押しあて強く念じる。最大速度‼　壊れるまで‼
ごうんっ、と空気の壁を殴りつけるようにして、〝雪の浮舟〟が大加速をはじめる。
草太とグレーテルとりんごと白雪姫を乗せた船体が、その形状を鋭角的に変化させ、南の果てで、いまにも消えかけていた〝路〟を突き抜け、満月と星々に照らしだされる紘車中学の上空に飛びだしたのは、それから一分三十秒後だった——。

3

いくつもの月のように鏡が浮かんでいる闇のなか、がしゃがしゃと音がしている。
〝滅びの魔女の城〟の〝鏡の間〟。それは、釣り鐘型の鳥カゴが内側からゆらされている音だ。
広間の床に無造作に転がされている、金属製の小さな鳥カゴ。
『にゃ〜〜、サンドリヨンしゃま、そろそろだしてほしいにゃあ……』

そこに入っているのは、本来の猫人姿ではなく四つ足の子猫姿のランダージョだ。ファンダヴェーレにあって必要ないその姿をしているのは、当然、自分の意志ではない。鳥カゴのなかに入る大きさに、外部からの力で強制的に変化させられていた。

『ちゃんと木ノ下りんごを利用するお手伝いもしたにゃー。いつまでもこんなのは酷いにゃ』

「さわがしいな、ランダージョ。また魂を抜かれたいか」

けだるげに玉座に腰かけ、遠くをみるように目を閉じていた大魔女サンドリヨンの唇が、ふいに剣呑な呟きをもらした。とたんに、びくっというように音がやむ。肘掛けに乗せていた片腕をゆるりと動かし、サンドリヨンはほんのわずかに人差し指をふった。

広間の床で、ぱんっっと弾けるような音がして、悲鳴とともに鳥カゴが奥へ転がっていく。

そして、ようやくまぶたを持ちあげてサンドリヨンは酷薄な笑みを浮かべた。

「――《ブレイド・オブ・ハーヴェスター》がどれほど使えるか、グレーテルは十分に役立ってくれた。正気に戻るとは予想外だったが……、三銃士のひとりを消せたなら第一の〝実験〟の成果としては上出来だろう」

鳥カゴが、――カシャンとなにかに当たって止まった。なにか、いや誰かの足に当たって。

すっとカゴ上部の金輪(かなわ)に温かみのある肌をした手が伸び、持ちあげられる。

鳥カゴをさげて、コツコツと闇のなかを玉座へと歩み、サンドリヨンの面前に姿を見せた。

鈴風草太たちのクラス2－A担任の泉先生だ。エルデの世界における、いかにも教職にある

人物のような地味めの服装が、この広間に場違いなこと甚だしい。しかしランダージョは、彼女が泉先生本人ではないことを、嫌というほど思い知っている。

『し、しかし、まさか泉先生に化けていたとは驚きにゃあ……。あの、本物はどうしたにゃ？』

「あら」

泉先生は、生徒からいい質問が出たときのようにうれしそうな顔をした。

「そうね、別に食べてしまってもよかったのだけれど——」

「戯れ言はいい、戻れ」

ぱちん、とサンドリヨンは指を鳴らした。ある程度の自意識を与えられているサンドリヨンの〝魔影〟は、泉先生の顔に『にたり』とハ虫類じみた笑みを浮かべてから、その全身をドロリと崩した。黒い粘液の塊となり、サンドリヨンの足下の影のなかへ戻っていく——。

いや〝魔影〟は、ふいにボコボコとその表面を泡立たせ、また別の姿をとりはじめた。ランダージョは鳥カゴからサンドリヨンの顔色をうかがう。わずかにいぶかしげな表情から、この変化が魔女の意でないことは明白だった。なにが起ころうとしているのか。

やがて〝魔影〟は変化を終えた。

『——やあ、ひとりぼっちの魔女』

サンドリヨンの面前で、人間の子供くらいの背丈をした、ぽっちゃり体型の茶色いクマのヌイグルミが、丸っこい右手を持ちあげて挨拶していた。黒いボタンを縫いつけてあるだけのよ

うな両目が、くりくりと玉座を見上げている。
サンドリヨンは玉座に座った姿勢は変えずに、ただ口もとに凄みのある微笑を浮かべた。
「そのくだらぬ物言い……フッ、フェレナンドか」
『そう。ちょっと君の影を借りて話しかけさせてもらっているよ』
ぴこぴこ、とクマのヌイグルミは両手を持ちあげてふった。表情にとぼしいので、いまいち、そこに込められた意図は不明だ。……フェレナンド？　とランダージョは呟く。まさか、あのファンダヴェーレ国王フェレナンドなのか。
もちろんこのクマのヌイグルミが本人の姿というわけではないのだろうが。
「どうした、三翼のひとつをもがれた泣き言でもいいにきたのか……？」
『まあ、そう。そのことだね』
「――〝滅びの化身〟に襲われた赤ずきんがどうなったか、見届ける前に、あの泡沫世界が消滅してしまったのは興ざめだったがな。逃げのびていようと同じだ。しかし、どのみち貴様の魔法といえど、混沌の海に落ちた存在は、見つけることも救うこともできまい」
するとクマのヌイグルミは胴の前で丸っこい両腕を交差させ、顔を下向けた。
『うーん、たしかに。そうなんだ。混沌に飲まれたあとじゃ、僕は、もうなにもできない』
が、右手を持ちあげ、ぴこぴことふる。どうやら〝ちっちっち〟とやっているつもりらしい。
『でもね、これだけはいっておくよ』

「フ、なんだ？　負けおしみか」
『ははっ、どうかな。僕がいいたいのはこういうことさ、――これでも、僕は赤ずきんのことを、それなりにきびしく躾けてきたつもりなんだ。僕の言いつけは必ず守るようにってね。そして彼女は、これまで僕の言いつけを破ったことは一度もないんだよ』
えっへん、とでもいうようにクマのヌイグルミは腰に両手を当てて、背を反らせた。
「なにがいいたい？」
『さあ？　ああそうそう、話はこれで終わりなんだけどね、大事な用事を忘れていたよ』
なにをする気だ？　とサンドリヨンが剣呑に目を細める。
『僕は揉めごとは嫌いだけど、〝お痛〟がすぎた君の影には、お仕置きしておかなきゃ』
それではごきげんよう、とでもいうようにクマのヌイグルミは右手を横にあげ礼儀正しく一礼した。かと思うとその体は、操り糸が切れたようにパタリと前のめりに床に倒れる。そして見るまに黒い粘液の塊へと戻り、次の瞬間バチッと全体から火花が飛びちり、塊は床にわずかな染みを残して完全に消滅した――。
けして派手な現象が起きたわけじゃない。けれど鳥カゴのなかのランダージョは、サンドリヨンの〝魔影〟を一瞬で消しさるのにどれほど強力な〝力〟がいるのか、少しはわかっているつもりだった。やはりフェレナンド国王は只者ではない、という思いを深くする。
「く――」

玉座からもれたかすかな、ごくかすかな苦悶の息にランダージョは視線をあげた。

サンドリヨンは心臓が痛むかのように胸を押さえ、わずかに背もたれから体を浮かせて前倒しにしていた。闇を溶かしこんだような漆黒の髪がこぼれ、その表情を隠している。だが、すぐにサンドリヨンは身を起こした。その顔を見てランダージョは息をのむ。

紫暗（しあん）の紅を引いた唇の右の口角から、つ、と一筋の蒼い血が流れていた。それを指先で拭い、

「くくく、フェレナンドめ、争い嫌いのあやつも相当腹に据えかねたようだな」

サンドリヨンは明らかな愉悦をたたえていった。わずかだが肩さえゆらして。

「仮に赤ずきんが生き残ってもかまわん。愉しみは、長く続いてくれたほうがいいからな」

ランダージョは、こんなにうれしそうな大魔女ははじめて見る、と思っていた。

4

そのときがくる。

＊　＊　＊

学校の明かりはすべて消えていた。

校庭横の東校舎の時計は十一時十分前を示していた。校舎の南、正門のある方角から車道を

走る乗用車のライトの明かりが届いていた。りんごはまだ眠っている。草太は校庭のまんなかで白雪姫の真向かいに立っていた。グレーテルは草太の右斜め後ろ。白雪姫が片手で胸に抱いている光輪は、あちこち欠けてボロボロになっていた。

騙しうちも同然だった。混乱している隙をつかれた。叫んで叫んで気がつくと校庭だった。

「戻ろう、いますぐ。まだ間にあうかもしれない。赤ずきんたちを助けに」

「無理ですわ。光輪は使いものになりませんし、そもそも、もう〝路〟は消えてますの」

「じゃあ、赤ずきんたちはっ！」

「仮に、あの巨大ななにかを倒せたとしても、戻ってこれませんわ」

白雪姫の返答はよどみがなく、草太はカッと感情が弾けるのを抑えようがない。草太は白雪姫に向かって一歩踏みだす。ふつうなら怒りに任せて相手の胸ぐらくらいは掴んでいる場面だ。けれど、草太はそんなことができるほど腕力をふるうのに慣れていない。しかも、それを見て白雪姫を責める気持ちは完全に失せた。

白雪姫の光輪を抱いていないほうの手は、ドレスのスカートをきつくきつく握っていた。

＊　＊　＊

そのときがくる。

＊　＊　＊

天も地もなかった。混沌の海があるだけだった。
赤ずきんとヴァルは水中をたゆたうように、ただそこに存在していた。体が常にふわふわゆらゆらしていて一定の姿勢を保つことができない。周囲に、あの森の世界の名残を感じさせるものは、なにひとつなかった。白雪姫が〝世界の亡霊〟と呼んだあのウネウネ、ウネウネして、とにかくただひたすらデカかった黒いやつもどこにもいない。
しょせんは赤ずきんとヴァルの最強コンビには敵わなかったのだ。というわけではなくて。
「まさか自滅しちゃうなんて。わたし、考えてもなかったよ」
『そか？　己はあると思ってたぜ。きわめて不安定な世界から生まれたバケモンだったしな』
「そこまで考えてついてきたの？　ヴァルって賢いね～。〝きわめて〟とかいっちゃって」
『……いうだろ、ふつうに。あのな、おまえが考えなさすぎるだけだ』
鋭いときは野生動物顔負けの勘のよさと、ファンダヴェーレ史上の名軍師そこのけの察しのよさを発揮する赤ずきんだが、スイッチがオフのときの彼女は、ほんとうに、どうしようもないくらいマイペースで、擬音でいうなら『ふにり』としている。そしていまはオンであるべき事態なのだ。しっかりしてくれ、とヴァルは思う。

草太くんたち無事に戻れたかな、と赤ずきんは呟く。自分の心配はまるきり忘れている顔で。

そのときがくる。

＊　＊　＊

＊　＊　＊

草太は思う。白雪姫は自分よりよほど赤ずきんとのつきあいが長いのだ。

校庭横の東校舎の時計は十一時七分前を示していた。校舎の南、正門から車道をこえた先にあるコンビニの明かりが届いていた。りんごはまだ眠っている。白雪姫はじっと俯いてスカートを掴んだ手をふるわせている。ふだんはあんなに積極的に接触してくるのに、こんなときはまるで草太にすがろうともしないで。

ああ、いつだったかりんごといっしょに見たTVドラマで、同じような状況があったはずだ。

あのとき主人公は、傷ついたヒロインになんといっていたっけ。

「…………お」

「…………？」

「………おれっ、おれ、の」
「……〝おれ〟?」草太の一人称が突然変わったので白雪姫が不思議そうにしている。
おれの胸で泣け、それがTVドラマのなかで発された主人公のセリフだ。辛いときにこんなこといわれたら、ころっといっちゃうな~、とりんごは頬を赤らめていっていた。わりとベタなセリフやシチュエーションに弱い乙女チック回路の持ち主らしい。
はたして、いうのか。草太は、世にも似合わないこの恥ずかしいセリフをいってしまうのか。
「し、白雪っ。……お、お、おれ、おれのむっ」
舌を嚙みそうになっている。――東校舎の時計は十一時五分前を示していた。

＊　＊　＊

そのときがくる。

＊　＊　＊

『ああ、白雪がうまくやっただろ。んなことより、己たちがどうするかだろーが』
「え、あそっか」

いわれて、はじめて気がついた顔で赤ずきんが、しぱしぱまばたきした。きょろきょろと周囲を見回すが、やがてがっくりと肩を落とす。同じように、どこかに脱出口のようなものがないか目を凝らしていたヴァルは、赤ずきんの様子に苛々っと眉間にしわをよせた。

『おい、あきらめるの早すぎ――』

「ああ、お腹へったなあ……」きゅるるるる～。

そっちかい、という感じだった。なにいってるんだ夕めし己のぶんまで食っただろうが、とヴァルが文句をいうと、だってだってすっごいいっぱい動いたんだよ？　と赤ずきんは反論する。ふたりは、ふんっとそっぽを向く。

ちょんっ。

ヴァルから顔をそむけた赤ずきんの鼻先に、ほどよい弾力を持ったものがふれた。？　と赤ずきんは眼前を飛ぶ羽虫を捕まえるように、ぱっとそれを宙で握りこむ。顔の前に拳をかかげ、そっと開いた。ほのかに透きとおったコンペイトウみたいな小さな果実。

――〝ポランポランの木〟の実！

腰帯にあの布袋を括りつけたまま忘れていた。空腹をまぎらす役には立つかと、手早く布袋を外す。布袋は生地が破れ、なかは空だった。思い当たるふしなど山のようにある。なにせ激戦続きだった。おいどうした、と横から声がかかるが返事をする前に、ともかく手のなかの一粒をなくしてしまおうと赤ずきんは口を開けた。

『おい待て、赤ずきん！』
「なによー、ヴァル。あげないからね」
『そうじゃねえ、なんでその実……〝光って〟んだ？』
え、と赤ずきんは口に入れかけていた実を視線の高さまで持ちあげ、見つめた。たしかにそれは、ほんのり温かみのある色合いで発光していた。〝ポランポランの木〟の〝実〟が光るなんて話は聞いたことがない。うーん、と赤ずきんが首をかしげたとき、ふたたびヴァルが『おい見ろ！』と声をあげた。今度はなんだと赤ずきんは顔を向ける。
向けた――、その先に、光。
最初はいくつかの光の点しか見えなかった。いま、赤ずきんの手のなかにあるものと同じ光。それが、ぽっ、ぽっ、ぽっ、ぽぽぽぽぽぽぽぽぽっと連鎖反応的に増えていって、光の点が幾何学模様めいたいくつもの輪をなし、どこまでもどこまでも連なって、伸びて、さながら光輪の長いトンネルとなった。光点の数はおよそ無数。あれがみんな〝ポランポランの木〟の実だとすれば、赤ずきんが布袋に入れて持ってきた数では全然足りない。庭の成木になっていた実を全部持ってきてやっと――、くらいだろうか。
そのとき、かさ、と赤ずきんの右手のこうに一枚の紙きれが流れてきて、ふれた。
掴まえ、眼前で広げる。よく知っている、丁寧で、温かみのある字体。

赤ずきんへ

きみの大好きな実がなる〝ポランポランの木〟の種を送るよ
上手に育てて　そちらの方々にもごちそうしてあげるように

フェレナンド

ぱあっと表情を明るくし、赤ずきんはすべてを理解した。
この奇跡の意味を。今朝、〝ポランポラン〟の木の種が届いた意味を。けっこう厳しいこともいう癖に、結局は、困っているひとのことは絶対、助けてしまう心優しきファンダヴェーレの国王。この奇跡が彼の手によるものなら、あの光輪トンネルの先にはエルデに通じる出口がある。必ず。絶対。
「……行かなきゃ！　だって、約束だもんねっ」
国王の言いつけ、それもある。けれど、それだけじゃなくて草太とも約束していた。
〝ポランポランの木〟の実は、食べかたにコツがいるから、ちゃんと教えてあげなくちゃ――。
行くよ、おうっ、と声を合わせ、赤ずきんとヴァルは混沌の海を泳ぎだしはじめた。
遠くまで続く光へと。あれだけあればお腹の足しにもなるかな、と少し思いながら。

そのときがくる。――では、はてさて、どこから？

＊　＊　＊

＊　＊　＊

――東校舎の時計が十一時ちょうどを示した。
そのとき、草太はなけなしの勇気と大いなる恥じらいをふり払って、ベタ臭い男らしいセリフを吐こうとしていた。白雪姫はいじらしくも慎ましく、同僚をなくした悲しみに耐える顔をして、たたずんでいた。
（いうんだ！　それが、いまぼくが白雪にできることなんだから……っ！）
草太の斜め後ろのグレーテルは、ちょっと、しらっとした顔をしていた。
ぐっ、と草太が近づき、あ……っと掠れた声をもらして白雪姫がうるんだ瞳をあげたとき。
光が、生まれた。それも清らかで爆発的で、なのに優しい光が。
それは白雪姫のスカートの内側からこぼれていた。まぶしさに草太が目を細める。そして。
ばさあっ！
「きゃあっ⁉」

「たっだいま――――――――――――――――――――――っっ‼」
青と白を基調とした、白雪姫のしとやかなドレスの、しとやかなロングスカートが、内側から盛大に跳ねあげられ、めくりあげられた。戦装束の小柄な少女と、青灰色の毛並みの大柄なオオカミの出現によって。
スカートの奥が、まったく不意打ちで目に飛びこんできたことに、草太は顔をまっ赤にする。
「あ、あ、赤ずきんっ⁉ それにヴァル……っ‼ な、なんで、そんな……」
ところから？ という疑問は言葉にならなかった。
それより早く赤ずきんはきょろきょろとして、視界に映る人物を、ひとりずつ指差していく。
「えーと草太くん。グレーテル。りんごちゃん……。？？？ あれ、白雪は？」
草太はちょんちょん、と指で突くしぐさをして地面にひざ立ちになっている赤ずきんの背後を示す。赤ずきんは、まだ頭と肩にかかっているスカートを邪魔そうに払って背後へふり返った。きらーん、というより『ギラーン！』と復讐鬼みたいな感じで光る丸メガネが、赤ずきんとヴァルを見下ろしていた。みるからに怒り心頭の様子だ。
どうやらドレスをまとっているときに肌を晒されるのは許せないらしい。
女心は難しい。……下着と水着の違い、みたいなものだろうか、と草太は思った。
「ふ～た～り～と～～もぉぉぉぉぉ？」
白雪姫は光輪キルクイトゥスをふりあげて――といっても光は失せ、あちこちボロボロ状態


うぅ…、あれは
わあぁ、すっごーい!


え!?
きゃああ!!

で魔法発動には使えないため――、ぽかぽか、ぽかぽか、と赤ずきんとヴァルの頭を叩きはじめた。なんでそんなことをされなきゃならないのか、いまいちわかっていないひとりと一匹は、頭を抱えて白雪姫のスカートから抜けだし、逃げまどう。

草太とグレーテルの回りをぐるぐると追いかけっこ。目で追うと目が回りそうだ。

「もうっ、もうっ、せっかくあとすこしで草太さまがわたくしに迫ってくれたというのに！」

ええっ、と草太は思う。いまの白雪姫のセリフは、あるひとつの事実を示していた。

「ちょっ、白雪っ、さっきのは演技だったの？」

「あったりまえですわ！　このふたりが殺して死ぬようなタマですか！」

むぅぅ～っっ、とふくれっ面になって白雪姫は追い続ける。ヴァルは『おい、なんで生還するなりこんなことになってんだ？』と不平をもらすが、赤ずきんは「でもでも、なんか、楽しいよね～～～♪」と呑気に、白雪姫の火に油をそそぐようなことをいっている。なんだかとり残されてしまった草太は、ぽりぽりと頬をかいた。

「でも、よかったわ。戻ってきてくれて。ね？」

すっと草太の横に並んだグレーテルがいう。うん、と草太は心からうなずいた。

非日常的な騒ぎに満ちた長い一日が、ようやくいつもの姿をとり戻してくれたような、そんな気さえした。帰ってきたんだ、と思う。みんな、そろって。

「あなた。さっき似合わないことしようとしてたから、ちょっとおかしかったけど」

草太の肩に軽く手を置いて、ふくみ笑いをする。しらっとしていたのは笑いをこらえていたからだった。あ、あれは、その、と思いだし羞恥から、草太の顔はまっ赤になった。スカートの奥が見えてしまったのとは、また違う種類の赤面だ。くすくすくす、とグレーテルは笑った。

そしてそんな、ちょっとイイ感じの空気を、いまの白雪姫が見逃すはずもなかった。

今度は、きらーん、でも、ギラーン、でもなく『きゅぴーん』という感じで復讐鬼ではなく、怪獣・教育ママゴンのごとく丸メガネを光らせる。

「そこっ、グレーテルっ。そんなに近づいて、なにする気なんですの？」

「なにって、こういうこと？」ちゅっ。わずかに草太に身をのりだすようにして、その頬に。

ぴしっ、と白雪姫の丸メガネにひびが走った。ちなみに白雪姫だって草太にはしたことない。

「あああああああああああああああああああああああああっっ!?」

と絶叫が走り、同時に草太の後ろで寝かされていたりんごが、ムクッと身を起こして、

「――こらあっ！　うるさくて眠れないゾ！」

寝ぼけ眼で貫禄の一喝を放った。効果はてきめんだった。校庭は一瞬で静まり返った。

起きたのかな？　と草太は思い。一体なにをどこから説明すればいいんだろう、とびくびくしながら背後へふり返る。上半身だけを、九十度きっかり曲げてきっちり身を起こしていたりんごは、じっとり半分閉じた目で草太のことを見ていた。おっかない。

今日こそはとんでもないことに巻きこんでしまった。きっと怒られる。ものすごく怒られる。

「……草太」
「う、うん」首をすくめ、覚悟を決めて、聞く。
「浮気は重罪だゾ」
「…………………………………………………………は？」
ぱたん。ぐー。
りんごは、また寝た。思いっきり寝ぼけていた。眠っていてくれるのは助かるけれど――。
でも、浮気って？　誰が？　誰と？　誰にとって？
思考の迷路に迷いこんだみたいな草太の隣で、グレーテルはいつまでも、くすくす、くすくす、と笑っていた。だが、やがて、なにかがふっきれたような顔で両腕を夜空にふりあげ、うーんっと伸びをする。ふうっ、と息を吐いてだらんと腕をおろし、いった。
「さって。わたしも、そろそろ行こうかしら」
「あ……」
草太はそれ以上、なにもいえなくなる。気軽な調子の言葉だったが、彼女の顔には迷いは無かった。「なんだか、いろいろ迷惑かけちゃったわ」と謝ってくるグレーテルに、つい草太は「あ、うん」とうなずいてしまう。一瞬きょとん、としてから、くすっと小さく笑った。
「嘘でも、友達になろうっていってくれたこと、うれしかったわ」
「嘘なんかじゃない、本当のことだよっ」

草太は心外そうにいったが、すぐにその言葉が照れ隠しの成分を含んでいることに気づいた。
「……それじゃ、元気で」どちらからともなくいった声が、重なる。
そしてグレーテルは草太の前から離れ白雪姫に歩みよりかけるが、
「んー、やっぱり、あなたは別にいいかしら」
と方向転換した。むかっ、と白雪姫もそっぽを向く。草太は苦笑するしかない。もしグレーテルが鈴風家に住むことになったら大変なことになっているところだった。グレーテルは次にヴァルに向かった。なにかのことを謝っているが、それがなんのことかわからない。ただヴァルは、そのことにはもうふれてくれるな、という顔をしていた。
そしてグレーテルは赤ずきんの前に立った。立ったけれど、なんの言葉も出ないようだった。
「――わたしたちも、もう友達だよねっ」
ごくシンプルに、たしかな確信を持って吐かれた言葉に、グレーテルは一瞬、くしゃりと幼子のように表情を崩した。けれど、すぐにその顔を端正な真顔へと変える。
「ええ、友達。……でも、次に会ったらまた敵よ。今度こそ、容赦しないわ」
「え～～」
ぷくーっと頬をふくらませる赤ずきんに、グレーテルはひらりと手をふった。「追ってこないでね、一応サンドリヨン軍の秘密の通路だから」といって、校庭から正門へ向かって歩いていく。鈴風家の庭の井戸のような場所がサンドリヨン軍側にもあるということなのだろう。グ

レーテルの背中が遠ざかり、見えなくなる。
赤ずきんがあごをあげて夜風の匂いを嗅ぐようにしている。
「……うん、風がやさしくなってる。草太くん、もう今日は争いは起きなそうだよっ」
終わったんだ、と草太は思う。本当に長かった、この一日が。

（おわったんだ――）

5

だから、つまりこれはかなり蛇足的なエピソードだ。たぶん。

翌朝、まだ起床時間を知らせるツインベル型の目覚まし時計が鳴りだす前のこと。昨夜の疲れもたまっている草太は、そんな時間に目覚めるはずがなかった。なのに目覚めた。カーテンの閉まった部屋は薄暗い。おまけに視界もぼやけている。
階下では、いつものようにりんごが朝食を作ってくれている音が聞こえてくる。
「う、うう……ん」
狭い、と思う。ベッドが狭いのだ。そして間近から自分のものじゃない寝息が聞こえてくる。すぐにわかった。白雪姫だ。この家に居候するようになってから、彼女は隙あらば草太のベッ

ドに潜りこんできた。そのたびにあわて、必死に説得することおよそ五日。一昨日からようやく安眠をとれるようになったのに。
（はぁぁぁ、困ったな白雪は……）
内心で長々と息を吐いて、さてどうしよう、と思う。まず、りんごに気づかれてはならない。自分自身に確認する。とにかく、それが最重要事項だ。
「って、わあぁぁ――――――――――――っっっ!?!?」
一秒後に、破られた。
それもしかたない。なぜなら、なぜなら、なぜなら、
「もう騒々しいわ、草太。ベッドで騒がしい男性は、女性に嫌われると決まっているのよ？」
向こうを向いていた顔がこっちを向くと同時に発される言葉。幼げでありながらもととのった顔立ちの、きめ細やかそうな頬を流れる金髪。見まちがえようがない、見まちがえようがない、見まちがえようがない！
「おはよう、草太。今日もよい天気ね」
「ぐっ、ぐっ、グレーテル!?」
「……うーん、名前を呼んでもらうのもうれしいけれど、朝の挨拶はやっぱり『おはよう』じゃないかしら」
「な、なんで君がここにっっ。かか帰るってっっ」

「ああ、あれは嘘だわ。そのほうが驚いてもらえるかと思ったの。どうだったかしら？」
どうだったかしら、ではない。死ぬほど驚いた。そして自分が、とんでもない過ちを犯してしまったことに、草太は気づく。だだだだ、と階下から階段を駆けあがってくる音がした。この状況はあまりに不味い。
「ちょ、ちょっとグレーテル、とにかくベッドから出て！」
「え？　いやよ、もう少し寝ていたいもの」
「や、だからそんなこといってる場合じゃ――」
草太はかけ布団をまくって身を起こし、なんとかグレーテルをベッドからだそうとする。しかしグレーテルは寒そうに草太の手から布団をとり返そうとする。それは寒いだろう。グレーテルの格好は、素肌が透けるほど薄い生地のネグリジェ姿だったのだ。
そうして、もうどうしようもなくいいわけのきかない状態になった、そのときに。
どばんっ、と扉がけり開けられ、
「草太っ、また白雪が――――っっ！　……え」
みそ汁を作っていたところか手にステンレスのお玉を持ったりんごが、絶妙な似合いっぷりの割烹着姿で現れた。たかがお玉というなかれ、あの半球状になった部分で、かつーんとやられるとかなり効くのである。
どうやっていいわけしよう、この状況を。そんなふうに草太が考えたとき、りんごは、

「草太……、そのひと、誰？」
と呟いた。そのとき草太の全身を襲った〝しまった〟感は並大抵ではなかった。そうだ、いいわけどころではない。そもそも昨日、黒き森に行ったことを覚えてさえもいないりんごはグレーテルの顔すら、知らないのだ。りんごから見ればこの状況は、見知らぬ金髪の（しかも薄い生地のネグリジェの！）少女と草太が、ベッドで戯（じゃ）れあっていたわけである。
「……もう、なんですの、眠れませんわ〜」
「ふにふに、おはよー、草太くんりんごちゃん。なんか、すごい大きな声だったね」
ふだんなら、こんな早い時間にはたとえ爆弾が落ちてこようと目覚めないはず、と思われる三銃士ふたりが、よりによって今朝は起きだして、わざわざ草太の部屋にまでやってきた。出入り口のドアに仁王立ちするりんごの左右の肩の上から、室内を覗きこんでくる。
そして、声が重なった。
「グレーテル!!」
そして三銃士ふたりの前に広がっているのも、草太と金髪の少女が楽しげに（以下略）。
草太の背中に、静かに、しかし力強く、ひとつの予感がのぼってきていた。
それは、
（ああ、今日はきっと昨日より長い一日になるんだろうな――）
というものだった。なんて恐ろしい予感なのだろう。

そして、昨日よりも長い一日の幕開けにふさわしく草太のベッドの上ではじまる、少年一、少女四という〝変則バトルロイヤル〟。日課の街の見回りに向かうため草太の部屋の前をとおりかかったヴァルは、投げやりに『おい、レフリーいるか？』と聞いたが返事がないので、呆れたように肩をすくめて、そのまま通りすぎていった。

そして、グレーテルは思っていた。草太の家にきた本当の理由。

まだ、草太にはいえない理由。……サンドリヨンの影によって精神改造を受けた自分は、草太によって正気をとり戻すことができた。それが、あの一言の力なのか、それともあれは小さなきっかけでしかなく、本当に解放されたのはそのあとの〝封印の鍵〟の力によってなのか、それはわからない。

わからないけれど、もしかしたら。

りんごと白雪姫に揉みくちゃにされている草太を見ながら、グレーテルは思っていた。

（あなたなら、お兄さまを、もとに戻せるかもしれない）

それは光だった。――夜の森をさまよい続ける幼いふたりを照らす、光。
ひと筋の。

（おわり）

おまけ・赤ずきんひと口話（あるいは蛇足の蛇足）

知られざる後日談、そのいち。

グレーテルに眠らされ、一方的に利用されていた姫川リサは、はたしてどうなっていたのか。

翌朝、彼女は、紘車中学の西校舎の裏庭の、もう何年も使われていない小さなプレハブ小屋のなかで目覚めた。呆然とした。自分の身になにが起きたのか？　制服のブラウスがボタンをかけ間違っていて、スカートが前後ろ逆になっていた。

一度脱がせて、あとであわただしく着せ直したみたいに。まさか。まさか、そんな！

ふらふらと目眩を感じながら、姫川はプレハブ小屋を出た。赤レンガの野菜畑とゴミ焼却炉。どこかからカタカタ音がしてくると思ったら、ゴミ焼却炉からだった。

おそるおそるフタを開けてみると、どうやってなかに入ったのか、あるいは入れたのか。

「ああん？　あんだよ、泉ちゃんじゃねーすか。んーで、んなとこはいってんの？　よぉ」

気がついたらいつのまにか〜、といまにも死にそうな声が返ってきた。

よくわからないが、自分はプレハブ小屋だっただけマシなのかも、と姫川は思った。

知られざる後日談、そのに。
当然、こんなことがあって授業なんか出ていられるかと、姫川はフケることにした。校門に向かうとひとりの女子生徒が立っていた。見覚えがあった。教室の隣の席からときおり変に熱っぽい目で見てくる生徒だ。妙なやつ。驚くことに（？）姫川のことを待っていた。
「あ、あ、あのっ。あのあのっ、昨日いってた、そのっ、あのっ、これっ、どうぞ……！」
と生徒はニンジン型の小さな消しゴムを差しだしてきた。もちろん姫川は、昨日、グレーテルが彼女に「どうぞ？　かわいい趣味ね」やら、「ええ。明日、ニンジン。素敵ね、ふふっ」なんて愛想笑いしていたことなど知らない。バカにされたと思った。
「ああん？　はあん？　ざッけんじゃねーよ。ッだんねーモンよこしてじゃねーッつーの！」
切れるだけメンチを切って、その消しゴムをばりぼり噛み砕いてから、吐き捨ててやった。
姫川リサは、やるときはやる自称〝ハンパねえ〟女だった。
その生徒、畑野ちよはガーンとなりながら（イジワルなところも素敵）と思っていた。
……たぶん、相性いいぞ、おまえら。

（本当のおわり）

あとがき

草太くんの冒険におつきあいいただき、ありがとうございました。

はじめまして霧海正悟です。ノベライズ稼業などを営んでおります。グリム童話で好きな話は『ラプンツェル』です。残念なことに本書には出てきておりません。本書表紙の返しにのっている著者略歴の文章がなんだか痛々しいことになっているのは、スケジュール押しまくりのド修羅場のなかで、テンパった頭のまま書かざるを得なかったからです。

本当の作者は、わりとおとなしい常識人です。穏健派です。…………本当です。

いや書いている内容に嘘はないのですが。

しかし、GASHINさんの落ちついたコメントとの対比が笑えるなあ、これ。

そんなわけで、本書はコナミ発フィギュアニメーション第一弾『おとぎ銃士赤ずきん』の、オリジナルエピソードによる小説版です。初見のかたも抵抗なく読めるよう、書いた、つもり、です！（↑必死）そうでなかったら、すみま、せん！（↑謝罪）

書いてて楽しかったキャラは、なにげにサンドリヨンさまとか。安楽椅子探偵ならぬ安楽椅子魔王っぷりが素敵だと思います。座るとき立ちあがるとき「……よっこいしょ」って小声でいう癖があってほしい（笑）。ちなみに、作中で魔女さまがいう〝シチュー〟に絡めた黒いセ

リフがあるのですが、実は、あれは某クレヨン王国（アニメ版）の某王女の某「脳みそくすぐっちゃうぞ」というセリフが元になっております。

そう考えると、なんだかかわいげも湧いてくるような——、いや、こないか。

ところで、主人公というより、お姫さま体質な草太くんに対して、赤ずきんばかりがカッコいいところを見せるので、「こ、これじゃグレーテルは草太じゃなくて赤ずきんに心が傾いちまうぞ」と執筆中、なんども冷汗をかきました。なんとか、それは回避できたと思っているのですが。いや、危なかった。とくに体育館とお風呂シーン（笑）。

おとぎ話。童話。メルヘンやらフェアリーテールというと、やや気恥ずかしさが増しますが、もとよりそういったものが好きな作者にとって、本書は楽しく書けたとと同時に、想像をこえる難産でもありました（過去に一度痛いめをみてますし～、といわないくてもいい古傷を告白してみたり）。そんな苦闘の証ともいえるこの作品が、読者のかたがたの有意義な暇つぶしに少しでも役だってくれたなら、これに勝る幸福はありません。

また、ノートPCのワープロソフト上で書かれたこの作品が、一冊の本となって書店に並ぶまでに関わる多くのかたがたへ。ご迷惑をかけた（かける？）ことに謝罪を、同時にいいつくせぬほどの感謝をささげます。——では読者のみなさまも、またの機会がありましたら、そのときはよろしくお願いします！　ということで、

霧海正悟でした。

K O N A M I　N O V E L S

おとぎ銃士 赤ずきん

2005年9月14日　初版第1刷発行

著者　霧海正悟
原案　熊坂省吾
発行人　樹下國昭
編集人　内藤收由
発行所　コナミ株式会社
〒106-6114
東京都港区六本木6-10-1　六本木ヒルズ森タワー

制作　コナミ株式会社 マルチメディアカンパニー 出版事業局
担当　川名良昌

イラスト　GASHIN
装丁　田村宏［海月デザイン］
本文デザイン　株式会社エストール

印刷所　図書印刷株式会社

ISBN4-86155-055-6

NM0055

＜書籍の内容に関するお問い合わせ＞
お客様相談室：TEL 0570-086-573
平　　日10:00-19:00
土日祝日11:00-17:00

＜販売・営業、乱丁・落丁に関するお問い合わせ＞
ブックセンター：TEL 03-5775-1581
月～金曜日10:00-16:0



ISBN4-86155-055-6

C0293 ¥933E

9784861550553

1920293009339

コナミ株式会社
定価：980円（本体933円）⑤

OUTLINE



AKAZUKIN

古の時代、世界は神によって二つに分けられた。科学が支配する人間界・エルデと魔法が支配する異世界・ファンダヴェーレ。そして世界には封印された強力な「力」があった。その力「封印の鍵」を宿すエルデの少年・鈴風草太は東京の中学校に通う普通の男の子。幼なじみの女の子に頭の上がらないちょっと頼りない草太に、邪眼の魔女・サンドリヨンと腹心の部下ヘンゼルの魔の手が伸びる。草太の警護をするのは赤ずきん、白雪姫、そしてオオカミ族のヴァルなど、おとぎ話のヒロインたち。
…その熾烈な争いの中、あらたな刺客・グレーテルがツインテールの髪を軽やかに揺らしながら、エルデにやってきた。「封印の鍵」の争奪戦のさなかに、行われたもう一つの闘い。それはグレーテルの赤ずきんへの嫉妬心からはじまった恋の闘い!?だった!!

Naked Little Red Riding Hood